
慟哭の夕緋

水無雲夜斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

慟哭の夕緋

【Nコード】

N5435V

【作者名】

水無雲夜斗

【あらすじ】

都市伝説や七不思議が多く存在する不思議な街、そこに住んでいるごく一般であるはずの不良高校生『碓氷夕夜』は、ある日夕緋と名乗る少女と出会う。彼女との出会いによって碓氷のごく平凡な日常は壊されて行き――

7人の製作スタッフが描く現代バトルラブコメディものリレー小説がついに登場！

放課後の黄昏（前書き）

みなさんお待ちたせいたしました！

長いことやるやる言い続けてやるやる詐欺シリーズになりかけていたりレー小説第一段ついにうpです！

ルールや詳細については活動報告の方で説明しているのでそちらを参照していただけるとよりお楽しみいただけます。

では、今回は丸樽^{まるた}さんの描く序章からスタートです！

放課後の黄昏

起きたら放課後だった。

教室は夕日の赤に染まり、いい感じに青春感を演出していて、今まさに教室の扉を開けて告白シーンが始まるのではと期待感を上げてくれる。

だが、そんな演出過多な教室には起きたばかりでまだ眠いのか切れ長な眼を手で擦り、ボーっと空中を見ている男子高校生、碓氷昨夜ただ一人だけだった。

碓氷はしばらくそのまま机に座ったまま、覚醒していない頭を働かせ周りを確認し備え付けの大きな時計を見る。

時刻はただいま、十八時三十分前。

どうやら、五時間目の後半から今まで誰にも起こされることなく眠り続けていたようで、十九時が完全下校時刻のこの学校ではまだ余裕があるが結構危ない時間だと言える。

碓氷は何でこんな時間帯になるまで誰も起こしてくれないんだよと一人毒つく。

本当は起きない碓氷を教師含めクラス一同が何度も起こしてあげていたのだがそれに一切反応しなかったため、呆れ果ててしまった皆が碓氷をそのままにして帰っていき今の状況になってしまったのだった。

そんなことを知らない碓氷は不機嫌顔のまま、机の横に置いてある鞆を手に取り椅子から立ち上がって教室を足早く出る。

廊下は日が落ちてきたためか、教室よりは少し薄暗い。

その廊下を歩きながら、寝ている間にメールや着信は着ていないかを確認する。

着信はないようだが、結構の数のメールが着ているようでそれを一つ一つ読んでいく。大半が、お前まだ寝てんのかよと言ったからかいのメールであり、辟易しながらメールを読み進め最後の一通。

『碓氷くん、今日は貸してた本の返却日なので起きたら図書室に来てください』

クラスメイトの図書委員からのメールのようで、すぐさま鞆の中の本を取り出し携帯の時計を見る。

「ヤベえ……」

完全下校時間まで、あと十五分。

図書室に行って本を返しては完全に間に合わない。そもそもこんなメールを送るぐらいなら寝ている自分を起こして用件を言ってくればいいじゃないかと事前に教えておいてもらえば今日の休み時間に返せてたじゃん自分勝手な言い訳を頭の中で考える。

しかし、本来なら借りたときに返却日を教えてもらっていながら忘れていたことと昨日あたりにそのことについて言っていたことを思い出す。

そして、未だに來ない自分をずっと図書室で待っているのではと心配になる。

足を玄関ではなく図書室に向けて歩くのではなくダッシュで廊下を駆けて行く。

結果を言うと、さっきの心配は杞憂に終わった。

図書委員の女子はもう既に帰った後で、カウンターにさびしく自分宛で、本は元あった場所に返して置いてくださいと書いてあるノートの切れ端がセロハンテープで留めてあるだけだった。

碓氷はここまで走った体力を返せよと先程剥がした張り紙を床に叩きつけようとして、踏み止まる。

自分が遅れたのもあるのでこれでイーブンだ。

手に持っていた紙を近くにあるゴミ箱にシュートさせて、返す本のある本棚に向かう。

この学校の図書室はそこまで広いものではなく、普通の高校の理科室とかそこの大きさだ。なので、蔵書も多くはなく。あるのは、専門的な誰も読んだことないんじゃないかと思うような薄汚れた本、

今と昔に流行っていた本しか置いていない。

そして、今回借りたの本は友達に薦められた今、若者に流行の本である。内容はどこにでもあるようなもので特に感想もない。そのまま、流行ものを扱っている本棚の元あった場所に返そうとしたところで。

「ねえ、その本返すの？」

と言う声が聞こえてくる。

放課後のしかも完全下校時間ギリギリでもう生徒は自分だけだと思っていたので驚きながら振り返る。

そこには、学校指定の制服を着用し髪を今時小学生にもいないような三つ編おさげの眼鏡少女がいた。正直狙ってんじゃないかと疑いたくなる。

三つ編……全滅してなかったんだ。しばし呆然とその三つ編を見つめるとどうやら自分の声が届いていなかったと考えたのか、

「あの、その本返すの？」

もう一度訊ねてくる。それに少し慌てながらも返答する。

「あつ、えと、返すよ」

手に持っていた本を彼女に見せやすいように掲げる。

「そ、そうなんだ。ええと、その本返すなら私が読んでもいいかな？」

「ん？ この本をか。別にいいけど、図書委員いないぜ？」

「うん、別にいいの。ここで読んでいくから」

「はあ？」

彼女は何を言っているのだろうか。時間はもう完全下校時間ギリギリであり本は無駄に四百ある長編物だ、ここで読んでいたら完全下校時間どころか学校で夜を明かすことになる。それなのに彼女はさらに続ける。

「あ、その、違うの。わ、私図書委員だから勝手に借りること出来るの。そ、それにここの戸締りとかしないとだから」

一気に捲くし立てて説明する眼鏡少女。だが、本来図書委員は自

分のクラスのすでに帰った女子のみで、ここの図書室は完全下校時間が過ぎた後に先生が閉めることになっている。

怪しい。ものすごく怪しいのだが、確氷はそのまま何らかの事情があるんだろうと無理やりに理解して。

「そうなのか、ならこれはお前に渡すよ」

お前と言うのは少々失礼な気がするが、そもそも名前を知らないのではない。

本を手渡しで渡して、速攻で図書室を退出するためドアを開け廊下に一步踏み込んだ所で。

「ありがとう」

聞くだけで表情が分かるような声を聞き、少し照れくさく片手を挙げて呟く。

「……じゃあな」

「うん、またね」

その言葉を交わし終えたところで、完全に廊下に出て玄関を目指す。

結局、名前を聞きそびれたな……、と自分の不甲斐なさを思うが。結構変な子だったしこれ以降は関わらないだろうと結論付け、携帯の時計を確認する。

現在時刻、十九時六分。

完全にアウトになってしまっているようで、急いで校門を目指す。廊下を走る最中、さっきの眼鏡少女を思い浮かべるが、そのまま止まらず走り続けた。

結局、門を閉めようとしている先生に偶然出会いお小言を少し貰ってから、もうすでに暗くなってしまった帰路に就くのだった。

放課後の黄昏（後書き）

毎回メンバー変わっていくので文章や視点がちよいと違ったりしますがその辺についてはご了承ください。

次…伝説の始まり（からあげ）『水無雲夜斗』

この小説は一週間に一度の定期更新となっております。

日常からの脱線 1 (前書き)

今回は僕こと水無雲夜斗の出番です。

日常からの脱線 1

眠い……。

午前の授業、3時間目。机に突っ伏してぐでぐでとしながら授業を受けている少年『確氷^{うすいゆうや}夕夜』がこの授業に対して抱いた感想は、ただ眠いということだけだ。もしこの授業について感想文を書けと言われても『眠い』の2文字だけで終わらせられる自信もある。

しーんと静まり返った教室に、ゴリラのような体格をした男性教師の声が響き渡る。時々意味不明な言葉^{はな}を放っているところから推測するに、どうやら今は英語の授業をやっているらしい。

カツカツとチョークが黒板を叩く音が心地よい。この音が確氷を更なる眠りへと誘^{いざな}う。

正直こんな中で顔を上げて必至にノートを移しているヤツらの気がしれない。別に確氷は睡眠不足というわけではなく、高校生として必要な睡眠時間である約7時間はどっぷり眠ってから登校しているはずなのだが、それでも眠い。

これは一種の睡眠薬だ、と確氷は思う。例えるなら、電車に乗っている、その振動と音のせいでどんどん眠気が浮き出てくるのと同じような感覚だ。

あれは科学的に証明されているため、納得せざるを得ないが、授業中に眠くなる現象についてはまだ科学的に解明されてはいない。いっそ眠くなるヤツと眠くならないヤツの違いを研究して、そこから寝ないように工夫した授業をできるよう教職員達を再教育した方がいいのでは。と確氷は思ったが、単純に考えてみると寝るヤツと寝ないヤツの違いなんて『集中力の差』の一言で証明できてしまうので、教職員の再教育はあまり効果がないだろうと確氷は結論付ける。

と、そんなくだらないことを考えている間に、彼の眠気は既にピークを迎えようとしていた。おそらくここで起き上がっても授業に

集中することはできないだろうと判断した碓氷は、ゆっくりとそのまどろみに身を任せ――

「碓氷くん、うっすいくんってばー！」

――ようとした時だった。突然横合いから小さな声を掛けられた。

気だるい体を強引に起こし、声がした方を見ると、そこにいたのはカチューシャをつけるような位置にリボンをつけて、頭を装飾したクラスメイトがいた。

彼女の名前は『逢瀬優夏』。

クラスの中ではどちらかというと優等生に分類される彼女だが、今まさに眠ろうとしている不良生徒を叩き起こすような委員長タイプの人間ではない。つまりここで湧いてくる疑問は、何故自分は起こされたのか、ということだ。

碓氷は眠気を紛らわすために頭をボリボリと掻いて、

「何だ、こんな授業中に誰かと思えば逢瀬か・・・」

「うわー、わー、授業中にも関わらず寝ようとしていた不良生徒に言われたくはないセリフベスト3に入るようなこと言っちゃったよこの人！ 大体私は碓氷君の内心点が下がらないように気を遣って起こしてあげたのにその言い方はちょっとひどいんじゃない？」

「お気遣いどうも。つかお前がそんな理由で俺を起こすわけないだろ、何がお望みだ？」

「おー、さっすが碓氷君。中学の頃から付き合ってるだけあって私のことよくわかってるね、それでこそマイダーリンというものだよ」

「付き合っただけはいるが交際してるって意味で付き合った覚えはない」

「そんなこと言っちゃってほんとにはうれしくせにー、こんなにかわいい彼女日本中探しまわってもそういないぞこのこのー。しかもそんな子が隣の席だなんて日本中の童貞に追い回されてもおかしくない状況だよ！」

まるでマシンガンのように言葉を繰り出す逢瀬。

対し碓氷は面倒臭そうな表情を浮かべて、

「・・・いいからさっさと要件を言ったらどうだ？」

「おおっとそうだった」逢瀬はコホン、と一つ咳払いをして、「碓氷君ってさ、都市伝説とかは信じる派？」

「何とも唐突だなおい、つかそれ授業中にするような話か？」

「まあまあいいから答えたまえよ碓氷クン」

と、にこにこ笑顔で促す逢瀬。

碓氷は一つため息を吐くと、少し考えるような仕草をして、

「どっちかつーと信じない派だな」

「おお、これは珍しい。この不思議が溢れた街の中に都市伝説の類を信じない人間がいるとは。もしかして碓氷君って相当ひねくれてる？」

都市伝説を信じないと言っただけで何故にひねくれ者扱い？ と思ったが、口には出さず心の中に留めておく碓氷。

そんな碓氷の心情を知らない逢瀬は、楽しそうな調子で続ける。

「まあ信じる信じないは別としてさ、今この学校である都市伝説が流行ってるんだ、その名も『放課後、図書室に現れる謎の少女』！！」

「・・・それってこの学校限定だから都市伝説じゃなくて七不思議に分類されるんじゃないか？」

「おお、言われてみれば。流石碓氷君！ そこに気付くとは私のダーリンなだけはあるね、こういうことがある度に惚れ直しちゃう仕様？」

いやだからダーリンじゃねえから、とツツコミを入れる碓氷。逢瀬はそれを無視して続ける。

「この際都市伝説か七不思議かどうかは別としてさ、最近いるんだよ。放課後、図書室に行くとこの学校の制服を着た女生徒が。でもね、不思議と彼女を知ってる生徒はいないんだ。前に3年生がグループで似顔絵まで描いて聞き込み調査を行ったんだけどね、知っ

てる人は誰1人としていなかったんだって」

「そういやなんかやってたな、似顔絵がアニメっぽい描き方だったからよくわかんなかったけどさ」

「おや、確氷君もやはりあの聞き込み調査の被害者だったんだ。」

と、それは置いておいて、どうどう？ この都市伝説確氷君的にはどう思う！？」

「所詮は都市伝説だろくっだんねえ」

と、適当に吐き捨てると、逢瀬は『あらら、この話題は確氷君向けのものではなかったかな？』などと呟いて勝手に授業に戻る。

確氷も確氷で再び眠ろうかと思ったが、そこでふとあることを思い出した。

昨日の放課後、借りた本を返しに図書室まで行った時に出会った三つ編の少女。あの時の少女がそうなのではないかと。

(まさか、な・・・)

確認のために脳内であの時の似顔絵と昨日の少女の特徴を照らし合わせようとしたが、どうも似顔絵の方が思い出せない。興味がなかった故にほとんど見ていなかったのと、あれから数日経っているためか思い出せなくなってしまったらしい。

思い出せないのなら仕方ない、と確氷は思考を停止し、小腹が空いたので適当に教科書類を積み上げて机の上の物が見えないようにすると、鞆の中からコンビニ弁当をすばやく取り出し、蓋を開け、割り箸でからあげを一つ摘まむと、それをそのまま口に運ぶ。

口をもぐもぐと動かしながら、ふと窓の外を見る。

それにしても、あの少女は一体何だったのだろうか。自らを図書委員と称していたが、今になって思い返せばそんな風には見えなかったし、図書委員が全員帰ったというのに一人だけ残って閉館時間ギリギリまで本を読み続けようとしたのも気になる。

そもそも、この学校の委員会の類は必ず二人以上のグループで動くのが基本だ。それなのにあの少女だけが図書室に残って一人で仕事をこなしていた、というのはどこかひっかかる。

やはり、あの少女は噂の都市伝説―（もとい七不思議？）―に出てくる少女そのものなのだろうか。それともいろいろ事情があつて偶然一人で残っていたただの図書委員だったのだろうか？

「確氷くん？　おい、うつすいく〜ん」

などと考え事をしていると、再び横合いから小さく声が投げられる。もちろん声の主は先程まで都市伝説についてアツく語っていた逢瀬だ。

確氷はうんざりとした表情を浮かべると、

「今度は何だよ、この学校に古くから伝わる七不思議の一つ、誰もいない音楽室から鳴り響くピアノみたいな話でも始まんのか？」
言いつつ、視線をそちらに向けると何か白いものがあつた。よく見るとその白いものは繊維のようなものでできていて、なにやらゴツゴツとしたものが下から浮き出ているようにも見える。

ゆっくと、顔を上げるとそこにあつたのはやはりゴツゴツとしたゴリラのような顔（無駄に笑顔を浮かべているところが余計に怖い）。

白シャツにゴリラのような筋肉質。その見た目から『お前どう考えても英語じゃなくて体育の教師だろ！』とツツコミを入れたくなってしまうが、ツツコんだ者が辿る末路は大体同じだ。

ちなみに、確氷はこの学校で最初にツツコんだ生徒で、さらに不良なためか、この教師にはよくお世話になっている。

だから、この後自分がどういう末路を辿るのか大体予想が着いていた確氷は、ただ無言で滝のような汗を全身から垂れ流し、そして心の中でこう呟いた。

（あばよ俺のコンビニ弁当。カラアゲ、うまかったぜ・・・。）

その後、ゴリラ教師にしょっぱかれてどこかに消えた確氷は放課後になってやっと教室に戻ってきたが、空白の時間に何があつたのかを知る者はいない。

日常からの脱線 1 (後書き)

ルールの一人一キャラ縛りはかなりキツいですね。

最近はかなりキャラも増えてきてかなり楽ですがこの頃はもう・・・

w

次回…ロリータ(21) どうしてこうなった・・・orz

↓次は白川先生と神無月先生の番です。

日常からの脱線 2 (前書き)

今回はちょっと特殊な事情により3番手の白川さんの分と4番手神無月さんの分を繋げて投稿しちゃってます。

日常からの脱線 2

「ふう……。散々な目にあった……」

教室に戻ってきた碓氷はそのまま机に崩れ落ちた。

「うつすいくくん。かっえっろっ！」

そんな碓氷の状態を特に気にかける様子もなく逢瀬は碓氷に話しかける。

「……。なんでだよ。友人はどうした？」

「たまには碓氷君と一緒に帰ろうと思って」

その態度に碓氷は不機嫌を隠す様子もなく尋ねるが逢瀬は気にした風もなく返した。

答えになってないと思いながらもそれを言葉にせず、新たに浮かんだ疑問を口にする。

「……。そんなに暇してるのか？」

「まあそんな所。いいから帰ろっ！」

逢瀬が少し不機嫌になったが自分には関係ないと判断した碓氷は鞆を掴みそのまま教室を出た。その後には当然のように逢瀬がついて来たわけだが。

逢瀬の話聞き流しながら碓氷は昨日の事を思い出していた。

（やはりあれはおかしいよなあ……。つっても逢瀬に話すわけにもいかないしな……。）

やけに楽しそうに何かを話す逢瀬を横目で見て小さくため息をつく。

（どうしたもんかなあ……。ん？）

このもやもやをどうしたものかと考えていた碓氷は通りかかった林の中からこちらを覗く少女を見つけた。

（あの娘……。あんなところで何を？）

立ち止まってよく見ようと顔を向けると少女は既にいなくなっていた。

「ん？確氷くん、どうしたの？」

急に立ち止まった確氷に気づいた逢瀬が振り返り尋ねると確氷は既に走り出していた。

「すまん、逢瀬。先帰っててくれ。」

確氷はそう言い残して林へ向かって駆けていった。

「え？あ、ちょっと！・・・どうしたんだろう」

自分でも何故追いかけているのかわからないが、確氷は彼女を追いかけないといけない気がしていた。

「ハア・・・ハア・・・いた！」

少女は林の中でも特に大きな樹の前で立ち止まっていた。

「君・・・。」

「・・・夕緋。」

確氷が話しかけるのを遮り少女が呟く。

「は・・・？」

「・・・名前。・・・夕緋。」

確氷が意味もわからず声を上げると少女ー夕緋が自分の名前だと告げる。

「え？あ、ああ。俺は確氷夕夜だ。」

「・・・夕夜。・・・待ってた。」

確氷が名乗ると少女は確氷の名を噛み締めるように何度か呟いた後、確氷を見つめてそう言った。

（・・・今なんて言った？待っていた・・・？俺をつて事か？何故・・・？）

夕緋は確氷をただ見つめているだけだった。

思考を巡る疑問に首を傾げながら、確氷も夕緋を見つめる。

見た目10歳くらいの小さな女の子。白いワンピースから伸びる両腕と両脚は、ひとひねりで折れてしまいそうなほどに細い。長い髪を後ろで1つにまとめていて、それはいわゆるポニーテールという髪型である。

確氷はじつくりと容姿を確認するも、やはりこの少女に見覚えはなかった。

けれど彼女は、自分を待っていたと言う。

その理由も、彼女の要件も分からない。

(……まあ、聞いてみればいいか)

分からないものはいくら考えても分からないのだから仕方ない。そうして確氷が尋ねようとする、

「……あらかじめ、教えておこうと思って」

確氷の胸中を察したかのように、先に夕緋が口を開いた。

囁くような声量だったが、人もいなければ風もない林の中なので聞き取れることはできた。

「……近いうち、夕夜の日常が壊されるわ」

「……え？」

突如放たれた不穏な言葉は、すぐに理解することができなかった。

「……決して小さくない渦に巻き込まれて、夕夜はもがき苦しむの」

まるで記載された事項を音読するような、淡々とした口調。訳も分からず胸がざわついて、落ち着かない気分になる。

「……最初は苦労も多いと思う。普通はしないような体験をして、怖くなったりするかもしれない」

不意に、確氷は今いる場所を意識した。夕緋の声以外に音がなくて、自分たち以外に動くものがない、この不安なほどに静寂なる空間を。

「……でも、安心して。きっと、夕夜の日常は取り返せるし、戻ってこれるから」

——それだけで話は終わりなのか、夕緋は口をつぐんだ。

それきり、お互いに身動き1つしなくなる。いや、2人だけではない。風が吹かないせいか、林の枝葉もまた、1つとして揺れ動くことがない。

沈黙……というよりは、純粹な『静』が2人を取り囲む。

感覚的には数十分、実際は数十秒の時間が経過した頃、碓氷が『静』を破った。

「お前……」

ゆっくりとした歩調で、碓氷が夕緋に近寄る。夕緋は動かず喋らず、無反応を維持。

碓氷が彼女のすぐ目の前に立つ。

そして……その小さな額に、手を当てた。

「ひよっとして、熱でもあるんじゃないのか？」

「……………」

「ううむ……こうして他人の熱なんて計ったことないからよく分からんなあ……。いてっ」

ぺしっ、となんだか不愉快そうに手を払い除けられた。

つい痛む箇所を擦るものの、そんなのは不要であつたらしく、痛みはすぐに引いていった。

「……一応、教えたからね。これあの局面に佇んだ際、少しでも冷静になりやすくなればいいのだけれど」

少女が背を向けて、林の奥へ進み始める。

「あ、おい！　ちよつと待——わぷっ」

碓氷が少女を追おうとした直後、突風が吹きぬけてその流れに乗った葉っぱが顔面に襲いかかってきた。

貼り付いた葉っぱを払い落として目を開けた時には、既に夕緋の姿は跡形もなく消えていた。

「え？　いつの間に？」

足音は全く聞こえなかった。突風の唸り声や葉の擦れる音があったとはいえ、走り去ったのなら普通気づくはず。

もしかして木の裏に隠れているのかと考えてそこら辺を歩き回るのが、目的の人物はどこにもいなかった。

「んー……なんだったんだ、一体……？」

狐につままれたような心持ちで立ち尽くしながら、少女の言っていたことを思い出す。

漠然としていて、現実味がなくて、信憑性もない話だった。正直なところ、相手は子どもだし、適当なことを言ってからかわれたと判断するのが妥当だろう。

しかし、碓氷はどうしても、彼女の荒唐無稽な発言を一笑に付すことができなかった。

無論、彼女の話信じるか信じないかと問われれば、考えるまでもなく信じないと答える。

ただ、程度の問題なのだ。

夕緋の話を聞き終えたとき、頭の隅で確かにその話を受け入れている自分がいた。そのことに言いようのない戸惑いを覚えて、少しの間だが体の自由が利かなくなった。

ある程度整理がついて冷静になると、やはり馬鹿げた話だと思つて、つい相手の容態を心配してしまった。

今だって馬鹿げた話だと思っている。しかし、何故かあの話の全部を否定する気になれない。

自分は、一体どうしてしまったのだろうか。

「……まあいいや。やっぱり考えても分からんことは、いくら考えても分からんし……さっさと帰ろう」

さっと踵を返す。が、すぐにぴたっと止まる。

「……………あー…………」

碓氷は、一度木々の屹立する空を見上げて、次に周囲に首を巡らした。

林の中なのでやはり樹木以外何もないが、視界に映っているのは夕緋の話を聞いていた場所とは異なる光景だ。彼女を探すために歩き回って自然と立ち止まった位置に、自分はある。

なんとなく後頭部を掻きながら、碓氷はやや途方に暮れた様子で呟いた。

「……帰り道、どっちだっけ…………？」

日常からの脱線 2 (後書き)

名前を見てももらえればわかる通りヒロイン登場ですね、正直超はやいですね W

この子がどう慟哭するかなんて全く予想もつかないです W

次回…一番キャラ濃い人登場

感想・ご意見などあれば遠慮せずにどんどん書いちゃってください！

日常からの脱線 3 (前書き)

今回は友月義人さんの番です！

読み方は「ともつきあきと」さんですよ？ W 決して「なんかヘド
ロとかそんなもの」さんではありませんからね W W

日常からの脱線 3

「クハッ！」

俺は木の上から見ていた少女の行動を目の当たりにして、ついつい噴出してしまった。その様子を見て少女――夕緋が俺を睨みつける。

「おっと失礼」

俺は木から飛び降りると、少々不機嫌な様子の夕緋に近づいて会話を試みる。

「夕夜君だっけ？　へえ、彼がそうなのかい？　中々面白そうな子じゃあないか。どういう子なのかなあ？　楽しみだよ」

しかし、いつもの事ながらこの無口で無愛想な少女は俺と会話をする気は無いらしい。夕緋は俺の前だと一切と言っていい程言葉を発さない。

周囲から見るとひたすら喋り続ける男と一言も発さない女の子という非常にシュールな光景になっている事だろう。

「まあ、知っての通り、彼についての情報なんてとづくに揃ってるんだけどね。何なら家庭環境や交友関係、普段の行動パターンからちよつとした癖まで愛しの彼の情報を君に教えてあげてもいいよ」
♪

再び俺を睨み付ける夕緋。

「怖い怖い……そんな睨みつけるなよ、おにーさんは怖くて泣いちゃうぜ？　……まあ冗談はともかくだよ。彼が特別とは言え、まさかいきなり君が会いに行くとは思ってなかったから聊か驚きを隠せないんだよ、俺は。ぶっちゃけ、予測の範疇かそうでないかで言えば予測内ではあるんだけどね」

夕緋は俺を睨みつけたまま、やはり何も言わない。段々と会話そのものが面倒になって来たので本題を伝える事にした。

「最初は俺が相手するよ」

夕緋の表情が強張っていくのがわかる。その表情があまりにもおかしく感じられて俺は思わず腹をかかえて笑ってしまった。

「クハッハハハ！ いいね、最高だ！ 普段、無口無表情で一体何考えてんだかわかりやしないって言うのに……たった一言でここまで判り易く表情が変化するものかよ！ 全く傑作だ！」

「……………！」

夕緋を中心に大気が歪んで行くのを感じ取る。

「おっと、やめておきなよ。止めるにしても俺相手に実力行使ってのは少々浅はかと言えないんじゃないかな？ 第一に今の君に過去程の力は無いじゃない？ まあ、最も君の全盛期ですら俺に勝てる見込みがあったかわからないけどね」

俺は無用意に夕緋に近づくと彼女の髪を片手に弄る。

「で、どうするの？ 殺り合う？ まあ俺としては構わないんだけど、どうせなら俺相手に懇願する君の姿を見るのも乙なモノと思ってるんだけど、そっちのコースとかどうかなあ？」

と、夕緋の周囲の空気が変化したのを敏感に感じ取って俺は後ろに下がる。どうやら少々弄り過ぎたようだ。

「冗談だよ、冗談。まあ、君に懇願されたって止まる気は無いけどね、俺、君の事嫌いだし。つかさあ——」

俺は夕緋の喉元に不可視の剣を突きつける。

「君だけがパンドラの箱の所有権持つてる訳じゃないよ」

数秒……俺と夕緋はその状態のまま睨み合った。

「……………クハッ！」

馬鹿馬鹿しい。そう思って、俺は剣を消した。

「んまあ、君とは目的は違う上に犬猿の仲だし、正直今すぐ死んで欲しいって思ってるくらいだけど、今はまだ利害が一致してる訳だからね、協力はするよ。ただまあ……方法までとやかく言われるつもりは無いねえ……」

俺は軽く跳ぶと、何も無いはずの宙に地面と逆さまの状態で立つ。
「ま、とりあえずは安心しなよ。俺にとっても彼は必要な訳だし、

うっかり殺したりはしないって♪」

それだけ告げると、俺はそのままの状態で夕緋に背を向けて宙を歩く。

「さてと、とりあえずは〜♪」

ウエストポーチから一枚の写真を取り出す。

そこにはカチューシャを付けを付ける位置に大きめのリボンを付けた女の子の姿……確か名前は逢瀬優夏だったかな。

「この子でも利用して誘き出すかな？」

初めてのパンドラの箱との出会いを想像すると口がニヤケて来る。碓氷君はどんな表情をするかなあ……。焦燥感……。絶望に歪んだ顔？ まあどんな表情してても彼は俺の敵になるだろう。

ああ、最高に気分がいい。

長年この街で暮らして来たが、やはりこの不思議に溢れた街は面白い。

時にはこんなプレゼントをもらえる。

だからこの街から離れられない。

「最っ高だねえ……。最高だ……。！」

つつい口から言葉が漏れる。

「この街もこの人間も皆最っ高！」

そうだ。

俺はこの街と共に生きてこの街と共に暮らし、この街の為に生き、俺の為に街は存在し続ける。

俺が街であり、街が俺だ。

「クッハハハハハハ！」

世界なんてどうでもいい。街が無事ならば。

誰が死のうがどうだっていい。住人が無事ならば。

ああ……。最高のプレゼントだ……。

「素晴らしいプレゼントだ、神様……」

無神論者だが。

「さて、行こうか。警鐘を鳴らしに……。！」

俺の名はシグナル。色はグレー。ただの信号――

日常からの脱線 3 (後書き)

こちらでも遅れてしまいました。本当に申し訳ありません。
言えない、うp忘れてプレメモやってたなんて言えない・・・orz

次回..チャット犠牲者その2
職場に停滞ムードが・・・w

日常からの脱線 4 (前書き)

今回は翡翠さんの番です。あと一人で一周しますね W

日常からの脱線 4

「やっと出れた・・・。」

あの夕緋と名乗った少女のよく分からない話を聞いた後、林を出るのにかかった時間は15分ほどだ。景色が変わるわ、そのせいで方角は分からないわで迷ってしまったのだ。林も意外と深く、夕日なんて届くはずも無い。仕方なく携帯電話の地図機能を起動してやっと外に出ることが出来た。圏外にならなくて 本当に助かった。

（それにしても、ここ2日・・・図書館で三つ編み、今日は林で電波話か・・・まあ関係ないだろうが・・・。）

夕緋との話を思い出し、まあ大したこと無いだろうと結論付ける。彼女の話の全否定する気になれなかったが、かといって肯定する気にもなれない。というより信じるには信憑性がなさ過ぎる。

「ウダウダ考えても仕方ないし、帰るか。」

やっとの思いで道に出れたので、そこからまっすぐ家に帰る予定だった。

「よう、確氷じゃないか。しょっ引かれたあとどうなったのか教えてくれよ。」

「黙れ天月。んなことよりゴリラに没収された分の唐揚げ弁当奢れ。」

話しかけてきたのはツンツン頭の少年・・・天月響矢だ。あまつきぎょうや同じクラスで風紀委員をやっている。とてもそんな性格でもないし、成績でもなく、何で風紀委員会を勤めているのか、謎である。

「いや、ソレは無い。そういえば逢瀬がお前のこと探してたぞ。『マイダーリン見てない？』とか言ってた。もうお前ら結婚しろよ。」

「そうか、ちょっと齒あ食いしばれ。」

「悪い、冗談だって。ところで、なんで林から出てきたんだ？」
そこを聞かれると返答に困る。流石にこっちみてた女の子が気に

なったので林の中にホイホイ行ってしまったとか言いづらい。

「まあいいや、どうせ都市伝説が気になったんだろ。」

天月は歩を進めながら疑問を自己解決する。

またその話題か……。正直うんざりする。授業中の逢瀬もだが、どういつもこいつも好きすぎるだろ。都市伝説。

「いや、知らん。というか都市伝説って図書館のやつだけじゃなかったのか？」

まあ、あっちはどちらかと言うと七不思議に分類されると思うが……。

「あ、それは知ってるのか。まあ信じるも信じないも好きにすればいいけど聞くか？」

言われると気になってしまう。本心から都市伝説とかそういうのには興味は無いが、図書館の一件があるので気にならないといったら嘘になる。

「この林にいる女の子の話なんだけど……」

「え……？」

「稀に現れるその女の子に会うと、会った人の日常は壊される。

どんな形かは分からないけど、不幸な目に合う人もいるらしい。・

・とかなんとか。俺も噂で聞いただけだからよく覚えてないけどな。

」

どういうことだ……。たしかあいつも俺の日常が壊されると

か言っていた。そして戻ってこられるとも言っていた。分かることはあの子の言っていることが都市伝説と一致していることだけだ。

「つーか今の話知らないのに何でそっから出てきたんだ？」

リアルに都市伝説の子に会ったとか言っているのだろうか。絶対ダメだろ。なんか適当ないいわけを……

「そこで小銭見つけたんだよ。」

「マジか。それで唐揚げ弁当買えばいいだろ。」

適当な嘘をついたら案外簡単に騙されてしまった。もう少し疑われることも覚悟していたのだが……。ただ、唐揚げは自分で買う

しか無さそうだ。正確には唐揚げ弁当だが。

そんなことを話している間に林からは大分離れ大通りに出た。

「確氷ー俺ちよつと買うもんあるからじゃあなー。」

「ああ。じゃあな。」

日常からの脱線 4 (後書き)

だんだん日常キャラが充実してきましたねw
まあ日常キャラを出す＝犠牲者という概念ができあがりつつあるの
ですが・・・w

次回…ヘンな人

確か、そんな人だった気がする・・・

日常からの脱線 5 (前書き)

すみません本当にすみません！

うp遅れました、定期更新などと言っておきながら一日も遅れてしまったことについて深くお詫び申し上げます。

今回は『魄』さんの番です。

日常からの脱線 5

天月と分かれた俺は、一人帰路に着いた。

今日はなんだか疲れる日だ。

そんな事を思いながら……俺はただいつも良く歩く通りを歩いていた。

ただ……いつも通る道だからこそ、今俺の目の前にある違和感に気がついた。

「なんだ……この店」

後数十メートル歩けば自分の家。

もう目と鼻の先に安らげる自分の家があり、色んな出来事があった今日は正直直ぐにでも家に入り、自分のベットの上で横になりたい気持ちではあった。

「……こんな店、こんなところにあったっけ？」

そう呟きながら店の前に立つ。

俺の目の前にあるのは、黒い外壁にとろどところに赤い模様がついている……お洒落なカフェのように見えた。

……から揚げ弁当は、明日でいいか。

そう思わせるほど、その店は回りの家々には無い、独特の雰囲気放っていた。

俺はゆっくりとドアを押し開けた。

「……っらっしゃーい」

こなれた感じの店員の声。

内装は思った以上にシンプルで、そして純粹にカッコイイと感じれる者だった。

俺はカウンターに歩み寄りながら店員に声を掛けた。

「ここって何時出来たんですか？」

「ここ？ 昨日工事が終わって、今日初開店だよ」

「カッコイイ内装ですね」

「……ありがとう。君がこの店の第1のお客さんだよ」

そんな、ちょっとテンションの低い店員と他愛も無い話をする。外はだんだんと暗くなり始め、俺は普通にカフェで初の客という事で特別に一つ奢ってもらっていた。

……まさか、こんなカッコイイ店に唐揚げ定食が出て来るとは、俺は思わなかった。

食べ終わり、辺りもすっかり暗くなった午後6時ごろ、店員は俺が食べた食器を洗いに奥に行ってしまう、俺は一人ポツン……と座っていた。

「……ここ、いい所だなあ」

そんな事を呟きながら……。

俺がそんな事をして、ボンヤリと着たばかりの店でくつろいで入

ると、ドアが開いた。

店員さんは戻って来る気配は無い。俺は首だけドアの方に向けた。

……向けて、そのままその“人”を凝視してしまった。

入ってきたのは、黒い上下のスーツに中の黒っぽい普段なら見る事の無い色のワイシャツ。そのいった“黒” 尽くめの中で飛びきり目立つ、赤いネクタイに赤い手袋、はたまた赤いシルクハットを被った、身長が高めの男性だった。

……一瞬じゃない、完全に“見とれて”しまった。

俺は意識を戻し、首を軽く振った。

あれは男じゃないか。なに見とれてんだよ俺！

その男性はゆっくりと、黒のローファーを床に鳴らしながら、

カッン カッン

と席に座るわけでもなく俺に近づいて来る。

相変わらず店員は戻ってこない。

俺はその“人”とは思えない風貌の男性を間近で見ながら、つばをゆっくりと飲み込んだ。

「あの子に会ったのか……」

何を言って……いるんだ？

「まだ無自覚とは……まあいい、“今”からお前に一ついい事を教えてやろう」

なんだ……？ 声が出ない。この場の空気自体を支配されている感じ。あのゴリラ教師よりもっと……別の怖さが体の奥から沸きあがって来るのを感じた。

「お前、死ぬぞ？」

突拍子も無い事を言われて、だけどそれに対して何も言う事が出来なくて……正直、今日こういう事がありすぎるだろ。と、ただボンヤリと考えるだけになっていた。

「ハッ、お前が死のうが何しようが俺には関係無いんだけどね」

そう、さっきよりかは幾分軽い調子で言った……その瞬間だった。

「お前が“死ぬ”事自体は簡単なんだよ。何故かって？ 俺が今“この場”でお前を殺せばいいだけの話だからな。なあ……“碓氷夕夜”君」

俺の喉元にあるのは……どこから出したか分からない刃物の刃先が1つ。

一瞬の出来事だった為か、俺は驚く事も何する事も分からず、ただ矛先を突きつけられているだけだった。……正直に言おう、若干漏らしそうな心境なんだが。

「んで、お前はどうしたいんだ？ “生かされる”かこのまま俺……」

…じゃない別の誰かに“殺される”か……」

俺は、若干の涙目を浮かべながら生きたい……と、声は出せなかったが首を振って伝えた。

「まあ……よく考えろよ？ 俺から“情報”を受け取るという事は、俺の“情報”によって“生かされた”と同意義なんだ」

そう言っつてその男性はゆっくりと刃先を俺の喉元から離し、適当に地面に投げ捨てた。

「さて……“生かされたい”と言う碓氷君には、今現在置かれている状況について少しばかり教えてあげよう。ああ、勘違いするなよ？ 今俺が教えるのは“お前”が現状知っている事に“補足”を加えるぐらいだ」

店の雰囲気、この男性が入って来る前の状態に戻り、出そうと思えば声が出せる状態にはなった。……ただ、もう既にしゃべる気力などは無かったが。

「さてさて、今この“街”で起きている事は、謎に包まれた嘘か真かの“都市伝説”なんかじゃない。それと、君はもう既に逃れられない事に包みこまれている。程度かな。ああ、お前が死ぬって事態はもうしばらくはない。と言っつても、明日、明後日ぐらいまでだが」

……意味深な事を言っているから、もつとちゃんとした情報が来るのかと思っていた。

しかし、そんな若干まじめに話してくれている中、俺は我慢できずにその男性に初めて言葉を発した。

「……トイレ、行かせて貰って良いですか」

これを聞いたその男性は腹を抱えて笑い、俺をトイレに行かせてくれた。

あの刃先を受けてもれそうになった尿意を慌てて解消し、カウンターに戻った時には……もう既に“人”かどうかさえ、怪しみはじめたあの男性の姿はどこにもなかった。

「時間は大丈夫なんですか？」

そう店員に話しかけられるまで、ただボンヤリとドアを見ていた俺は、慌てて時計を見て、7時半を回っている事を確認し急いで店を出た。

月明かりにが夜空で輝き、街灯が数十メートルの道を照らす中、俺は若干小走りになりながら空を見て、ボンヤリと思った。

……月が、今日は何でこんなにも“紅い”んだろうか……。

日常からの脱線 5 (後書き)

うp遅れた理由ですか？

べ、別に忘れてたわけじゃないんだからねっ!!

(詳細は後で活動報告に記載しておきますw)

感想などございましたらどしどし書き込んでください!!

行間一（前書き）

久しぶりにこの時間にうp。
今回は丸樽さんの二回目です!!

行間一

光が全くといっていいほど入らない林を奥へ、さらに奥へと入った先にその展望台はあった。

それほど大きくもない展望台には、窓は割られ所々にひびが目立つ小さな教会がある。管理人が息絶えてから数年経った教会はまだその姿を残してはいるが、街の住人達からは完全に忘れられてしまっている。

果たしてここに教会があることを知っている人はどれ位入るのだろうか？

教会と同じように、古くなり雨水の影響で赤錆に盛大に侵されている落下防止用の柵を嫌がりもせずに握りしめながら、少女。麻野^{あさの}夕緋^{ゆうひ}はそんな疑問を浮かべる。

夕緋は教会を横目で見て考えるが、興味がなくなったのか、直ぐに目の前に広がる街の夜景を見下ろす。

ここは昔、綺麗な夜景を見れるデートスポットとして有名だったのが、何時しか人が来るのも疎らになり、今では思い出したかのようにくるカップルしか来なくなってしまうていた。

そんな展望台から見える夜景は当時と変わらず。街は美しく人間の輝かしい発達を照らし出している。

景色をしばらく考えなしに眺めていた夕緋はおもむろに顔を、空中に浮かぶ真っ赤に輝く月を見上げる。

科学的には、赤い月というものが存在することは証明されているのだが、今宵の月はそんな科学の証明を忘れるほどに幻想的で見た人を狂わせるように赤く、紅く、緋く染め上がっていた。

高台に位置する所に展望台があるからだろうか、夜風が絶え間なく夕緋を包み、髪を揺らす。前髪が眼の前を通り過ぎ、視界を悪くさせる。それでも赤い月を見続ける。まるで、何かに祈るように。

そこに、これまでのより一段と強いものに夜風が吹き強制的に眼を閉じることになる。

後ろのほうでは、この展望台を囲むように生えている林の葉が耳にやさしくない音を奏でる。

葉の擦れる音はしばらく続き、習うように夕緋も眼を閉じ続ける。音が徐々に弱くなり、それに合わせて眼を開けていく。

音が止み、夕緋が眼を全開まで開けた。その時、

「そう言えば、今日でしたね」

唐突に夕緋の真後ろから声を掛けられる。

とっさに反転し相手が誰なのかを確かめる。

そこにいたのは眼鏡と今時珍しい三つ編をしている少女だった。他に特徴を挙げるのならば、胸元のボタンを壊さんばかりに実った胸と夕緋が今心配している少年が通っている学校の女生徒の制服であったことと林を抜けてきたくせに新品同様に不自然なくらい綺麗な靴だろうか。

少女は警戒している夕緋を全然気にせずに挨拶をする。

「こんばんわ、夕緋ちゃん」

自分の名前をちゃん付けで呼ばれたことに不快感を覚えるが、夕緋は顔には出さずに少女の名を言い当てる。昔から知っている名を。

「……………近衛この」

「いやだなく、フルネームじゃなくて、このちゃんかこのたんつ
て言ってくださいよ。古い仲間じゃないですか。あつ、でも出来ればこのちゃんがいいんですけどね」

さらりと笑顔で理不尽な要求をしてくる近衛。笑顔は赤い月で照らされているためだろうか、どこか狂気じみているように見える。

しばらくの沈黙。

先に喋り始めたのは、やはり近衛だった。

「そう言えば、今日でしたね」

先ほどとまったく同じ言葉を繰り返し、続ける。

「そう。今日は、碓氷くんが事件に巻き込まれ……いや、中心は彼になるのかな？ まあ、いいですが。その彼がある種の覚醒をする日……。ですよね？」

夕緋に対して、今日という日がどんなものになるのかを、全く崩れない笑顔で問う。

一方の夕緋は対抗するかのようにこちらにも全く崩れない無表情の

まま、

「……………用件は何？」

問いに問いで返し話の流れを強引にぶった切る。それでも近衛は笑顔を微笑みを絶えさない。

「用件がなければ会いに来ては駄目なんですか？」

再び、問いで返さる。お互いがお互いを牽制しあうため、一向に話が進もうとしない。普段の夕緋ならば、ここでまた沈黙になってもどうとも思わないだろうが。今日という日が影響しているのだろうか、近衛にイライラを覚える。

近衛のほうは、そんなことに一切気づかないように、また問いかけをする。

「あれ？　今日はシグナルさんと一緒じゃないんですか？」

さっきから、質問が多すぎる。こいつは昔から好奇心旺盛なためか、何で？　どうして？　とうるさいやつだ。と内心で嫌味を垂れる。

「……………シグナルは……………あいつのところに行った」

「ああ、シグナルさんからなんですか。何時もは、夕緋ちゃんの周りを飛び交うようにひっついていたので、姿がないから驚いちゃいました」

少しばかり会話が成立する、それを利用して夕緋から話を切り

出す。

「……………ここらで聞いておこうと思う。あなたはどっちに付くの？」

質問。これで何度目になるのだろうか、数えてないので分からないがこれだけは絶対に流せない。これからの事が掛かっているのだ。有耶無耶にされるのではなくハッキリとした解答が欲しい。

近衛もそんな夕緋の質問に隠されている、思いを読み取ったのだろうか。

笑みを崩し。こちらが無表情ではないが真剣なものに顔を変える。

「どちらに付くとは……。どういう意味ですか？」

「……………質問で返すな。ちゃんと答えろ。返答によって、お前への対応が決まる」

釘を打たれ、眼を閉じて中指で眼鏡の位置を戻す。

完全に空気が変わっていた。先程の中途半端に張られた緊張感のある空気ではなく、緊張感をこれでもかと主張するような物へと変貌する。

眼を開ける近衛、そして返答を告げる。

「そうですね。私は今のところはどちらに付くか決めかねています。正直、どちらに付くかすら悩んでいます」

予想通りの返答だった。こいつは一番物事を決めるのが不得意で最後は結局その場に流される傾向がある。

こいつなら、もしかしたら仲間に出来るか？　と思案し。

「……………だったら——」

「ですが！」

強引に言葉を遮られる。普段の近衛からは想像も出来ないほどの大声に驚き眼を見開く。

近衛は流れに乗ったまま、言葉を続ける。

「ですが、今回は最後まで私が悩み、その上で決めます。貴方達の意見は一切聞きませんのでよろしくお願いします。これは……私の問題なんですから」

「……………そう、分かった」

久しぶりに意思の強さを出してきた近衛を冷たい眼差しで見つめ、片手を静かに水平に持ち上げる。

「……………なら、ここで暫く大人しくしていて貰う。この場面で中立なんて言う、不確定要素は排除しておいたほうがいいだろうか」

「おやおや、ホント見た目と変わらずに子供ですね。大人ならそんな者も計算に入れて動くものですよ。いやはや、強引ですね」

まるで、忍者のように制服の袖の下から万年筆を取り出し。夕緋に向けて構える。

お互いに静かな殺気を放ちながら、近衛の方から近づいていく。それを待つかのように赤い月をバックにして待ち構える夕緋。

一歩一歩踏みしめながら相手との距離を詰めていく。

「……………私に勝てるでも思ってるの？」

「ふふっ、知ってますよ。例えば、今のあなたが以前より弱っていったとしても私は勝てないことも。でも、あなたに深手くらいは負わせるつもりです」

言い合いながら、二人とも笑みを浮かべる。夕緋にしては珍しく可愛らしい笑みだった。

二人の距離が各々の獲物の範囲に入る。

同時に攻撃のモーションに移ったところで、帽子を被った全身黒尽くめの男が両者の間に割り込む。二人は強制的に攻撃を取りやめ、突然現れた男に警戒の牙を向ける。男はそんな女子二人の反応を気にする様子はなく、平然としている。

「はいはい、女の子同士のキャットファイトも俺は好みなんだけどさ。あそこにさ、俺の家があるんだよ、だから壊されるのはマジ勘弁。別のところにしてくんない？」

そう言って、指差した場所は展望台の隅にある教会だった。二人ともぼかんとした表情で教会を見やり、近衛が男に口を出す。

「あの、あそこ潰れてるんですけど……」

「あん？ 何言ってるの、そんなの見れば分かるじゃん。ああ、大丈夫。屋根さえあれば俺は問題ナッシングだからさ」

自然体をまったく崩さない男に近衛は呆れつつ、

「あの教会。近々取り壊されますよ」

「えっ、そうなの。なら、新しいところ探さないとな」

軽く嫌味っぽく言ったのだが、男は気にせず歩き続け教会の中に入っていく、重々しい扉の音が辺りを包んだ。別れの言葉すらなかった。唐突に現れて颯爽といなくなった。あれは、果たして何者だったのだろうか。二人は考え、知らない人として定義した。

「ふう、何か白けちゃいましたね……」

「……………そうね」

脱力する。先程の殺気で満ちた空気は萎びれ、もう何も感じなくなってしまった。

ふうっと近衛が嘆息し林の方へ歩き出す。

「……………どこに行く？」

「帰るんですよ。もう場が白けちゃいすぎて、つまんなくなりましたからね」

「……………そう」

夕緋も空気が壊されたことが分かっているのか、深追いはせず見送る。

だが、近衛がいざ林の中に消える寸前で背中に向けて言う。

「……………中立のまままでいられるとは思わないことね」

重々しい台詞を背中で受けた近衛は笑顔で、

「そうだ、知ってます？ 碓氷くん、からあげ大好きなんですよ」

「……………はあ？」

どうでもいい話を吹っかける。

「あれあれ？ 知らないんですか」

「……はあ、え？ そ、そんな事知ってるに決まってる！！」

「ふふふつ。それじゃ、また会いましょうね」

「お、お前なんかとはもう会いたくない。こっちから願ひ下げだ！」

最後に夕緋が女の子っぽい反応を見せたのを確認してから林に入っていく。

確水がからあげが好きだと知ったのは今日の昼休みに、彼を見に行った際に、何があったのだろうか、うわ言のようにからあげと言う単語を連呼し机に終止突っ伏していた。その尋常ならざる落ち込みっぷりに声を掛けることすら出来なかった。

彼の事を思い出し少し笑う。林の中を進みながら近衛は思う。

（さて、中立ですか……。彼の敵になるって言うのもいいですし、味方になってみるのもいいかもですね。さうて、私はどっちにするんでしょうね）

選択肢の有ることに対する喜びを嚙締めながら、暗い林を歩き続けていく。

一方、近衛の背中を見送った夕緋は教会を睨んでいた。

近衛の他に現れた、不確定要素……。この男はどこまで関わってくるのか予想すら出来ない。

そして、今まさに動き出そうとしているシグナルの動向も気になる。彼は、嫌いだが実力は認めている。

夕緋はただ何も言わず。高台から吹く風に晒されながらも、その

場を後にするのだった。

逢瀬優夏は誰も通らない暗い歩道を歩いていた。歩道には街頭もあるのだが、それでも暗闇は一掃出来てはいない。

逢瀬はあの後、突然変な言い訳で分かれ林の中に入っていた。碓氷をしばらく探していた。だが、結局見つけることが出来ず、気づけば何時もなら夕食を済ませお風呂でのほほんとしている時間帯になってしまっていた。

「はあ、まったくあの、バカマイダーリンは……。普通女の子置いていくかね普通」

愚痴を垂れながら、夜道を一人歩く。怖いわけではないが、一人でこういう暗い道を歩くのはやはり心寂しい。なので、この状況に陥れた碓氷にどう落とし前をつけようかを考え始め、うししっと半笑いになりながらも慌てふためく碓氷を想像して気を紛らわせる。

しばらく笑ってから顔を上げ、月を見上げて、何時もより赤いなと漠然と感ずる。

「よし、とっとと帰って。ドラマ見ますか！」

月から顔を下げ、帰路に行く。

その様子を確認しながら、シグナルは笑う。

「クハハっ、青春してるね。御嬢ちゃん」

空中を闊歩しながら、地上の人よりも大きく見える、赤い月を見て。

「クハっ、赤い、赤いね。さてと、そろそろゲームスタートだ」
本当に心の底から楽しそうに笑い、夜の街を見下ろす。

こうして各々の想いや策略を渦巻かせながら、赤い月の夜が始まる。

朝日は遠く見る影すらもなかった。

行間一（後書き）

そろそろ日常から非日常へと変化します。

正直一章の内容とタイトルがあまり関係ないような・・・
W

災禍の幕開け 1 (前書き)

黒歴史回。

今回は僕と白川さんの分を合同でうpです！

災禍の幕開け 1

カフェのような喫茶店のような店で適当に夕食を済ませた碓氷は、とりあえず帰路に就くことにした。

紅い月のことについては考えていても仕方ないので、とりあえず頭の中では『科学的には証明できるが、今の自分にはその知識がない』というカタチで片付けておく。

「それにしても“紅い月”ねえ・・・」

ふと、人通りの少ない3mくらいの横幅があるビルに挟まれた路地割と広めの通路の中央で足を止めて紅い月を見上げる。

この街にはたくさん都市伝説や七不思議というものが存在している。

いずれも信憑性の類は皆無に近く、それについて調査する好奇心旺盛な少年少女の集まりの『伝説狩り』というグループがいろいろ調べてはいるが、一つも解明されてはいない。それを聞いて誰かが適当に噂広めただけだろう、と呆れ返る否定派もいれば、都市伝説は簡単に発見できるものではないから都市伝説なのだ、と主張する肯定派も存在している。

ちなみに碓氷の場合は前者だと言えるだろう。

その都市伝説の一つに、『紅い月と銀の十字架』というものがある。

前に逢瀬から聞いた都市伝説なのだが、あの時の碓氷は極めて厨二臭い名前に呆れ返って詳しく聞いていなかったもので、それについてはよく知らないのだが、

「まああんな“紅い月”を見せられたら都市伝説ってのもバカにできないモンなのかもしれないな」

今度逢瀬に詳しく聞いてみるか、と適当に考え、月から視線を下ろすとそのまま帰路を歩き始める碓氷。

季節が夏の終わりというだけあってまだ少し暑さが残っていたが、

そのおかげで時々吹く風が妙に心地よい。風が止んでも周囲の温度は昼間ほどのものではなかったため、なかなか快適だ。そのためか、碓氷の気分は極めて晴れ渡っていた。

だが、碓氷の心が晴れ渡っていたのはおそらくそれだけが要因になっただけではない。

単純に気分が良かったのだろう。授業中に逢瀬の仕入れてきた新ネタについていろいろ語り合ったり、天月とバカ話をしたり。そんないつも通りの日常をいつも通りに過ごすことに彼は満足していたのだろう。

だからこそ気分が良かった。できれば、こんな日々が続きますようにと心の奥底で願っていた。
が、そこで、

「クハッ、クハッ！！ いい夜だな少年♪」

耳触りで愉快的な声が掛けられた。

声の主を探そうと周囲を見回してみるのが、人影などどこにも存在していない。

「クハハッ！ こっちだよ♪」

もう一度与えられたヒントを元に声のした方に視線を向けてみると、そこは本来何もないはずの空中だった。

だが、そこには確かに人が存在していた。

あまりにも異様な光景だった。そこには台になるようなものはないし、紐か何かで吊るしているようにも思えない。だが、その人物は確かに空中で、まるでそこにイスでもあるかのように、右膝を立て、左足をぶらんと垂らして座っていた。

ラフな格好だった。適当なデザインの入った赤のインナーに、前のチャックが全開になっている黒い長袖パーカー。それに合わせるように、長袖ズボンも真っ黒だった。右腕に巻いている特徴的なシルバーアクセがジャラジャラと耳触りな音を立てているが、それよ

りも気になるのは胸の中心辺りにぶら下がっている銀の十字架のネックレス。

（紅い月と・・・銀の十字架！？）

思わず身構える碓氷。

「おいおい、」

対して、十字架の男は極めてひょうひょうとした態度で、

「そう身構えるなよ、せっかくの素晴らしい夜が台無しだろう。

もつとこの状況を愉しんでみたらどうだ？」

にやにやと、男は大きく表情を歪める。わかっていてやっているのか、それともわかっていても抑えきれずに漏れてきてしまったのかは定かではないが、その表情は確実に悪質な印象を碓氷に与えていた。

やがて男はまるで塀から飛び降りるかのように空中から地面へと着地すると、やはりにやにやとした歪んだ表情を浮かべたまま、

「そうだな、まずは自己紹介をしよう。俺の名前はシグナル、この街のご意見番のようなものだと思うてもらえればそれでいい」
教科書を読むかのような口調でシグナルは言う。

「自己紹介をする時は自分から名乗るものだ。俺はその礼儀を果たした。ならば次はお前が礼儀に応じる番じゃないか？」

あからさまに怪しい男に対し、碓氷は一瞬どうしようかと悩んだが、やがて構えを崩すと、

「碓氷、夕夜だ」

警戒心の籠った声だった。

だが、男の表情が変わることはない。いや、もし仮に変わっていたとしても、もう変化がわからなくなってしまうぐらいに歪んでいる顔が、さらに歪んでしまっただけだろう。

「いいね」

愉快的な声は続く。

「最高だ、これだからやめられない」

その声が放たれる度に碓氷の心に何か嫌なものが積もっていく。

「そう、そうだ。今日は月が紅い。実に美しい月だ。普段の淡い光を放つ月も美しいがこの月はどこか別の美しさがある」

言いながら、男は天を見上げて両手を大きく広げる。その姿はまるであの紅い月から何かを受け取っているかのようにも思えた。

男はその体勢のまま、首だけを動かしてこちらを見る。

「だが俺はこの月が嫌いだ」

こちらに向けられた男の表情は先程の歪み切った表情とは違い、呆れ返ったものになっていた。

実に、本当につまらなそうな表情で、つまらなそうに男は続ける。

「なあ少年、『紅い月と銀の十字架』って都市伝説を知っているか？」

「・・・名前タイトルだけなら」

「そうか、まあいい。たまには何も知らない少年に何かについて語るのも悪くはない」

男の表情が元に戻る。

大きく歪んだ表情が、再度確水に嫌悪感をあたえるが、男は気にしない。

「この街にはいろいろな不思議がある。例えば、『放課後、図書室に現れる謎の少女』や『林の中に吹く一迅の風』。ああ、お前は既に後者とは関わっているのか。まあそれはどうでもいい、そんなくだらない都市伝説とやらの一つが『紅い月と銀の十字架』。クハッ！ 実に痛いネーミングセンスだ。これはあれか、いわゆる厨二病というヤツか？ クッハハハ♪」

「・・・何が言いたい？」

「そうだな、強いて言うなら俺はこの街が大好きだ。この街が俺であり、そしてこの俺こそが街だ」

もはや意味がわからなかった。

酔っているのかと一瞬考えたがおそらく違う。それにしても妙に

言葉に乱れない。

いつもの確氷ならこの時点で『気味の悪い妙な変質者』扱いして華麗にスルーを決め込み、道を引き返して遠回りをしてでも家に帰ろうとしていただろう。だが、何かがおかしい。妙な圧迫感が確氷の胸の辺りを締め付ける。

そんな確氷の心情を知ってか知らずか、男は表情を歪ませながら続ける。

「だから都市伝説自体は嫌いではない。この街の住人が造り上げたものは全て俺にとって価値のあるものとなる」

だが、と。男が補足すると、一瞬でその場の空気が変わった。凍てつくような鋭い空気。

殺気とやらを察知できるような人間ではない確氷でも、それが殺気だと気付くのに一秒もかからなかった。

そんな張りつめた空気を放つ男は、残念そうな表情を浮かべて、
「この街はおかしい。最初はおかしくなかった。そう、何かがかしくさせたんだ。それこそ、この街である俺が全く無関係なものと合わせて『都市伝説』となって表舞台に出てしまうほどに、な」
やはり言っている言葉の意味は理解できない。

男もそれをわかつているのだろう。だからこそ、男は虫食いを埋めていくかのように言葉を継ぎ足していく。

「『紅い月と銀の十字架』。これはおかしい、俺は紅い月とは何の関係もない。いや、違うな。『紅い月と銀の十字架』は“銀の十字架を胸に下げた男が紅い夜を生み出し、その力をもって闇を打ち払う”という極めて幼稚な都市伝説だ。だがそれは間違いだ。確かに俺は紅い夜に動くがこの“紅い月”を生み出しているのは俺ではない」

つまり、と男は前置きして、

「この街にイレギュラーな何かが入り込んでいる。それがこの街の形を強引に浮き彫りにさせ、そして一街（俺）自身も都市伝説として扱われることになった。これはどう考えても異常だ。事は既に

お前の知らない場所で深刻なものへとなりつつある」

男の言葉に迷いはない。最初からセリフが用意されていたスピーチとも違う。彼の強い想いと明確な志が胸の内から言葉を生み出し、それを口から吐き出しているに過ぎない。

「本来俺は表舞台に出るような存在ではなかった。だが体を蝕むウイルスに対抗するように熱が上がるのと同じように、俺は都市伝説の一部となり、そして表舞台に出ることになった」

「そんな意味のわからないことを俺みたいな一般人に語って何になる？」

「わからないのか？」

疑問を疑問で返され、そしてその答えを持ち合わせていなかった碓氷は思わず押し黙る。

その様子を見ていた男はにやりと表情を歪め、そして次の言葉を口にした。

「お前自身がそのウイルスの一つだと言っているんだよ」

端的に、そして簡単に言い放たれたその言葉に碓氷は思わず自分の耳を疑った。

この男の言っていることは全て嘘なのかもしれない。街が人間だなんてありえないし、そもそも特に変わった生い立ちがあったわけでもなく、今まで平凡に暮らしてきた碓氷が突然この街を危機に追い込むようなウイルスだなんて言われても『はいそうですか』と簡単に飲み込めるわけもない。

だが、この男の言葉にはどこか妙な説得力があった。危険。

自然とそう判断した碓氷は一步、二歩と後ろに下がり、その場から逃げてしまおうかと思ったが、

「クハッ！」

それ以上動くことはできなかった。

理由は単純。

碓氷の視界にあるものが映ったからだ。

それは少女だった。赤い紐状のリボンが特徴的な少し変わったデザインデザインの白いセーラー服に、膝の少し上あたりまで長さのある紺色のプリーツスカート。そして、カチューシャのような位置にリボンをつけて頭を装飾しているその少女は、

「逢、瀬・・・？」

思わず目を疑った。これは夢なんじゃないかと思った。

その少女は、シグナルと呼ばれた男のすぐ横で宙に浮いていた。意識を失っているのか、全身から力が抜けたかのように手足や頭はぶらんと垂れ下がっていて、碓氷の位置からではその見知った顔を見ることはできない。

すぐにでも解放してあげようと思わず駆け出そうとした。だが、それはできなかった。

「おっと、動かない方がいい。それがお互いのためだ」

理由は逢瀬の喉元のどもとにつきつけられた黒い刃。そしてそれを持つシグナルと名乗った黒い男の存在。

「て、めえ・・・」

「クハッ！ クハハッ！ そう怒るなよ、俺の言いたいことは単純だ。そう、ゲームをしよう。ルールも簡単なものだ。今からお前と俺が殺し合いをする、もしお前が負ければこの女も死ぬ。だがお前が勝てばコイツは自動的に解放される。どうだ？ シンプルかつ合理的なゲームだろう？」

突然出された提案に、碓氷の内から湧き出た感情は怒りだった。

「ふざけやがって・・・」

思わず声が漏れた。予想していない答えだったためか、男の口から返事が飛んでくることはなかった。

だが、それでいい。飛んできたところで碓氷はそれを無視して続けていただろう。

意図していなかった展開に怪訝な表情を浮かべている男を無視し

て、確氷は言葉を紡ぐ。

「ふざけやがって!! お前が逢瀬を人質に取ってる時点で絶対に不利なのは俺の方だろ。いや、この際そんなことはどうでもいい。殺し合いをしようだ? さっきから意味わかんねえことをべらべらべら語りやがって、いい加減うんざりだ。目的を言えよ、金が欲しいなら金が欲しいとハッキリ言え、そしたら一発ぶん殴るだけで勘弁しておいてやる!」

だがな、と確氷は前置きをして、

「その過程で逢瀬を傷つけることになるなら俺はお前を許さねえ、氣い失うまでぶん殴ってきれいな川でも拝ませてや——」

ガンッ! という轟音が鳴り響いた。

そこで確氷は思わず言葉を切ってしまったが、驚くようなことはない。

ぞわり、と嫌なものが背筋に走った気がした。

だが怯むことはない。まっすぐと相手を見据え、拳を握る。

「いいね」

刃は地面にめり込んでいた。音の原因はおそらくそれだろう。小さな石と砂利の中から剣を引き抜きながら、男は笑っていた。

「ああ、そうだ。楽しい。俺は今人並みに『楽しい』という感情をむき出しにしている。俺の目的はお前と戦うことだ。コイツを人質に使うようなことはしない。街を守るために街の住人を傷つけていては本末転倒だからな」

男は1.5mはあるであろう黒い刃を片手ひょいと持ち上げると、それを肩で担ぐ。

「別にお前と戦えるというこの展開に対して『楽しい』という感情をむき出しにしているわけではない。それは一種の要因に過ぎない。俺が『楽しい』という感情を向けているのはこの街を救えるというこの展開に対して向けているものに過ぎない」

地面を踏む音がした。男が一步前に進んだのだと脳が理解するのに一秒もかからなかった。

対して、確氷は身構える。その足を動かすことはない。動かす必要がないと判断したわけではない。動かすのは危険だと判断したからだ。

「さて、それじゃあゲームスタートだ♪」

愉快的な声と共に、ものすごいスピードで男は確氷へ向かって突き進んでくる。

驚異的なスピードだったが、視認できないものではなかった。突然現れた黒い剣や、自分の身長ほどの長さがある物質を片手で軽々と持ちながらそんなスピードでつっこんでくることのできる驚異的な身体能力も気になったが、今はそれについて考えている暇はない。ブウン！ と、シグナルが右手で持つ剣を振る。

横薙ぎの一撃。当たればもちろん胸の上あたりを境に確氷の体は真っ二つになっていただろう。

だが、この場面で確氷の下した判断は至って冷静なものだった。ただ下にしゃがむだけ。路上でのケンカでの経験もあったが、この時の確氷は極めて冷静に判断を行うことができていた。

原因はわからない。だが、考えている時間もない。

剣が風を切る音を聞いた確氷はすばやくバネのように体を伸ばし、握った拳を上には振り上げる。

ボクシングで言えばアッパー。それも、バネのように体を伸ばす勢いもプラスされているため、威力は相当なものになっていただろう。

大きい剣を振った後の遠心力や体勢で男はそれを避けられるハズがない。振り上げた拳はそのままシグナルの顎へとヒットし――

「クハッ！ 残念ハズレだ♪」

――なかった。

愉快的な声が後ろから聞こえた。そう思った時には既にシグナルは本来いるべき場所にはいなかった。

後ろを振り向いている余裕なんてなかった。脇腹に鈍い痛みが走ったと思ったら、そのまま確氷の体は宙に投げ出され、一秒も経た

ない内にノーバウンドでコンクリートの壁へとぶつけられる。

背中に鈍い痛みが走った。脇腹あたりの痛みもまだ消えてはいない。体内から一気に酸素が吐き出され、少し呼吸が困難になったため、声を上げることもできない。

何が起こったのか、全くわからなかった。

コンクリートの壁からずると背中を引きずるようにして地面に落ちて、体の一部が地面についたと脳が認識したと同時に口の中に血の味が広がった。

「がはっ！ げほっ！」

そこでようやく体内に酸素を取り込むことに成功した碓氷は、思わず咳き込むと同時に口に逆流してしまった血を地面に吐き出す。

「クッハハハ！！」

そこで、嫌な声が聞こえた。

そちらを見ている暇もなかった。

碓氷の真横、ちょうど左耳から30cm離れたあたりに黒い剣が激突し、コンクリートの壁が大きくえぐられる。

ガコッ！ という音が辺りに響いた。

その状況に一瞬目を見開いた碓氷だが、すぐに我に返ると体中が痛むのを無視して跳ね上がるように立ち上がり、シグナルの顔面へと拳をぶつけようとする。

だが、

「遅い、それじゃ一生追いつけないぞノロマ」

バチイン！ と、肌を叩く音が響いた。

碓氷の左頬を、シグナルの左手の甲が叩いた音だった。

だが、たったそれだけで、碓氷の体が先程と同じように吹き飛んだ。

今度は1mくらいふつとんだところで、1、2回地面にバウンドしてようやく止まる程度の威力だったが、碓氷の左頬から遅れてじんじんとした痛みがやってくる。

路上のケンカというレベルではなかった。

何もかもが異常だった。そもそも、人間の体が簡単にふつとぶよ
うなケンカなど前代未聞だった。

まさに桁違い。

碓氷は路上のケンカには慣れている。おかげで、そこらへんの不
良相手に1対1なら絶対に勝てるし、2対1でも状況によっては勝
てるという自信もある。つまり、ケンカが弱いというわけではない。
だが、これはもはやそんな領域ではなかった。

例えるなら、20歳くらいの大人が5歳くらいの子供を本気で相
手して蹴散らしているようなものだ。
勝てるわけがなかった。

「違うな」

ポツリ、とシグナルが呟いた。

彼は黒い剣をコンクリートの壁から引き抜き、そしてもう一度肩
で担ぐと、

「違う、これは俺の知っている碓氷夕夜ではない。情報の手違い
か？ 『パンドラの箱』は碓氷夕夜が窮地きゅうちに立たされた時に開く
という話だったはずだ」

相変わらず言っている意味がわからなかった。

だが、碓氷にはもう何もできない。ここで立ち上がって戦おうと
したところで、絶対に勝てるわけがない。

もうあきらめるしかない。そんなことを考えていた時だった。

「なら仕方ない、アレを殺すか。街の一部を削るのはかなり痛い
が人質を殺して強引に精神状態を不安定にさせれば『パンドラの箱』
が開くかもしれないしな♪」

嫌な声が、妙に鮮明に碓氷の頭の中に入ってきた。

よくよく見てみると、碓氷の目の前に逢瀬はいない。ということ
は守るべき人物は後ろにいる。

嫌だった。

何が嫌なのかはわからない。ただ、そんな気持ちに応えるように、碓氷の全身に力が少しだけ戻ってきていた。

だから彼は立った。何ができるのかわからない。こんなボロボロな体で挑んだところで勝てるとも思わない。だけど、その結果、逢瀬が助かれればそれでいいと思った。

「うあああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ
あ――！！！！！！！！！！」

「

全身の力を振り絞り、男に向かってほぼ転がるような形で突撃する。

だが無意味。

男は碓氷の拳を少し横にズレるだけで簡単にかわすと、そのまま碓氷の襟を掴んで思い切り投げつける。

体がふわりと浮いた。夜の冷たい空気に心地よさを感じたと思つたら、一秒後には一転して背中に激痛が走った。コンクリートの壁にぶつかったと理解するのに何秒かかったのかわからなかった。

碓氷の体はそのままずるずるとコンクリートの壁を伝い、地面に落ちる。だが、倒れることはない。碓氷は二本の足で地面に立つと、ふらりとコンクリートの壁から背中を離し、自身の力のみで立つ。

「……ナメているな」

再びシグナルの音が聞こえた。

頭を上げることも困難なので、男の表情を窺うことはできないが、声の質から苛立っているのがわかる。

「僕は死んでもいい、その代わりこの子だけは助けてくださいという展開か？　おもしろくない、俺の求めている展開はそんなくたらないものではない。『パンドラの箱』を開かないお前などただのゴミだ。できないなら勝ち目はない。そしてお前の死は同時にソイツの死を意味している」

(違う)

ふと、そんなことを思った。

『パンドラの箱』を開くことができないということに対して、ではない。そもそも『パンドラの箱』なんて知らないし、どこにあるのかもわからない。仮に目の前に突然現れたとしても、開くことなどできないだろう。

勝ち目がない、ということに対してでもない。勝ち目がないというのはわかりきっている。だからこそ、立ち上がって、必死に少ない可能性に賭けているのだ。

（全然違う）

全てが違う。シグナルという男が言った言葉の全てに対して言っているわけではない。

むしろ、確氷がこの時点でシグナルの言葉を聞いていたのかどうかすらわからない。

彼が違うと言ったものの、それは数秒前の自分が思ったこと。

もし仮に自分が助からなかったとしても、逢瀬さえ助かれればそれでいい。

（そんなものじゃない！ 俺が守りたいものはそんなものじゃない！！）

何かが、動いたような気がした。

それを『動いた』と表現していいのかどうかはわからない。もしかしたら『すり抜けた』というのが正解かもしれないし、『落ちた』というのが正解なのかもしれない。

だけど、そんなことはどうでもよかった。

「まあいい」

無言の確氷に対し、男はつまらなさそうに言葉を紡ぐ。

「少しはやいが、これでゲームオーバーだ」

言い終えると同時、男は剣の柄^{つか}を握る手の形を変え、大きく振るかぶるとそのままブーン！ と槍投げのように確氷へと剣を投げつける。

殺すつもりはなかった。ゲームのルールは全てハツタリ。確氷を殺すつもりはなかったし、少女を殺す気もなかった。

だから、狙いは確氷の右腕。そこに刺されればひとまず確氷は戦闘不能だ。

剣はものすごいスピードで夜の闇の中を突き進み、確氷の右腕へと向かう。

そこで、シグナルは思わず目を見開いた。

妙だった。

確氷の右腕が、妙に上にあがっている。

その姿はまるで右腕で剣を掴もうとしているように見えた。

そして、その比喻表現は間違っただけだった。

漆黒の剣が確氷の右腕へと突き進み、そして右手へと突き刺さるうとした瞬間、確氷がそれを握りつぶすような動作をしただけで、それは消えた。

「なん・・・!？」

シグナルの顔から余裕が消える。代わりに浮き出てきたのは『驚愕』。

ありえない光景に思わず絶句するシグナルに対し、確氷はブラリと下げた左腕を何かを払うように横に動かす。

そこから、何か黒い粉が現れた。

シグナルにはそれが何なのかはわかる。自分が今まで使っていた漆黒の剣。その正体は自身の能力を使って具現化させた刃に、砂鉄をとりつけることによって生み出された『視認できる刃』だったからだ。

即ち、黒い粉の正体は元は刃だったもの。

何が起こったのかはわからなかったが、とりあえずこれで『パンドラの箱』は開いた。

そして、それを開いてしまった人物は、ゆらりと一歩足を前に踏み出す。

明確な戦意が伝わってきた。それだけでシグナルは笑った。

だが、目の前の人物はそれを気にしない。

「違う」

ポツリ、と。確氷が小さく呟いた。

「全然違う！」

その声に、明確な意志が宿る。

シグナルに向けられたものではない。今の確氷に向けられたものでもない。おそらく、それは確氷の中に残っている『過去の自分』、それを全て拭い去るために向けられた言葉。

「俺が守りたかったのはそんなものじゃない。俺が守りたかったのはもっとちっぽけで、でもとても大切な、かけがえのないものだったはずだ！」

瞳に力が宿る。目標は定まった。いや、元に戻ったと言うべきだろう。

「それを守るために俺は絶対に死なない。その上で逢瀬を絶対に助け出す！ そのためにお前をぶん殴る、以上だクソツタレ！！」

ダッ！ と、確氷の足が力強く地面を蹴る。

戦闘が始まった。

自分の守るべきもののための戦い。シグナルの守るべきものはこの街。

そして、確氷の守るべきものとは、例えば授業中に眠ったり、起こされて逢瀬と会話したり、天月とバカをやったりするちっぽけな日常。その日常を作るためには誰一人として欠けてはならない。

だからこそ、確氷は戦う。

ガキイイイイン！！ という甲高い音が、夜の路地裏に響き渡る。一方は鉄パイプ。一方は黒い刃。

どちらが強いかなど一目瞭然の武器がぶつかり、そして音を立てる。

鏢ぜ（つば）——迫り合いになることはなかった。当然だろう、ぶつ

かった衝撃だけで鉄パイプはぐにやりと直角に曲がり、使い物にはならなくなる程度の強度しかない。

元々そこらへんに落ちていたものを拾って使用しただけなので特別な力などあるわけではなく、そんなもので特別な何かに対抗するなど無理な話だったのだろう。

対し、黒い刃は鉄パイプの強度をすり抜け、そして主へと襲いかかる。

が、刃が碓氷を斬り裂くことはなかった。彼は既に鉄パイプから手を離していて、そのまますべりこむように強引に体を安全なスペースへと避難させ、そこから反撃の一撃を放つ。

今回もアッパー。地面をすべるように拳を振り上げ、握った拳を一気に相手の顎目がけて思い切り振り上げる。

しかし当たらない。

そしてこれも予想の範疇はんちゆうだ。

既に目の前に相手はいない。ブウン！ という空気が妙に乱れた音が聞こえてきたことから予想するに、身体強化でもしているのだろう。でなければ、アニメやマンガのようなあのスピードをどうやって出しているのか説明がつかない。

だが問題はない。シグナルの攻撃が命中する前に、碓氷の拳も既に動いている。だが、今度は右手ではない。

つまり左手。握った左手を、そのまま体ごと回転させてそれを背後へと送る。

簡単に言ってみれば裏拳。そして、相手にとってもこれは予想外だったらしい。ものすごいスピードで碓氷の後ろへと回りこんでいたシグナルは、咄嗟に左腕で顔をガードし、碓氷の裏拳が腕にヒットすると同時に一気に後ろに下がる。

ズザザァ！！ と、靴が地面を削る音が聞こえた。

追い打ちはしない。乱れた呼吸を整え、眼前にいる敵を互いに睨めつける。

「クハッ！ 少しだけとはいえ『パンドラの箱』を開いただけで

まるで別人だな。なるほどこれがアイツの言う覚醒というヤツか？」

「相変わらず意味のわからねえことばかりほざきやがって。『パンドラの箱』やら覚醒やらが何なのか知らねえが俺の身体能力が上がったわけでもなければ念じただけで物が浮くような超能力をさせるようになったわけでもない。つまり俺は俺に変わりねえ、『パンドラの箱』とやらが何なのかは知らないが勝手に人を超人扱いするんじゃねえよ」

「確かにお前の身体能力は上がってはいない。だが超能力が使えないというのは間違いだ。いや、正確には超能力ではないがこの際それはどうでもいい」

ダンッ！
と、誰かが地面を蹴った。

確水ではない。それはシグナルの足元から発せられた音だ。

次の瞬間、シグナルは碓氷の目の前にいた。まるでテレポートしたのではないかと思えるほどの速さだった。

避けきれない。そう判断した碓氷は咄嗟にシグナルの持つ黒い刃へと意識を集中させる。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおお！……！！」

それだけで、黒い刃がまるで手品のようになされた。

気付いていないのか、シグナルの右腕がそのままで見えない剣があるかのように振るわれる。だが、そんなものはない。シグナルの右腕が虚しく空を切ると同時、確氷は迷わず握った拳を前に突きだす。

狙いは顔面。ルートは確実に確定していたし、このままそのラインに吸い込まれるように拳を振り抜けば一撃でしとめられるはずだった。

だが、やはりそう簡単にはいかない。

シグナルは咄嗟に左手で碓氷の右手首をつかんで拳を止めると、そのまま一本釣りでもするかのように碓氷の体を思い切り自身の後方へと投げつける。

体が宙に浮くなどというレアな体験をした碓氷だったが、それでも彼は妙に冷静だった。

空中でなんとなく体を安定させると、そのまま地面に着地する。靴が地面を大きく削りながらも、なんとか無事に着地するという驚異的な大技を無意識でやってのけた碓氷は、次の攻撃に備えようと体勢を整え、シグナルがいる方向へと視線を向ける。

だが、攻撃は来ない。

シグナルはただにやにやとした笑みを浮かべてこちらを見つめているのみに、動く様子はまるでない。

不思議だった。

今まで圧倒的優位に立っていたシグナルが、思い切り隙を作っている碓氷に攻撃を加えないという状況に、碓氷はなんとなく違和感を覚えた。

「クハハッ！ 超能力が使えないだど？ 立派に使っているじゃないか。お前は自身の能力を使って俺の剣を消した。いや、正確には『吸収した』というべきか？ そして――」

シグナルが何かを言いかけたところで、碓氷は左腕を横に大きく振った。まるで何かを真横に投げるような動作だった。それだけの動作で、碓氷の左腕から何か黒い粉のようなものが周囲に飛び散った。

その正体は砂鉄。

シグナルが自身の剣を視認できるように、自身の武器に取り付けて扱っていたもの。

碓氷はそれを周囲へとちりばめながら、

「これで『放出』ってワケだ。まだ2回しか使ってねえのにタネを見破られるとは思ってなかったけどまあバレちゃったもんは仕方ない。形あるもの・ないもの問わずどっかの空間にものを『吸収』し、それを『放出』する。それが俺の能力らしいな」

言い終えると同時、勢いよく地面を蹴る音を合図に碓氷がシグナルに突撃した。

勢いはそこまでのものではなかっただろう。能力を手に入れたとはいえ、急に体の傷が癒えたわけではないし、急にパワーアップを遂げて傷が気にならなくなったということもない。

碓氷の体は実質ボロボロだ。だが、それでも精一杯の力を振り絞って、碓氷は守るべきもののために走る。

拳を握った。走って拳をぶつけるまでに時間はそうかからなかった。

だが拳がヒットすることはない。握った拳は思い切り空を切り、シグナルの姿はどこかへ消える。これまでの経験から察するに、身体能力を強化して回避し、攻撃に転じようと驚異的なスピードで移動したのだろう。

しかし、それでいい。碓氷が狙っていたのはそれだ。

碓氷はそのままの勢いで思い切り前にダイブする。その上ギリギリを、背後から迫っていたシグナルが放った左手の手刀が横切った。

「なっ——！？」

かわされることを予期していなかったのか、思わずシグナルが驚愕に目を見開くが、そこで止まる碓氷ではない。彼は受け身をとるように地面を転がると、体勢を整えてシグナルへと再度突撃する。

前と同じ右手による一撃。何度もかわされ、全く通用しなかった一撃。

だが、シグナルはそれを避けずに左手で受け止めた。

(予想通り・・・っ!!)

しかしここで止まるのもダメだ。今度はシグナルの持つ剣へと意識を集中させると、それを『吸収』する。これで反撃で即死する可能性はなくなった。

そしてそのまま空いた左手を握ると、それをシグナルの腹へと思いい切りたたき込む。

「が、はっ——！？」

予想外の一撃だったのだろう。慌てたシグナルは、碓氷の右手を離すと大きく後ろへと飛び、距離を空ける。

その様子を見ていた碓氷が浮かべた表情は、あまり良いものではなかった。

思ったより効いていない。せいぜい鳩尾みぞおちに衝撃を与えられて咳き込んだ程度だろう。原因はおそらく効き手ではなかったことと、体に蓄積されたダメージ。

それでも一撃は一撃。今まで勝負にもなっていなかった相手に、始めて一撃をお見舞いした。これは大きな前進だ。

「ク、ハツ・・・流石『パンドラの箱』と言うべきか？ 俺に一撃を与えられるとは思ってもみなかったぞ」

「お前は弱点晒しすぎなんだよ、俺はそこをついたただけだ」
吐き捨てるような碓氷の言葉に、シグナルの表情が少し歪む。

どうやらの得ていたのだろう。碓氷は乱れた呼吸を一度整えようと、

「まずお前の行動パターンがおかしい。確かに背後に回り込んで攻撃するってのは効果的だ、だが同じ手を何度も使いすぎている。その理由はお前は自身の能力で身体強化か何かしているらしいがそれをコントロールしきれず、そのために経験に頼っていたからだ」

「・・・」

「簡単に言ってしまうば、お前はあの高速移動中に狙った箇所に攻撃を与えることができない。そりゃそうだろうな、あんなスピードで攻撃を正確に狙った箇所に命中させることができるならそれは神業だ。だからこそあんたは自分が一番経験が多く、やりやすい『背後に回り込んで攻撃』することしかできなかった。まあこれは主にカウンターの時だけしかやって来ないからわざわざ攻撃してそれを誘う必要があったんだけどな」

シグナルの表情がさらに歪む。既に彼の表情に余裕はない。

「あともう一つはお前の能力制限だ」

ピクリ、とシグナルの肩が動いた気がした。だが、碓氷は気にせず続ける。

「お前は俺が能力を使えるようになってから初めて不意打ちをし

た時、つまり身体能力を強化して投げ飛ばした俺が地面に着地した時に、俺が体勢を崩していて隙だらけだったにも関わらず、もう一度身体強化能力を使って追い打ちを加えずにその場で立ち止まって一度様子を見た。あといちいち俺の攻撃を腕や手を使ってガードした時のと同じだ」

つまり、と確氷は前置きして、

「お前はその能力を連続して使用することはできない。身体強化していられる時間は大体10秒くらい、そして次の能力を使うまでに必要な時間は大体30秒くらいだ」

考えてみれば簡単なことだった。

あんな強すぎる能力がそうポンポン使えるのであれば、確氷はほんの数秒でやられていたはずだ。だが、シグナルはそれをしなかった。それにはそういう理由があったからだ。

「クハッ！ 思ったよりやるじゃないか『パンドラの箱』・・・そこまでわかっていいるのならもう遠慮はいらないよな」

ゆらり、と。シグナルの体が揺れた。

それと同時に。夜の裏路地に一迅の風が吹いた。

「・・・？」

確氷が怪訝な表情を浮かべるが、目の前の光景を見てすぐにその表情は変わる。

驚愕。

そんな確氷の表情を見て、シグナルはにやりと大きく表情を歪める。

「クッハハハ！ お前が長話をしていてくれたおかげで用意するのは簡単だったぞ。流石にこれだけの数を揃えようと思ったら時間がかかるからな」

黒い刃があった。

それも一つではない。無数の刃がシグナルの後ろに浮いている。

「さて、そろそろ紹介しようか。これが俺の能力『増幅<ブースト>』。本来はあらゆる現象をゼロから無限に増幅させることが可

能で逆に減少も可能だ。つまり簡単に言ってしまうばほとんどの事を操ることが出来る能力と認めてくればいい。身体強化はそれの一部に過ぎない。この刃も風を増幅、減少させることによって刃を作り、そこに砂鉄を加えて視認できるようにしているだけに過ぎない」

そして、とシグナルは前置きして、

「これが俺の本来のバトルスタイルだ。まあ存分に味わってくれたまえ♪」

シグナルの指が動いた。それを合図にするように、無数の刃も動き出す。

横幅約3mの裏路地に、無数の刃が一直線に突き進む。そしてその先にいるのは一人の少年。避けることはできない。防御も不可能。まさに絶体絶命の状況の中、少年の足は気付けば前へと進んでいた。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおお
 おおおおおおおおおおおおおおおおお
 おおおおおおおおおおおおおおおおお
 おお………」

怒号を聞いた気がした。

ブウン！　　と思ひ切り碓氷が何かを投げた。それはくの字型に折れ曲がった鉄パイプだった。

ブーメランのように折れ曲がったそれは、本来より安定した速度で空中を進み、やがて黒い刃に激突する。

そして、切り裂かれた。

だが、切り裂かれたのは鉄パイプではない。

ブワッ！
という音と共に、無数の砂鉄が宙に舞い散る。

「な——っ！？」

驚いたのはシグナルの方だった。黒いカーテンをつきやぶり、飛んできたそれを思わず身体強化した右腕で弾き飛ばす。

そんな彼の視界に次に入ってきたのは、一人の少年の姿だった。声を出す暇などなかった。既に少年の拳は強く握られている。も

う身体強化は使えない。先程の一撃が効いているのと、鉄パイプをはじいたせいでガードが間に合わない。

そんな中で、彼はこんな言葉を聞いた気がした。

「最後は自分の拳に頼るのが常識だクソヤロウ、わかったら黙ってそこらへんに転がってろ」

轟音が炸裂した。

それは確氷の拳が確実にシグナルの顔を捉えた音だった。

思い切り地面を転がり、数メートル離れたところでようやく止まったシグナルが起き上がる様子はない。

それと同時に、今まで宙に浮いていた逢瀬が解放され、地面に落ちようとしていたのを、確氷は優しく受け止めていた。

確氷は逢瀬に特に傷などが見受けられないのを確認すると気が抜けたのか少しふらついた。

（ヤバいな…。安心したら痛みだしやがった…。）

確氷は体の痛みを堪えながらも、この場所から離れるために歩き始めた。

がすぐに蹣跚^{たろたろ}けて倒れてしまった。

（駄目だ…。力が…。入ら……。逢…瀬…。）

薄れ行く意識の中で確氷が最後に見たものは林の中で出会った少女だった。

「…お疲れ様。」

夕緋は小さく呟くとシグナルに目を向けた。

災禍の幕開け 1 (後書き)

正直に言おう。

このバトルシーン、書きなおしたい・・・orz

ちなみに二章タイトルはうp1時間前くらいに決まったものだった
りw

災禍の幕開け 2 (前書き)

新キャラ登場。

今回は神無月さんの番です！

災禍の幕開け 2

仰向けに倒れているシグナルは見上げる形で視線を返すことになり、いつもは自分が見下ろす立場なのでそれは少し屈辱的であった。

同時に、わずかな疑問が浮かぶ。

「……どういう風の吹き回しかな？ お前が、忌み嫌ってるはずの俺にねぎらいの言葉を掛けるなんてよお」

「……別に深い意味なんてない。『パンドラの箱』を開けるのは私の目的の1つでもあったから、それをあなたが果たしてくれて楽が出来たわ」

「ハッ。つまり、私の代理で仕事をしてくれてありがとう、ってか？ 律儀だねえ。いつもはつれない態度の夕緋ちゃんがデレてくれてお兄さん感激だぶほっ!？」

「……調子に乗らないで」

寝転がっているうえに不意打ちで繰り出されたキックを、なす術もなく受けたシグナル。見た目は幼いものの、容赦のない一撃に横腹がじくじくと痛み始めた。

「てめえ……それが満身創痍の相手にする行為かよ……!」

「……ええ、辛^{つら}そうにしている嫌いな人を苦しめるのは、気分がいいわ」

「お前、後で泣かす……!」

「……大人げないわね。大体、本気で戦ってもいないのに満身創痍とかよく言うわ」

その言葉に、シグナルが押し黙る。

「……確かにあなたの能力は弱点が多いし、強力ゆえに制御が難しい。でも、一般的な喧嘩程度にしか戦闘経験のない高校生が相手なら、今みたいな体たらくになるはずないわ」

夕緋は本当にねぎらいの言葉を掛けるだけの用件だったらしく、踵を返して立ち去ろうとする。

その背中に向かって、シグナルは問いを飛ばした。

「にしてもよお、本当にこれで良かったのかい？　まだ留め具の1つを外したに過ぎないとはいえ、碓氷夕夜は『パンドラの箱』を開けた。こうなった以上、あいつはもうこれまでの日常から乖離せざるを得ないぜ？」

「……出来ることなら回避したかったけど、仕方のないことだから」「クハッ！　そうかいそうかい」

「……それに、私の考えや気持ちに関わらず、あなたは『パンドラの箱』を開けさせるつもりだった。悔しいけど、私ではあなたを止められないから」

「クハハッ。その通りだ。俺は街のために碓氷夕夜を利用する。それが俺の目的を果たすための手段。誰であろうと、邪魔はさせねえ。もつとも——」

シグナルは倒れ伏す碓氷を横目に捉え、歪な笑みを引っ込めると、「あいつが街の害毒となるなら、その時は手加減なしでぶっ潰してやるけどな」

無感情な殺意を乗せて、そう言い放った。

それに反応して、夕緋がシグナルを射抜くように睨みつける。

「……その時は、流石に私も邪魔をするわよ」

「止められないと分かっているのに、か？」

「……言ったでしょう？　あなたの能力はとても強いけど、制御が難しく弱点もある。私1人では無理でも、覚醒した夕夜と共闘すれば勝てないことは無いわ」

「クハッ！　面白え」

夕緋の言葉を受けて、歪な笑みを取り戻すシグナル。

「だが、俺は夕緋は殺さない。害毒となり得ない住人を殺すのは、俺の主義に反するからな。ただし、長期の病院生活は覚悟しとけ。……って、寝転がったまま言っても示しがつかねえな。よっと」

シグナルが起き上がり、衣服に付着した埃や砂粒を払い落とす。ポケットから白い清潔なハンカチを取り出して、シルバーアクセサリの微かな汚れも拭き取る。

特に、銀の十字架のネックレスは念入りに。

「……そのネックレス、大事にしてるのね」

「当たり前だ」

短く答えるシグナル。

直後、その姿が突然消えた。

しかし、夕緋は微塵も驚かない。いたって冷静に、空中のある一点を見つめる。

空気以外何もないその位置に、シグナルが立っていた。

シグナルは夕緋を見下ろしてニヤニヤとしている。お互いの視線の高さが逆転して気分がいいのだろう。加えて、背の小さい夕緋へのいつものちょっとした意地悪でもある。

だが、対する夕緋はもはやこの程度では怒りも苛立ちもしない。それどころか何の感想も抱かないほどにこの意地悪には慣れている。もっとも、好感度ならぬ嫌感度はいつものように上昇したが。

「それではまた会おう、夕緋。少年も、なかなかに楽しい夜だったよ♪」

そう口にして、今度こそシグナルは消え失せた。

夕緋も立ち去ろうとして……ふと、地面に倒れている2人の人物に視線を向けた。

碓氷夕夜と逢瀬優夏。両方気を失っているものの、夕夜が優夏に覆いかぶさるという、ちょっと大変な格好になっている。

「……………」

夕緋はそれを目視して、シグナルに意地悪されても湧かなかった怒りや苛立ちを感じた……気がした。

とりあえず、2人を引き剥がすことにする。親切心。そう、これは親切心からの行いだ。もし誰かに見つかったら夕夜の世間体が危うくなるから、それを未然に防ぐためだ。

「……手加減されていたとはいえ、一応あのシグナルを倒したんだから、あなたにも言うておくわ」

夕緋が仰向けにした夕夜の顔を見つめる。

そして——優しく微笑んだ。

「……お疲れ様」

（結局、なんだったんだあの男は……？）

4時間目の授業の終了と、昼休みの開始を告げるチャイムを聞き流しながら、碓氷は考えに耽^{ふけ}る。

帰宅中の路地に突然現れて、何かよく分からないことをのたまつて、理不尽に喧嘩……いや、戦鬭を売ってきたシグナルという男。
（何かがこの街をおかしくさせたとか、俺がそのウイルスだとか、
いったい何のこっちゃ……）

推測しようにも材料が少なすぎてさっぱり分からない。

ただ、1つだけ気になる単語がある。

（『パンドラの箱』……ねえ）

パンドラの箱。その単語自体は碓氷も少しだけ知っている。パンドラという女性が様々な災厄の詰まった箱を開けてしまい、世界に絶望が広がった。しかし、その箱の底には1つの希望が残っていた、とかそんな話のはず。

ただ、シグナルの言う『パンドラの箱』が何を指しているのかは分からない。あの男の口ぶりからすると碓氷が所有しているらしいが、それでもやはり分からないのだから仕方がない。

そしてあの男の出現は、碓氷に1つの変化をもたらした。

クラスの皆が持参の弁当を広げたり、購買部へパンを買いに求めたり、食堂へ向かったりと各々が昼食を楽しもうとする中、碓氷も

昼食の準備を進める。

とはいっても、登校中によく利用するコンビニで買ったから揚げ弁当を取り出すだけ。コンビニ弁当の割にはやけに瑞々しい野菜や甘く柔らかいご飯も魅力的だが、碓氷の目には大好物のから揚げが中央に映る。

そのから揚げへと手を伸ばすと――から揚げが、1つ消えた。

別に目にも止まらぬ速さで食べたのではない。これが変化――超能力の取得だ。

今度は左手を伸ばすと……突如、消えたはずのから揚げが出現し、元の位置に身を置いた。

「わ、わ、なに今の！ 手品？ 碓氷君ってばいつの間にそんなスキルを！」

「……見てたのか、逢瀬」

どうやら、能力の行使――『吸収』と『放出』の一連の流れには、逢瀬という観客がいたようだ。しかし本人は手品だと思っているらしいので、首肯しておく。

「ま、そんなところだ」

「なに？ 碓氷君はいま手品にハマってるの？ ゆくゆくは世界的有名マジシャンになる予定？ そして私がその妻になるのね！」

「残念ながら逢瀬の言っていることは全てハズレだ」

「うぐう……いつものことながらフラれてしまった……でも、いつものことながら諦めないのが私。もっと頑張って難攻不落の碓氷君を撃墜してみせる！」

「言葉が過激だな、おい」

昨夜、気絶から回復した後、碓氷はいまだに気を失っていた逢瀬を起こした。逢瀬は気を失う前の記憶が曖昧なようで、状況をどう説明したものかと碓氷は頭を悩ませた。が、結局のところそれは徒労だった。何故なら逢瀬が、「ダーリンが傍にいるというこの幸せが夢じゃないなら、万事OK」となんと彼女らしい理屈で解決したからだ。あまり今回の出来事に彼女を関わらせたくない碓氷にと

つては、この時ばかりは盲目気味な彼女の自分への好意に感謝した。その後は念のため逢瀬を家まで送り届けて、別れた。

(にしても、相変わらず元気だな、逢瀬は)

今日になって逢瀬の様子に悪い変化はないか碓氷は心配していたが、どうやら杞憂だったらしい。逢瀬はいたっていつも通りだ。

そして自分の日常もいつも通りなら、あいつが茶化してくるはず。

「よう、碓氷。今日も今日とて、夫婦仲睦まじく愛妻弁当してるのか」

「天月、俺と逢瀬はそんな関係じゃない。あと、俺のはコンビニ弁当だ。そして日本語がおかしいぞ」

「律儀なツツコミ、ありがとうございますっ」と

「というか、夫婦仲睦まじくとか言うなら邪魔しないで欲しいかな」
「悪いな、逢瀬。今日は2人のやり取りを肴にランチしたい気分なんだ」

「で、今日のお前のランチメニューが……それか？」

碓氷が指差したのは、天月の手にある1つのスナック菓子。普段から菓子パンや惣菜パンが天月の昼食という栄養の偏ったチョイスだが、今日はより一層ひどい。ちなみにコンソメ味である。

「ああ。今日はスナック菓子の気分なんだ」

「いくらなんでもそれはないだろ」

「ほぼ毎日、から揚げ弁当の碓氷君が言える台詞じゃないと思うけど……」

「確かに……」

「こ、この子は悪くないぞ！」

逢瀬と天月がそろって呆れ返った視線を、碓氷とから揚げ弁当に突き刺す。そして碓氷はその社会の批判から守るため、から揚げ弁当に覆いかぶさる。

「まあ、それは置いといて、だ。菓子パンならともかく、お菓子は学校に持ってきたらダメなはずだ」

「なんだ、碓氷。仮にも風紀委員である俺に説教するのか？」

「いや、だったら尚更ダメだろ!?　じゃなくて、またそうやって校則破ったりしたら――」

「ちよつと、天月君!　その手に持っている物はなんですか!??」
鋭い一喝が、賑やかな教室に響いた。

けれど、他のクラスメイトは声の方を振り向いたりはしない。何故なら、もはや毎日あるかないかぐらいの出来事だから。最終的に、振り向いたのは碓氷、逢瀬、天月の3人だけ。

(あー、やっぱり来たか)

そこには碓氷が予想・危惧したとおりの人物がいた。

美原紗希。みはらさき整った顔立ちに、腰にまで伸びる長い髪をストレートに下ろした容姿で、狙っている男子も多いという噂。けれど風紀委員の委員長を務める3年生ということで攻略難易度が高いと評価されている。また、それでも告白に臨んだ男子のことごとくを素っ気なくフッている事実も小さくない一因である。

「おー、委員長。いらっしやい」

「いらっしやい、じゃないでしょう!」

柳眉を逆立てた美原が天月に詰め寄る。

普段の美原は、突然のガラスの破碎音にも動じないほど冷静沈着としている。が、相手が天月だと、話が異なる。

天月は風紀委員でありながら、風紀委員らしからぬ生活態度をとっている。今回のお菓子持ち込みが良い例だ。当然、風紀委員長である美原はそんな天月に注意をする。しかし、これまで何度注意しても天月は生活態度を改めてこなかった。対する美原も、その真面目な性格と風紀委員長の責務から諦めることなく注意を繰り返し、今となっては忙しくなければ昼休みに様子を見に来る程である。

「何度言えば分かるんですか!　風紀委員が自ら風紀を乱してどうするんです!??」

「あー、それは耳タコだぜ、委員長。正直、聞き飽きた」

「聞き飽きていても理解していないから何度も言うんです!」

美人が起こると怖いと聞くが、それは本当のことだ。整った容貌

を鋭い眼光と剣呑で彩って目の前にされたら、獰猛な虎さえも萎縮してしまいそうな覇気がある。今こそ日常の一部と化して慣れてしまったが、初めは傍^{そば}で見ているだけの確氷と逢瀬もビクビクしていたものだ。だが、その時も天月はマイペースを保っていたのだから、こいつの肝っ玉は尋常じゃないと確氷は思った。

「とりあえず、用件は分かっていますよね？　そのお菓子は没収します」

「それは勘弁してくれないかな。これ、今日の昼飯なんだ」

「関係ありません。それにお菓子が昼食だなんて認められません」

「それ言ったら、俺は何を食えばいいんだ？　遂には菓子パンも認めないとかこの前言ったし」

「お弁当や惣菜パンは認めています」

「厳しいなあ……そんなに言うんだったら、委員長が俺の分の弁当も作ってきてほしいぜ」

「な——っ!？」

瞬間、動揺とともに美原の顔が朱色を示した。目を見開き、金魚のように口をパクパクさせる。

「いやあ分かりやすいねえ、美原さん」

「だな。他の男子が同じことを言っても、きっと無反応だろうに」

その美原の様子を目にして感想を漏らす逢瀬と確氷。

「な、な、何を言っているんですかっ！　そんな事したら不純異性交遊だと誤解されるじゃないですか!」

「だよなあー。やっぱり嫌か」

「いえ、嫌じゃないというか、むしろ……」

「ん？　なに？」

「な、なんでもありませんっ!」

顔を真っ赤にして叫ぶ美原。色々な意味で鈍感な天月は疑問符を浮かべるばかりで、クラスの男子からの羨望と嫉妬の入り混じった視線にも気づかない。

「とにかく、お菓子は没収します。放課後には返しますから、取り

に来てください」

美原が右手を差し出す。強引に奪ったりはせず、あくまでも本人の意思で渡してもらい、没収するつもりのようなのだ。

「反抗しても、お互いの昼休みが削れるだけだろうなあ……。はいよ」

天月が大人しくスナック菓子を手渡す。

その際、お互いの指先が触れ合った。

「――っ！」

ただそれだけで美原の赤面度がトマトから完熟トマトくらいに上昇した。

スナック菓子を受け取ると、美原はそれを抱えて逃げるように教室を飛び出していった。

「相変わらず委員長には嫌われてるな、俺」

「……それを本気で言ってるから大したもんだ」

「うん、美原さんが様子を見に来るのだって、天月君に会いたいからなのにな」

「お菓子はともかく、菓子パンを昼食に認めないのだって最低限の栄養バランスを心配して、だしな」

「そうそう」

ここまで来ると、もう呆れを通り越して感心する以外になかった。「んじゃ、俺は代わりの惣菜パンでも買ってくるよ。ロクなのが残ってないと思うけどな」

没収されたのを気にする風もなく、天月が教室から去る。

「はてさて。これから先、あの2人の関係がどうなるか楽しみだね、碓氷君」

「そんなことより、飯にしよう。空腹が反乱を起こしているんだ」「りょーかいりょーかい」

弁当を広げ始める逢瀬を視界の端に収め、から揚げを口に運びながら、碓氷は思う。

（ああ、やっぱり俺はこの日常が好きだ。街がどうか、『パンド

ラの箱』がどうか、関係ねえ。この日常を脅かすなら、俺の友達を傷つけるなら……敵が誰であろうと、ぶっ飛ばしてやる）

そして同時に、こうも思う。

（……から揚げ、最っ高に美味しい！）

災禍の幕開け 2 (後書き)

この世界にはリア充しかないのか・・・!! or z
3週目終わったら書く順番変えようかなと思ってる w

災禍の幕開け 3 (前書き)

ニコ動で実況を見ながらの更新。案外うpは簡単にできちゃったりする。

今回は義人さんの番です！(個人的に今一番カオスなのがこの人だと思っています・・・w)

災禍の幕開け 3

その日の放課後、俺はいつものように逢瀬に付き纏われつつ帰宅の最中だった。

今日という日、いや学校というコミュニティがあまりに日常的で俺の中で昨夜の非日常が霞み始めた頃——校門に差し掛かる俺に最も『日常』から遠い存在が声を掛けてきた。

「やあ☆ 怪我はもういいのかい？」

シルバーアクセがじゃらじゃらじゃら。校門に寄り掛かるようにして立つ眉目秀麗な男……シグナルが陽気な声を掛けてきた。

予想だになかった。

当たり前と言えば当たり前だと思う。昨日の今日で会うような相手だとは誰も考えない。

昨晚の恐怖が蘇る。まるで心臓を鷲づかみにされたような恐怖だ。落ち着け……！ 大丈夫だ！ 俺はコイツに勝ってる！

襲い掛かる恐怖感を『勝利』という自信で補い勇気を奮い立たせる。

しかし俺はそこでハッと気付いた。

状況が違う。

周囲ではまだ下校中の生徒が大勢居る。

逢瀬だって昨日と違って安全な場所に居るといふ最低限の安全の保障がある訳でもない。

ココに居る全員を守りながら戦えるのか……？

——無理だ——

俺は無理矢理恐怖を振り払う。

やるなら今しかない。

先手必勝！ それしかない。殴って逃げて、一先ず誰も巻き込ま

ない場所へ行く。

そう判断した俺はシグナルに殴りかかる。
だが、

「そう慌てるなよ、少年」

その言葉と共にシグナルは俺の拳に自身の拳をぶつけてくる。

「痛っ！ ……てえ？」

拳と拳が勢いよくぶつかる。だが、おかしい事に痛みは全くない。
俺が驚いていると、

「『増幅＜ブースト＞』。教えたらう？ 俺の能力。増やすだけじゃなくて減らす事もできるんだよ」

シグナルが小声で補足説明をしてくる。だが、俺にとってそんな事はどうでもいい。

「なっ——」

「何してるのダーリン?!」

何の用だよ！ そう俺がシグナルに叫ぶより早く。逢瀬が俺に声を掛けてきた。

マズい。逃げろ！ そう叫ぼうとした瞬間、俺はシグナルに口を塞がれた。そして、

「やあ、優夏ちゃん。久しぶり♪」

「あ、シグナルさん、お久しぶりです」

……あ？

そこには俺の予想しない受け答えがあった。

「って、昨日会ったばかりだから久しぶりじゃないですよ」

「ああそうだったね。因みにコレは男同士の挨拶みたいなものだから心配しなくていいよ♪」

「そうなんですか？ いきなりダーリンが殴りかかった時は焦っちゃいましたよ」

……あれ？

「アハハ、ごめんね。ところであの後大丈夫だった？ 間違えてお酒飲ませちゃったからあちゃーとか思ってたんだけど…」

この際、逢瀬じゃなくても誰でもいい。と、視線を周囲に向けてみるが、

「あ、シグナルさんじゃない？ あそこ」

「ホントだ。シグナルさんチーッス！」

と気さくに挨拶する者。

「この間は本当にありがとうございました！ 貴方のおかげで父は死なないですみました！」

と、何やら非常に重そうな話題を出す者。

「おや！ おお、お久しぶりですね。お元気そうでなにより。確氷、あんまり迷惑掛けるんじゃないぞ！」

と、ゴリラ教師ことゴリ山まで挨拶に来る始末。

「知らなかった？ 俺はコレでも街じゃ有名で人気者なんだよ？」

クハッ！ 寧ろこの街に住んで知らない方が激レアなんだよ☆」

と、不敵に笑うシグナル。何故かアウエーな気分だ。

「まあ安心しなよ。ただの状況説明だから。君に損は無いはずだよ」

リムジンなんて初めて乗った。

話には聞いていたけど……何とも言えない感覚だ。

「お前何者だよ……」

と、目の前で（人が目の前に対座しているのなんて車で体験するとは思わなかった）ナイフを拭いているシグナルに問う。

「んゝ……とりあえずこの街で俺に逆らう者なんていない程度の人？ ああ、そう考えると君は相当イレギュラーだね。俺を殴った奴は久しぶりだよ♪」

その話を聞くと昨夜の傷が痛む。

ふと、

たね☆」

「待て待て待て待てちょっと待てえ?!」

俺は思わずストップを掛ける。どういう事? WHY?

「なんでそうなった?!」

「んゝ能力に目覚めちゃったから?」

「ほはお前のせいじゃねえか!?!」

しかしシグナルは悪びれた様子はない。ただ、俺を真っ直ぐに見据える。

「気付かれた原因はね」

その言葉に続き隣の男……揺波が補足する。

「遅かれ早かれお前の存在は気付かれた。寧ろ能力に気付けただけでも行幸と言える」

引つかかるものがあつた。

「能力に気付けた……? 待てよ。能力を使えるようになったから狙われたんじゃないのか?」

シグナルは「違う」と答える。

「君がパンドラの箱だからさ」

パンドラの箱。またそれか。

「一体何なんだよ、そのパンドラの箱って……?」

しかしシグナルは肩を竦める。

「さあ? 正直言うとパンドラの箱の中身を知ってる奴なんて世界中探して100人居るか居ないかって程度だと思うよ? ただわかつてるのはその箱の中身は世界を一変できる程度には強力で魅力的な代物って訳だ」

因みに、と続ける。

「君の能力は実は能力と呼べるような代物じゃあない。ただ、パンドラの箱の中身……その余剰スペースに入れたり出したりできる。たったそれだけだ。簡単に言い直すと君はただの器であって、周囲が欲してるのはその中身。まあ流石に安直過ぎる発想とは思うけど、器を破壊——つまり君を殺して中身だけ取り出そう——って考えの奴

らも結構居るはずだよ」

俺は愕然とした。

「何だよそれ……？」

訳がわからない。

頭が追いつかない。

それもそうだ。だってこんな漫画や小説みたいなファンタジックな非日常的状况に足を突っ込んだのはつい昨日——まだ二十四時間も経っちゃいない。辛うじて昨夜の非日常のおかげで話を否応無く事実として受け入れる事ができる。しかし、まだ日常サイドな俺の脳では考えをまとめ上げる事ができないで居た。

「まあ君が望む望まざるに関わらず、君は俺の提案を呑まないといけない訳だけどね☆」

と、俺の心境を察してるのか察してないのか……シグナルは唐突に紙面を俺に渡してくる。

「……なんだこれ……？」

紙面の一番上には大きく『契約書』と書かれている。

「見ての通りだよ。君には『バウンサー』として専属契約してもらいたい。因みに『バウンサー』って言うのはまあ、おイタが過ぎる能力者を狩る——まあ能力者に対する警察……この場合、自警団とも呼べばいいかな、そういうの」

「ハッ？」

頭にクエスチョンマークが浮かぶ。多分、今までの話で一番大きな『？』が浮かんでいる。

「おっと、話を端折るのは俺の悪い癖だな。クハハ、思考が早いというのも考えものだなあ」

と、一人で笑い出す。

「簡単に説明する。今の君の現状はこうだ。一つ、自分の力の詳細がわからない。二つ、命を狙われている。まあ大まかな所でこんな所だ。二つ目に関してはかもしれない、けどね」

そして、と続ける。

「この仕事を請ける利点を言おう。一つ、自分の力の詳細を分析できる。二つ、ウチのグループのバックアップを受けれる。即ち命の保障ができるし、雑兵じゃ手が出せない。ほら、この時点で前述の二つは解消された。ああ、勿論の事、君の周囲に関しても此方で安全を確保しよう」

「待て」

と、俺はシグナルを制した。

「まだ俺はお前の事を信用した訳じゃない。話だけは聞いてやるけどな。話は聞くが、お前に協力するのは真っ平ごめんだ」

そう……とシグナルは呟くと、

「ところで……暴力って最も優しい手段だと思わないかい？」

「……ハッ？」

話の前後がおかしい気がする。何を言ってるんだコイツ？ 実はアホなのか？

「何言っ——」

「権力、財力、権威、武力、加えて表裏問わずにそれなりに顔が利く。さて、碓氷君はどの手段で脅されたい？」

「……ハッ？」

このセリフも何度目だろう……しかし、言いたくなる気持ちも察して欲しい。

「簡単だよ。仲間にならないなら君か君の周囲の人間をあらゆる手段で不幸にするって言ってるだけだよ、碓氷夕夜君♪」

シグナルは嗜虐的な笑みを浮かべている。

「お前……！」

「ところでどうする？ 契約を結ぶ？ 結ばない？」
人から選択権を奪っておいてヌケヌケと……。

「まあ、冷静になって考えてもみなよ。実際、仕事内容はさておき、契約内容そのものはそう悪い部類ではないよ。仕事と言っても君は学生だし、『日常』を優先してもらって構わない。仕事の時間帯も考慮させてもらうよ。まあちよっと変わったバイト、とでも考えて

くれればいいよ。仕事そのものもグレーゾーン以上のモノは提供するつもり無い。さらには相応のバイト代も支給するし、君と周囲の身の安全も保障しよう。君の力の詳細について知りたいなら望む範囲で力になろう。勿論、データは頂くけどね」

「……………」

確かに冷静に考えると話の内容そのものはコチラの方が得が多い。原因云々はさておいてだ。しかし、旨い話には裏があるのが相場だ。

「何を企んでる……？」

問うと、シグナルではなく揺波が答える。

「簡潔に言えば、パンドラの箱を保持しておく。それそのものに意味があるって事だ」

何となくだが合点がいった。極端に言ってしまうと核兵器のようなものなのだろう。その正体こそ一部にしか知られていないとは言え、『中身』を一つの陣営が保持しているという状況。おそらくシグナルはそれが狙いなのだろう。詳しくはわからないが政治的な要因とかそういう事か。

そうこうしてる内に車が止まった。

「おっと着いたみたいだね。まあ脅し云々はさて置き、少なくとも君に仕事の内容を理解してもらわないと始まらないからね。ちょっと付き合ってもらおうよ」

言われるままに車外に出ると、そこは柳山鉄橋の傍だった。

「さあて、そろそろ来る頃合なんだけど……」

「何が来るんだよ……？」

シグナルは近場の背凭れに背中を預けると、まるで暗記してた文章でも読むように答える。

「東郷三郎、四十二歳。三年間で十二人を焼殺した連続殺人犯。先週この街で捕まったんだけど脱獄。まあ能力者相手じゃ普通の警察じゃ無理があったけどねえ」

「能力者？」

ああ、と補足してくれたのは揺波。

「言っておくが、一般には知られてないだけで、能力者そのものは結構居る。百人に一人くらいの割合だと考えておけばいい」

い、意外と多い……。

「こゝいうの残しておくで街に害が出るからね。能力者としては中の上。任務難易度としてはBって所？　まあ、今回の為になぜと情報をリークしなかったんだだけだね」

さて、とシグナルは路地の方に目を向ける。その先からは足音が聞こえてくる。

「君は弱者だ」

唐突なシグナルの言葉。

「……負けた奴に言われたくない言葉だな……」

「クハッ！　確かにね」

足音が近づく。しかし、微かな違和感。

「まあ、とは言え君は弱いよ。世の中全体で見れば」
音が多い……？

「そして俺は基本的に弱者の味方ではある。何故か？　それは弱者のほとんどは大体街の利になっているし、害と言っても大した害にはならない。それなら多少の利を伸ばしてあげた方が街にとって有益だ」

一つ二つ三つ……どう考えても一人の足音ではない。

「だから少なくとも今は君の味方で居てあげるよ。それに君の力が街にとって良い方向に向く限りは全力でサポートしよう。クハハ！　勿論、逆もあるからあしからず♪」

そして路地から出て来る複数の人影。

それに立ち塞がるように立ってしまっている俺達。

「やあ♪　楽しい楽しい逃走劇はどうだったかな？」

シグナルだけがやけに楽しそうに目の前の男たちに話しかけていた。

「オイ」

「なんだい、確氷君？」

「どう考えても一人じゃないんだけど……?」

そう、俺達の目の前に居るのは……十五人の男達だ。

「正確に言うとな十五人の能力者だね♪」

「ニコやかに言うレベルじゃないだろ?!」

当然というか何というか……流石は殺人犯(?)、最初から殺気ばかりを此方に向けて来ている。しかしよく見ると何か口がひたすらパクパク動いている気がする。

「ああ、面倒だから彼らの声の力を『減少』させてもらってる。聞くだけ無駄だしねえ」

増幅<ブースト>。それがシグナルの能力だ。それは理解している。揺波の能力はわからない。そもそも能力者ですら無い可能性もあり得る。

俺の力も……複数人相手には不利と言わざるを得ない。

「逃げないとマズいんじゃないか?!」

三人(?)の能力者と十五人の能力者。簡単な計算だ。勝てるかどうかなんて考えるまでも無い。

「逃げる?　なんで?」

と怪訝そうに問い返すシグナル。揺波に至っては車内に戻って横になっている。なんでお前らそんなに冷静なの?!

「この人数の犯罪者相手に三人でどうにかなる訳ないだろう?!」

「ああ、確かに予想外だねえ、この人数は」

前を見ると、犯罪者の一人の手に炎が集まっていつているのが確認できる。その大きさは直径一メートル程で……あれ一つ程度なら俺でもどうにかできそうだ。

だが、

「一つ、二つ、三つ、四つ——うん、既に何人か臨戦態勢だねえ♪」
詳細まではよくわからなかったが、氷、電気、火……簡単に判るのはこの程度だった。

俺の力は一回に付き一つしか入れる事ができない。つまり同時に複数の攻撃には対処できない。

犯罪者の能力一つ一つが解き放たれる。その瞬間。

ゴキッ

鈍い音が響いた。

気付けばシグナルが傍に居ない。

姿を探すと、シグナルは犯罪者の一人のすぐ傍に居た。

「クハハハ」

笑い声が聞こえたと思うと、シグナルの目の前に居た男がその場に倒れ付した。

周囲は暗くなりつつ中、その様子がはっきり見える訳ではなかった。

ただ一つ間違い無く理解できたのは、

「さて、危険信号シグナルを鳴らしに行こうか！」

それが一方的な虐殺だったという事だけだった。

地を踏めば大地が揺れる。

腕を振るえば風が荒ぶる。

腕が千切れ、首が？がれ、身体を引き裂かれる。

人が人を殺すのにこんなに残虐な方法があるのだろうか？ いや、

あるなしじゃない。不可能だ。

音は聞こえなかった。視界は闇に覆われた。おかげで直視はしないで済んだ。

不思議に恐怖感は生まれなかった。あまりに現実味の無い光景だからか……まるでモニター越しに映画を見てるような感覚だった。

とりあえずわかったのは

あの時は本気じゃなかったという事だけだった。

災禍の幕開け 3 (後書き)

まあ、あれです。シグナルさんってチートキャラだったりするんですよw

そして『バウンサー』の登場によってゴールが見えなくなってきた・
・・O R Z

災禍の幕開け 4 (前書き)

前回のあらすじ.. シグナルさん本気出すと強い。
今回は翡翠さんの番となっております。

災禍の幕開け 4

「クハッ！ 殺りがいのない奴らだなあ♪」

シグナルの声が聞こえる。そして視界に光が戻る。あまり時間は経っていないが、シグナルが全員始末してしまったのだろう。

路地に赤いものが目に映りかけたときに

「まだ見ないほうがいい」

その一言に逆らえず目を背けてしまった。言葉には不思議に従わせられる力が込められている気がして、

「クハッ！ やっぱり揺波は新米に対して甘いなあ」

「しかし……」

「まあ、甘いのは勝手だけど、使いすぎると君の場合少しずつ身体が朽ちていくはずだからね」

「……ハッ？」

使いすぎる？ 朽ちる？ こいつは何を言ってるんだ？ しかも

今の言葉は間違いなく揺波に向けられた言葉であり、今まで使った形跡が無い。

「ああ、確水くんには言っていなかったけど彼の能力は雰囲気を操ること。つまりさっき君が振り向かなかったのは彼が『確水がシグナルの方向を見ない雰囲気』にしたってことさ♪」

言ってることは信じられないが、もう能力もなんでもアリらしい。俺の能力は『吸収』と『放出』。ふと気になったが能力が被ったりすることはあるのだろうか。

「私の能力をすぐ説明するなと言ったはずだ」

「まあいいじゃないか。すぐに気づかれるんだろうしね。そういうわけで、そろそろ行こうか♪」

「待て、どこへ連れてく気だよ？」

それにこいつがさっきまで殺していた能力者とかどうするんだ。

「決まってるじゃないか。『バウンサー』の拠点にだよ」

組織があるのだから当然多数の人で構築される。そしてその人たちが集まる場所もあるといえば当然だ。

言われるがままに車に乗せられ、走り出した。シグナルの殺した死体は別のメンバーが処理するらしい。乗るときには既に『死体も血のあとに残っていなかった』が……。

「さて、仕事の内容も見たことだしあとは契約書にサインするだけだ」

先ほどまであのような虐殺をしておいたシグナルは笑顔でこっちを見ながら契約書とボールペンを差し出す。

「ふざけんな。俺がいつ人殺しをすると聞いた」

思ったことをそのまま言ってしまったが、これで断ったらどうなる？ 逢瀬や他の奴らにも危害が及ぶのか？ ああ圧倒的な力を持つシグナルが俺の身内の奴らを襲うのか？

「とは言っても受けざるをえないはずだよ？ それとも、脅しに屈しないとかなって大切な人たちを巻き込むのかい？」

「……っ！」

そうだ、冷静になれ。どう考えても俺は『バウンサー』に入らない限り、逢瀬や天月を巻き込まない方法は他に残っていないんだ。

「分かった。契約書を寄越せ」

とはいえ、思い返せば契約書の詳しい内容を覚えているわけじゃない。渡された契約書に目を通した感想は

「思ったより本格的だな……」

まず契約書を読んだ感想がこれである。こんなもの初めて見るのから感想はこの程度で済まさせて欲しい。

「一応難しい言い回しが好きなのところにも顔を出すからねえ♪」

一通り読んだが、内容はシグナルの言っていることと変わりはない。絶対裏がありそうな気がするが、歯向かってどうにかなる相手じゃない。

「……契約してやるよ」

覚悟を決め、契約書にサインをする。

書き終った直後に車が止まる。拠点とやらについたのだろうか。

「ついたよ♪ まずは契約書を確認してから説明を細かくして歓迎会だね」

思ったより抜けていると感じたのは俺だけだろうか？車を降りると見知った建物が目に映る。

「ここってどう見ても市役所なんだが」

「だからここが拠点だって。格好よく言おうとギルドかな？」

どうでもいいわ！　　というか市役所に自警団ってあるものなのか？市役所に入ると何度か見たことのある普通の市役所だった。

「こっちだ」

シグナルと揺波の後についていった先には「部外者立ち入り禁止」とだけプレートの貼ってある金属製の扉が、異様な雰囲気をもし出していた。

災禍の幕開け 4 (後書き)

一週間も間が空くといろいろあれかなと思いきやあらずじ制度を導入してみえました。

もう少しで2週目も終わりか・・・

災禍の幕開け 5 (前書き)

2週間ぶりの更新です・・・w
本当に申し訳ありませんでした！ 詳しい理由(言い訳)は活動報告の方に記載しているのでそちらの方を参照してください。
では、今回は魄さんの番です！

災禍の幕開け 5

無機質とも感じられる部屋で、向かいにはシグナルが座り、横には揺波が立っている状態で確氷は契約書にサインをした。

「……ほら、書いたぞ」

「よしっ、じゃあこっちは確氷クンが管理してね。ああ、言い忘れただけどその契約書は肌身離さず、無くさないように管理してね♪」

そう言われて確氷はシグナルから1枚契約書を渡される。

その契約書を受け取った瞬間、確氷自身学校に行き、何気ない生活を送る『日常』と、犯罪者や能力者と関わる事になる、今まででは考えられない『非日常』とを繋ぐ、1枚のただの紙切れである筈のこの契約書の重みを感じた。

「……さて、契約書を受け取って思う所があるだろうけど、ここで確氷クンの今現時点での能力を知りたいからね♪ 場所を移して、ここに居る揺波とちよつとした模擬戦を行ってもらうよ♪」

「……わかった。って、はあ！？ 俺の能力自体、お前が昨日確かめたじゃないか！」

「んー、まあそうなんだけどね。昨日は単純に確氷クンの能力を目覚めさせる事が目的だったからサ」

「とりあえず、模擬戦の内容事態は俺から説明する。ああ、あまりにも不甲斐無い様だったら、大怪我の一つや二つ付くからな？」

「ま、そういう事だから♪ んじゃ、確氷クン初の実力テストの開始！ ってところかな。まあ、揺波の能力を知るいい機会だとおもって頑張って来てね♪」

有無を言わさずシグナルは確氷と揺波を市役所から追い出す。確

氷自体、シグナルに言われるがままに付いて行く事しか出来なかった。

「……揺波さん？」

「俺の事は煉魅でいい」

「う、じゃあ煉魅。模擬戦って何をするんだ？」

「ああ、簡単に言うと、“立ち上がる”。ただそれだけだ」

揺波の言葉に、「？」を浮かべながらも、ある大きな公園に碓氷達は着いた。

「さて、『俺を、見ろ』」

公園の真ん中まで進んだ碓氷は、振り返り様に揺波が発した言葉が耳に届いた瞬間、視界の中が揺波ただ一人になった。

「っ！　なんだ……これ」

「シグナルが言っただろう？　俺の能力は『雰囲気を操る事』。そうだな、人には『偽空^{ぎくう}』もしくは『ムードマスター』なんて呼ばれている。今、この公園に居る全ての人間の視界は、唯一。“俺”だ」

「これが……煉魅のou ry」

「さて、模擬戦を開始する。今から俺が変える雰囲気の中で、碓氷君はただ、『立ち上が』れば良い」

揺波がそういった瞬間、碓氷の身には空気が重くなったように感じた。

実際、揺波が発した“雰囲気”は、空気を鉛のごとく重く感じさせるもので、碓氷はその重さに耐え切れずに地面に膝を付く。

「ああ、安心しろ。この公園に居た人間は、全員別の雰囲気で公園

外に退避させている。今、この場所に居るのは俺と、お前だけだ」

「くぁ……！ 体が……うごかつ……」

「制限時間は、5分だ。それまでに立ち上がれなかったら、少々身の危険を感じてもらう」

地面にへばり付き、苦心している確氷をよそに、揺波は淡々としゃべる。

今現在確氷の目には、揺波の姿が『絶対に敵う事の無い“敵”』として映り、確氷自身既に身の危険を感じていた。

「さて、“パンドラの箱”の今現在の実力を確かめさせてもらおうぞ？」

揺波の確氷に対する試験とも呼べる模擬戦が、終了を告げる5分に近づいてきた頃、相変わらず確氷は地面に屈したままで、それを揺波が見下すような目で見ていた。

「ここまで……か。やはりお前には何か“危険”を感じないと力が出ないのか？」

5分を過ぎたために、揺波が確氷に近づきはじめた時、公園に強風が吹いた。

「その人から離れて！」

揺波の後ろ、確氷の真正面に現れたのは、見た目10歳前後で、長いポニーテールをした一人の少女だった。

「ほう、この“雰囲気”の中に入って来るか」

「……もう一度言う。確氷夕夜、彼から離れて」

「話はシグナルから聞いている。君が夕緋か」

夕緋の方へ振り返りながら、揺波は確氷に近づくのを止めなかった。

「いいからはな」

「今、俺が、話しているんだ。悪いが『黙っていて貰おうか』!!」

揺波が言葉を張り上げた瞬間、確氷達が居る“空気”が一瞬にして凍りつく。

「ああ、そういうシグナルがパンドラの能力を解放したのと同じやり方でやるか」

揺波は夕緋に向けていた体を確氷に戻し、そして冷たく言う。

「早く立たないと、あの子が君の変わりに傷つくよ？　まあ、俺は紛いなりにも紳士だ。手荒な真似はしないがな」

そう言って、揺波は夕緋の方へ向きなおすと、地面に落ちていた“小石”を拾った。

「よし、君のお望みどおり、確氷君からは離れてあげよう。ただ、今彼のテスト中なんだ。その妨害をしたという事で、ちよいと付きあってもらおうよ」

揺波がそう言って、拾った小石を真上に投げた瞬間、確氷と夕緋

の視界から揺波が消えた。

「……え？」

人が消えた。

碓氷の頭の中には、揺波の能力は“雰囲気を操る”と言う事だけ。“消える”と言う能力ではなかった筈だ。と言う漠然とした混乱が頭を巡る。

しかし、そんな碓氷の混乱をよそに、目の前に居る夕緋は叩かれたような、押されたような感じでその場を左右に揺れていた。

「さて、君は最近言われている、『嘘か真か、全てが謎に包まれた都市伝説』の一人だ。そんな君が“今”、“ここに”来たって言うのは、やっぱり碓氷君のパンドラの能力が気になるのか？」

「……関係無い」

「ハハッ！ まあ、いいさ。今ここで俺をその“風的能力”で倒すか、碓氷君がここに来てくれる事を願わない限り、お嬢さんは碓氷君にも、パンドラの箱にも近づく事は出来ないよ？」

「……」

碓氷の目にはただ夕緋がその場をうろうろとして居るようにしか見えない光景でも、実際に戦っている揺波と夕緋では、圧倒的な力の差が明示されていた。

いつの間にか公園は嵐が来たかのように風が吹いている。

嵐のごとく風が吹くものだから、碓氷は夕緋の能力が“風を操る”事だと認識はしたが、その風が一向に止む気配が無い。

逆に、その風自身が夕緋の体を傷つけているようにも碓氷の目には映っていた。

……どれぐらいの時間がたったのだろうか。

実際には、まだ揺波と碓氷の『模擬戦』という名の試験が始まってからものの10分しか経っていないにもかかわらず、碓氷も、夕緋も数時間ずっとこの調子でいるように感じられた。

そして夕緋は揺波との戦いに置いて、半ば終わらない事を意識していた。

自分が“戦う事”を放棄すれば、たとえ自分が傷ついてもこれほどの能力を使い続ける事は出来ないだろうと予想していたからだ。しかし夕緋は“戦う事”を止めなかった。否、止める事が出来なかった。

「ハハッ、どうした？ お嬢さん。だいぶ顔色が悪いが、少し休むか？」

未だ姿の見せない揺波が、茶化するように夕緋の耳のそばで囁いた。

「……五月蠅……い」

感情的に風を操ろうとした夕緋だったが、これまでの揺波との戦いのせいが、その場に倒れる。

「まあ、俺を完全に“意識”した時点で、君は俺の意のままなんだけどな。戦う“力”を持たない俺は、水面に小石を落すがごとく、人為的に“漣”^{さざなみ}を起こして身を守らせてもらっている。悪いな、戦いを止めたくても止めれない、『俺に敵意を向け、攻撃しなければならぬ』霧囲気に勝手ながら変えさせてもらった」

そういつて、倒れた夕緋をその場に寝かし、碓氷へと振り返る。
その手には昨日碓氷に突きつけられた刃物があった。

「碓氷君。今この子は俺のちよつとした行動で簡単に殺せてしまう状況だ。さて、どうする？」

「お、碓氷じゃん。そんなところで座って何やってんだ？」

揺波の問いかけに答える前に、碓氷がよく知っている声が聞こえた。

振り返るとそこには天月と風紀委員長の美原紗希が立っていた。

揺波は、何か焦った様な顔をし、2人を見ていた。

「い……や、ちよつとな」

「まあ、いいけどな。ところで、あそこにいる黒と赤の人はお前の知り合いか？」

「……つい最近知り合ったばかりだけどな」

「天月君！ あの人からはな」

「……はあ、今日は久しぶりに能力を多用した。碓氷君、先に戻っている。試験は中止だ。ただ、当初予定のノルマを達成できなかったのは報告する」

圧倒的な雰囲気の中、揺波から発した言葉が聞こえた瞬間、公園内を包んでいた『威圧感』や『緊張感』さらには『揺波に対する敵意』全てが取り除かれる。

「待ちなさい！ 貴方、この人じゃないでしょう！？」

「だから何だ？ これ以上俺をイラつかせると、“潰すぞ”？」

「止めろ！ この2人には関係無いだろ！？」

「おい碓氷。お前らは俺を置いて何を話しているんだ？」

「……そうだな、一つ確かめたい事があった。俺の言葉は聴かなく

ても聞こえなくても構わない。……もし、『力の支配者』がお前たちの前に現れたらどんな雰囲気になるんだろうなあ」

最後に揺波が発した言葉、それによって俺たちは震え上がり、蛇に睨まれた蛙のごとく固まった。

この時、確氷達を感じ取ったのは、明確な『死』のイメージ。どんな些細な動きでさえ見せたら『殺される』と言う直感が働いた事により、3人はほんの一瞬だったが呼吸をする事さえも止めて、ただただ揺波の事を見つめた。

「……さて、確認したい事も済んだし、俺は戻って休む。今日はお帰って大丈夫だ。何かあったらこっちから連絡する」

そう言って揺波は公園を後にし、確氷達4人はただただ呆然とした。

「なんだったんだ？ あのカッコイイ男は」

「……そうか？」

「いや、黒のスーツに灰色のワイシャツ、紅いシルクハットと手袋を“自然”に着こなしているのは相当だぞ」

始めに言葉を発したのは天月で、確氷は揺波が去ったあとともまだ震えていた。

「ハハッ！ただ能力が無く、“戦う事”すらした事がなくて俺の“雰囲気”を感じなかったのか、また別の理由で“雰囲気”ごと無視したのか……パンドラの箱を“観測”していると面白い人間に出会えるな」

公園を出る間際、揺波は誰にも聞こえる事無く呟いた。

災禍の幕開け 5 (後書き)

やはりこのリレー小説・・・みんな遠慮がちかもしれない？
かといってカオスなものはどうpできぬう・・・w
w

災禍の幕開け 6 (前書き)

前書き、特になし。

今回は丸樽さんの番です！

災禍の幕開け 6

「ふう、まったく制服汚しちゃったな……」

今は古びて誰もいない雑居ビルの屋上で近衛が呟く。

制服に何か付いたのだろう、『それ』を必死に落とそうと懸命に擦っているのだが、『それは』一向に取れず、擦るたびに広がってゆく。

「ああ、もう！ これ大事な一張羅なのに」

がつくりと肩を落とし、なかなか落ちない『それ』を『赤黒い血液』に恨めしい視線を送る。

近衛の制服にはべっとり人間血液が付着していた。

そして、彼女の周りには制服に染みとして付いている血の持ち主であろう男が三人、目も当てられない姿で横たわっていた。

一人は目を見開き、全身を殴打されたような跡を付け、両手両足を本来曲がるはずのない方に曲げ、一人は煙を上げ、異臭を放ちながら炭と成り果てていた。

残る最後の一人は……切り刻まれ人としての形をほとんど残してすらいなかった。唯一無事だった頭部からは止め処なく血が流れ屋上を赤で染め上げていく。

「もう！ どうしてくれるんですか？」

少し怒った顔でもの言わぬ死体と成り果てた彼らに問いかける。

もちろん返答はなく、近衛は怒った顔から呆れ顔に変えて一言。

「まあ、いいです。洗えばいいですしね。はあ、まったく……」

そのまま、眼の前にある死体を一瞥することなく退場しようと屋上の扉を目指す。

本来彼女はこの時間帯は学校の図書館で本を読んでいるはずだったのだが、碓氷を狙って街に來た能力者がいるという情報を得たので、わざわざ時間を割いて出向いた次第だ。

最初は、あの『パンドラ』を狙う能力者とあって期待していたのだが、先ほどの三人との戦闘でその期待を悪い意味で裏切られることになってしまった。

「はあ……。ぬるい相手でした。久々の戦闘だったのに」

どこか不満な声を漏らして、頭に碓氷の顔を思い浮かべる。

聞いた話だと能力を使用できるようになり本気ではないとはいえあのシグナルを退けた。そんな今の彼と戦えば少しはこの鬱憤したものを晴らせるだろうかと考え優しい微笑みを作る。

だが、すぐに微笑を消し、邪念を振り払うように頭を数度揺らす。

（駄目駄目、もうちょっと成長してからじゃないと……。それに彼とはお近づきになりたいし物騒なことはなるべく考えないようにしなきゃ）

立ち止まり、眼を閉じ心を落ち着かせる。

碓氷が『パンドラの箱』を開けたと聞いてから、どうも自分は落ち着きがなくそわそわしている。それは近衛にとっては仕方のない

ことなのだが、この状態では『パンドラの箱』の本当の力というものを知る前にこの争奪戦から脱落してしまうだろう。

今一度、慎重さを取り戻さなければいけない。でなければ、この先生に残れない。

眼を開け、すっかり闇夜になっている空を見上げる。その時浮かんでいた彼女の表情はいつもにこと本心が見えない笑みを浮かべているのではなく。

近衛この『本来』のどこまでも冷め切り淀みきったものだった。

「クハッ、怖い顔してるねえ。お嬢さん」

誰も居ないはずのビルの死体しか存在しない屋上に男の声が響いた。

近衛はさつと声のした方向に振り返るが、屋上に続く階段への出入り口の扉しか目に移らない。

この声は聞き覚えがありすぎる。

軽薄で何を考えているのか分からない人で、雲以上に掴めない飄々とした態度を取っていて、いつも自分の知り合いであるちっちゃい少女を怒らせ笑っている。この街に居れば絶対に聞いたことがあるであろう街のご意見番を勤めている男の声だ。

「……はあ」

疲れきった溜息を一つ溢し、いつもの固定された表情にする。そして、ゆっくりと夜空を見上げるとそこにはいつも通りのスマイルをしているシグナルが近衛を見下ろす形で出現していた。

相変わらず神出鬼没な人だと感想を抱きつつも、こちらにも上質なスマイルを返し、

「こんばんは、シグナルさん」

「こんばんは、このちゃん」

実にフレンドリーな呼び名で挨拶を交わしたシグナルは空中から、その身を近衛がいるビル屋上に着地する。

小気味のいい靴音が静かな屋上で反響する。

「あれ？　今日は空中からお話しないんですか」

素朴な疑問。シグナルは毎度、近衛と会話するときは何故か空中でしていたので自分と同じ目線に立ってというのが珍しいのだ。

「ああ。そうだね、もう君とはああやって会話する気はないよ」

「へえ、一体どういった心境の変化ですか？」

その問いに答える代わりに近衛の後方を目線で示す。

在るのは無残な死体。都市伝説とまで呼ばれている能力者たちの亡骸。

「勝手なことやってもらうのは……困るんだよね……」

両手をやれやれといったように揺らし。殺意とはいかないまでも、純粹な敵意を持った瞳で近衛を見る。

この街には、シグナルが結成した能力者や危険な住人を駆逐する自警団の『バウンサー』が存在する。今回、近衛が殺した三人組は本来ならば『バウンサー』が処理する予定だったものだ、それを『バウンサー』に所属していて居ない近衛が横取りするように仕留めてしまった。

つまり、所属してないものが能力者を倒してしまったということ

は、近衛もその駆逐される能力者に指定される可能性が出てしまった。だが、倒したのは街に危害を出し兼ねない者たちでそいつらを倒してしまった方は危害を出さない無害な人。しかし、例え無害であらうと勝手な行動をすれば街の人たちを危険に追い込んでしまう。それ故に、シグナルは今日こうして警告に現れたのだ。

「今回は、まあ手間も省けたし、顔なじみということで見逃すよ……」

けれどね、と前置きしこの場に彼を知っている人が居たら間違いなく失神しているであろう殺気を放って、

「……次はないよ」

時間が止まったような錯覚、屋上で吹く強い風がうっとおしく二人を包む。

「肝に銘じて置きましょう」

近衛自信めったに出さない声で返答する。そして、

「そう、いやゝ分かってくれて嬉しいよ。俺もさすがに顔なじみ潰すのは心が痛いしねゝ♪」

シグナルはさっきまでの雰囲気打ち消すように明るい声を出して笑い出す。

近衛はいつものことだと知っているの、呆れた目線を送っている。

「それで、他に用件とか……ないんですか？」

質問されて嬉しいのかシグナルは無邪気な笑顔を近衛へと向けてくる。

やっぱり、この人は嫌いだ。ふと、その笑顔を見て思う。

シグナルは滅多に感情を隠さない、面白いことがあれば積極的に動くし、弄れるものを発見すれば弄り倒すし、都市伝説でありながら住民とは分け隔てなく仲良くなるなどといった感情を惜しげもなく出している。隠しているように見えるのはそう見えるだけで、とても純粋な人、いや街だ。

だが、自分はどうかだろうか。まるで、都市伝説のテンプレのように一人孤独に図書室に籠^{こも}り、今では図書室で読んだことのない本は存在しない、唯一の楽しみは月に何冊か入ってくる新しい本を時間を掛けて読むこと。シグナルとは違い人が来ると隠れ決して姿を見せることのない自分。

そして、一番嫌なのは、笑みを貼り付けて自分の感情を曝け出さないところだ。

だからこそ、シグナルの感情豊かで人懐っこいところに嫉妬し、気づけば嫌いな人になっていた。

そんな自分も汚いと思いながらも笑みでどす黒い感情を塗りつぶす。

本当に自分はいやな奴だ……。

自責をしている近衛になおも嫌がらせのように無邪気にシグナルは質問に答えている。

「ん？ このちゃん、聞いているかい」

逆に問われ、自責するのを途中で辞めて、慌てて返す。どうやら会話は続いていったようだ。

「はっ！ ええと、何ですか？ すいません、ちょっとぼっとしてました」

わたわたと手を振って答える。シグナルは少しむすっとしたが平然と言葉を発していく。

「いや、だからね。昨日は面白かったってお話だよ。まさか、あの碓氷くんに負けるとは思わなかったよ」

「またまた、手加減して負けてあげたんでしょう。じゃなかったら今頃碓氷くん病院ですよ」

「クハハ、それがね……、意外とやれるみたいだね。手加減はもちろんしてたけど、最後の方は驚いちゃったよ」

「最後の方……？」

小首を傾げて続きを待つ。彼とシグナルの戦いは一部始終を知っているわけではないが大体の事は情報収集済みだ。そして、その戦闘に関する結果を見ても疑問を持つことはなかった。

シグナルが手加減をしてわざと負けた。それが、近衛の出した答えだったのが、何が違うのだろうか。

「正直に言うけど、最後のときは躊躇いなく、されども軽症で済ます程度の威力で攻撃したんだけど……」

「だけど？」

「何の変哲もない鉄パイプで吹き飛ばされちゃったんだよね♪」

「変哲もない？ あれには能力が付加されていたんじゃない？」

おかしい、あのシグナルの能力で生まれた刃がただの鉄パイプ一本に負けるわけがない……。しかし、敗れてしまったのまた事実であって真実だ。

「そう、何の変哲もないどこにでもある鉄パイプ……。それに、俺の能力が打ち消された……」

呟く様に、そしてどこか嬉しそうにシグナルは言葉を紡いでいく。

「つまりさ、あの一瞬。彼にとっては生死を決めるかもしれないあの瞬間に！ 『パンドラの箱』が一時的ではあるが力を解放したかもしれないんだよ！！」

叫ぶと同時に場を響かせるように笑い出す。

「面白い！ 面白いよ！ 一瞬だが彼は力を解放させた！ 最高だね！ だからこそ俺は彼を、確氷夕夜を我が『バウンサー』に勧誘したんだ」

一人の世界に入り込み、演説のように語ったシグナルをよそに近衛は未だかつてないほどの衝撃を受けていた。

『パンドラの箱』が開いた。一瞬だが開いた。その言葉が頭の中をぐるぐると回り、上手く操作できない感情をより一層制御できなくなる。

今すぐにでも、彼に会いたい。会って真相を聞きたい。

その思いが加速し、近衛の足を屋上の出入り口への扉へと向かわせる。

シグナルを通り過ぎ扉を開けようとしたその時、不意にシグナルから声を掛けられる。

「おや、もう行くのかい？ ああ、仕方ないか。だって『パンドラの箱』さえあれば……」

今の近衛は、どうでもいい話ならば無視、いや耳に届いてすら居なかっただろう。しかし、シグナルの次に放った一言は近衛の耳を震わせ脳にまで響く。

「都市伝説になってしまった君を元の人間に出来るかもしれないからね」

近衛とシグナルの間に。

とてつもなく巨大で、とてつもない速度で、赤い血のような色をした拳が振り下ろされる。

轟音が辺りを支配し、落とされた拳による衝撃が波のように襲いかかる。

古びたビルのあちこちで嫌な音が木霊し、奇跡的に倒壊を免れる。

落とされた拳は直ぐに原型を留めなくなり、墨汁やインクが水で滲むように消えていく。中心地の近くにいたにも関わらず無傷なシグナルはにやにやとした笑みを拳が消え、砂埃が弱まりようやく見ええた近衛に向ける。

対して、近衛は衝撃にやられたのか血濡れだった制服は所々破れ、三つ編をしていた髪は解けてストレートになり顔のほとんどを覆い隠している。そして、手にはいつの間にか握られている万年筆が一つ。

「ほう、久しぶりに見たよ。君の能力、確かに幻筆>だったっけ。ええと、ルビは……」

傍と言葉を止めるシグナル。目の前には幽鬼のように佇む近衛のたった一つ髪の毛から出ている眼球がそれ以上喋るなど語っていた。別にそれで口を噤つぶんだわけではない、シグナルはこの程度で喋らなくなる男ではない。

「……いつも笑ってばかりいて気味の悪い子だと思ってたけど。何だ、やれば出来るじゃないか」

ならば何故、止まったのか、それは何時も一定の表情しか見せない近衛が怒りを露骨に顕あらわにし、普段絶対に人に向けない殺意が籠もった視線を送ってくるのが面白かったからだ。

土埃が消え、お互いの顔が完全に見えるようになり、その声が響く。

「……………殺す」

全ての憎しみと恨みと嫌悪を合わせたような声。近衛の『本来』の声がシグナルと一緒に共有している世界を満たしていく。

ずっと、音もなく静かに万年筆を構える彼女にシグナルの知る近衛は居ない。

面白いと思った。だが、同時にここで終わらせるのは惜しいと感じた。彼女はこのあとの展開を面白くしてくれるかもしれない、そんな期待をどこからともなく沸かし、考える。

（近衛この……何時も傍観者を決めていた彼女。しかし、これで彼女は動くだろう傍観者から当事者へと変わるだろう。クハハッ、面白くなりそうだ……。これで場が盛り上がりがないというのならその

時彼女を潰せばいいや)

結論は出た、今まさに能力を行使し狼煙を挙げようとする彼女に喋りかける。

「殺す、ね。俺を君ごときが殺すか。クハハハハハッ!!」

「知らない……。殺せなくても殺す」

虚ろな瞳の中にありとあらゆる負の感情を込めに込め近づく近衛。

「はあはあ。いやゝ、笑わせてもらったよ」

さらに一步。

「興ざめだ。怒りで前の全然見えない君を潰しても意味がない。そんな、今出来たような薄いもので来られても意味がない。もっと、そうもつと憎しみも苦しみも嫌悪も深く濃くしてからではないと意味がない。張り合いがない。だから……。今日は戦わない」

そう言って、踵を返すシグナル。

「逃がすか!!」

万年筆で一文字『拳』と空中で書く、するとさっき振り下ろされた拳と同じものがシグナルの居るところへと落ちる。

再びの轟音、先ほどの繰り返し。だが、確かにそこに居た筈のシグナルはおらず。風に乗って言葉が届く。

「それは、俺に対しての宣戦布告ってことにしてもいいけど……。今回は不問だ♪ 楽しませてくれたお礼さ。それじゃあね、このち

やん。碓氷くんが気になるならぜひ『バウンサー』に来てね♪」

それを最後に原型を何とか留まらせているビルに静寂が訪れる。

「二度と、私をそのあだ名で呼ぶな……」

相手に聞こえるはずのない台詞を呟く近衛の表情は果たしてどんなものだったのだろうか？

答えは誰にも、もしかしたら本人にも分からないのかもしれない。

ジュージューと台所で音を立てながらから揚げが一つ、また一つと出来上がっていく。

出来上がったから揚げを弁当箱に入れながら流行の歌を鼻歌で意気揚々と奏でる。

ここは、逢瀬の家であり、現在進行形で作り上げているから揚げは我が愛しのマイダーリン専用お弁当の具材だ。

記憶ははっきりしてはいないのだが、碓氷には何かお礼をしなければいけないと漠然と思いつき。初めてのから揚げ作りにせいをだしているという訳だ。

「ふっふっふん、ダーリン喜んでくれるかな」

そこには、ただただ乙女の顔が浮かんでいた。

災禍の幕開け 6 (後書き)

丸樽さんⅡ裏方の人。

今は、そういうことになってます。

災禍の幕開け 7 (前書き)

前書き、特になし。

今回は水無雲夜斗の番です！

災禍の幕開け 7

その日、碓氷は一人屋上で仰向けに寝転がって青く晴れ渡った空を見上げていた。

といってもサボっているわけではなく、現在はいわゆる昼休みなわけで屋上にはたくさん生徒が弁当を食べたりおしゃべりしたりしてたむろっている・・・

などということはなく、先程も言ったとおりあくまで屋上には碓氷一人しかない。

理由としては、この学校では基本的に屋上が立ち入り禁止になっているからだ。

そのため、屋上には鍵がかかっていて、本来は教師以外の人間は入れないようにしているのだが、碓氷はある方法を使ってその鍵を入手することに成功していたのでそんなことは関係ない。

というわけもあって気兼ねなく屋上でごろごろできるというわけだ。

しかし、ただごろごろとして午後の授業に備えているというわけではない。悩み多き高校生である彼の頭の中を支配しているのはある一つの出来事だ。

さざなみれんび
揺波煉魅。

あの公園で彼と戦ってから一週間が経過していた。

思えば一週間頭の中は彼とのことでいっぱいだったような気がする。

といっても「アッー!」とかそっち方面での悩みではなく、あくまでも碓氷が悩んでいるのは彼との戦いでのことだ。

手も足も出なかった。

“パンドラの箱”とやらを開き、非日常に足を踏み入れ、不思議な力を扱えるようにもなり、そしてシグナルという驚異から逢瀬を守ったにも関わらず、自分はある戦いで何もすることができずにただ敗北してしまった。

「・・・くそっ」

やり場のない怒りを拳を思い切り握ることによって押さえつける。守ると誓ったはずだった。日常を守ると決意したはずだった。次に驚異が襲いかかってきたとしても簡単に退けられると思っていた。だが、それが今となってはどうだろう。

シグナルに勝てたのは自分の力ではなく彼が手加減していたからであり、実際には倍以上の実力差があって、“パンドラの箱”を狙う連中を恐れて『バウンサー』に加入し、そして揺波という男には傷一つ負わせることができず、極めつけにはあの戦いでの敗北だ。

「なさけねえな、俺・・・」

「何が？」

一人しかいないはずの屋上に、何故か二人目の声。

その声に驚いた碓氷は、軽く敵襲だと勘違いしたという理由もあり、勢いよく飛び起きる。

が、そこで、

鈍い音が屋上に響き渡ったような気がした。単純に言えば、額と額から正面から激突した。

あまりの激痛に思わず額をおさえながら呻く碓氷。「いたた・・・」という今にも泣き出しそうな他人の声が聞こえてくるところから、どうやら相手もモロにこの痛みを味わってしまったようだ。

何はともあれ、悪いのは自分だ。

謝ろうとして額をおさえながらもその人物の方へと視線を移す。するとそこにいた人物は、

「声を掛けただけでいきなり額にダイレクトアタックしてくるなんて流石碓氷くんというべきかやることがいちいち大胆だね。あ、でもでもこれってもしかして狙ったのは私の額ではなく唇だったというオチ！？ それはそれで大胆すぎるというか・・・でもでも私としては願ったりというか・・・」

相変わらずのマシングントーク。

うずくまっていたせいで顔は見えなかったが、少し喋っただけで自身の特徴を全て晒けだしてしまうこの少女の正体は、もはや顔が見えなくとも特定はできる。

「なんだ逢瀬か・・・」

「その『なんだ』は何なのかなあ！？ 私としては真っ黒でどんなオーラを放っている碓氷くんに話かけるべきかどうか一週間悩んだ挙句、やっと決心が着いて話しかけてあげたっていうのに流石にひどすぎるよマイダーリン！」

「それについては悪かったよ、だから痛む額にもう一度衝撃を与えられそうな勢いで立ち上がるのは勘弁してくれ・・・」

言いつつ、さりげなく息のかかりそうな距離から一步後退する碓氷。

「んで、何の用だ？　つか俺が屋上にいるってよくわかったな」

「そりゃ愛する人のことなんだからなんでもわかるよ。と、言いたいところなんだけど本当は一週間前から碓氷くん昼休みになるとお弁当も食わずにずっとここにしていることは既に調査済みだから今日もここにいますかなーという私の予想が的中しただけだったりするだけなのだ！」

「調査済みって・・・しかも昼休みになると必ずここに来るってことを一週間前から知ってたってことは俺がこうなった初日からずっと様子見てたってわけか」

「そうそうこれぞ愛のなせる技。ここまでの執念深さは碓氷くんに対する深い愛があるからこそそのものなんだよ！」

「その執念深さと人をつける技能のことを世間一般では『ストーリーキング』と呼ぶ」

「法律に背いてるわけじゃないから問題ないのだよ。あ、そうそう要件の方なんですけど見て見て碓氷くん」

と言って、何故か持ってきていた学生鞆をごそごとと漁り出す瀨。

じゃーん！　という間抜けなセルフSEと共にその中から飛び出してきたものは・・・

「弁当・・・？」

「碓氷くん最近様子ヘンだったからさ、元気出るかなと思ってお弁当作ってきたんだ。どうどう？　女の子の手作り弁当だよ手作りだよ、て・づ・く・り」

「ありがたくはあるが『手作り』の部分強調するのはマイナス

ポイントだな。こういうのは謙虚な態度で差し出すのが至高ってもんなんだよ」

呆れながら軽くアドバイスする碓氷。それを聞いて逢瀬は「碓氷くんはテンプレ展開が望みなのか……うむむ、なかなか奥深し碓氷道……」などと顎に手を当ててぶつくさと意味のわからないことを言い始める。

いつもの光景すぎて呆れ返ってしまった碓氷は、やれやれといった風に苦笑を浮かべて、

「で、何でまた弁当なんか作ってきたんだ？ お前のことだから元気付けること以外にもいろいろ目的があるんだろ？」

「なんてシャープリーなマイダーリン……、でもこれはこれで『ワカッテル』ってかんじでいいかも……？」

「茶化してないで言ってみろよ。言わないと受け取ってやらないぞ？」

と訊ねてみると、逢瀬は急にばつが悪そうな顔をして、

「え、えっと……、どうしても言わないとだめ、かな？」

「弁当を全部自分で食べたいっていうのなら別に言わなくてもいいんじゃないか？」

いつになく意地悪な碓氷に対し、むむむ……と唸りながら悩む逢瀬。しかし、その勝負も長く続くことはなかった。

「わかった、私の負けだよ。というか碓氷くんのお断りを断ることなんてできないし……」

こほん、と逢瀬が咳払いをする。いつになく真剣な逢瀬にちよつと苛めすぎたかと少し後悔する碓氷だったが、ここまできて冗談と言えるわけもなく、とりあえず黙って話を聞くことにする。

「つまり、ね。碓氷くんが元気ないと私も元気出ないというか…、そんな碓氷くんを見てると辛くなるっていうか…心配っていうか…だから相談に乗ってあげようかなって…」

妙にたどたどしい話し方だった。

いつものマシンガントークのような喋り方や、明るい性格からして彼女がこういう風になることは極めて珍しい。

それだけ、碓氷のことを心配していたのだろう。

「ああ、悪かったな心配かけて」

ポン、と自分より少し背の低い少女の頭の上に手を乗せる。

その際特徴的なリボンが少し邪魔になったが、大した問題ではない。

「大丈夫だ。いずれ決着はつけるし、そうしたらまたいつものように楽しくやっていけるさ」

逢瀬にはきつと彼が言っていることの意図を理解することはできなかっただろう。

だが、碓氷にとってそんなことはどうでもよかった。

これは一種の儀式のようなものだ。

たとえこの先どれだけ傷だらけになったとしてもこの日常だけは守ってみせる。自分の中にあるそんな意思を明確にさせるための儀

式。

その日常の一部を、碓氷は正面からじっと見つめる。

しかし、逢瀬も頭に手を乗せられながらも少しだけ顔を上げてこちらを見つめ返してきたため、自然と見つめ合うようなカタチになってしまっていた。

ほんのりと赤く染まった頬に、上目遣いの少女。

（ああ、こうしてみればこいつも結構かわいいのにな）

微妙に気恥しくなりながらも、碓氷はそんなことを思う。

たまにはこういう雰囲気も悪くないものだな、と思ったそんな時だった。

「……いい雰囲気のところ申し訳ないのだけれど」

いるはずのない第三者の声が、碓氷の耳に的確に届いた。

警戒しつつもそちらに視線を向けてみると、そこにあったのは屋上の入り口ではなく、2 m以上はある落下防止用のフェンス。

それを背景にして屋上に立つ黒髪ロングをポニーテールでまとめた少女。

「夕、緋・・・？」

それは、今の碓氷にとって死神とも呼べるような存在。

そして、一週間前に助けようとしてくれたある種恩人でもある少女。

敵か味方が全く見当がつかない。

そんな少女はかつかつと音を立てながら日に照らされて少し熱くなったコンクリートの地面を歩き、そして碓氷の前で止まると先程の逢瀬とは違う少し攻撃的な上目遣いでこんなことを言った。

「…碓氷夕夜…話がある。内容は大体わかると思うけど今お前が関わっている事件について」

そんな彼女の口から放たれた最初の言葉は今の碓氷にとって少し予想外な言葉だった。

そのため、少し面食らってしまった碓氷だったが、

「何か、知ってるみたいだな・・・」

警戒をしながらも会話を繋げる。

敵か味方がよくわからないが、情報を教えてもらえるというのであればそこに損はない。もし敵だったとしても聞き出した後に始末すればいい話だ。

だが、彼女は揺波やシグナルと同じように都市伝説の一つで、未知数の存在だ。

もし戦いになったとして、果たして彼女に勝てるのだろうか？

緊張が碓氷を包み込む。

もし最悪の状況になったとしても逢瀬だけはこの場から逃がそうと考えた…その時だった。

ものすごくハングリーな音が屋上に響き渡った。

そんな音に、屋上にいた全員が思わずその場に凍りつく。
音の発信源は明白。顔色一つ変えず、相変わらず攻撃的な視線を送り続ける少女のお腹。

あまりにも間抜けな展開に思わず咂然とする碓氷だったが、隣にいる逢瀬はあろうことか苦笑いを浮かべながらこんなことを言った。

「えっと、お弁当あるけど貴女も食べる？」

「ふへえ、そんなことがあったんだ。もしかして碓氷くんってばものすつごくピンチ？」

お弁当を3人で囲みながら逢瀬にこれまでの経緯いきつを説明し、そしてそれを聞いた彼女の最初の感想がそれだった。

ちなみに碓氷が逢瀬に対して説明を行っている間、謎の少女こと夕緋はもくもくとお弁当を食べることに専念していたため、今まで一言も喋ってはいない。

ついでに彼女の無愛想さがそうさせるのか、黙々とお弁当を摘まんでいる姿はどこか不機嫌そうにも見える。だがこれはきつと気のせいだろう。いや、気のせいだということにしておく。

「まあ大体そんなかんじだ。ちなみに公園でのことは委員長や天月には詳しく説明してない。天月はともかく委員長はかなりしつこく聞いてきたからごまかすのにかなり苦労させられたけどな」

「なるほど、それで美原さんの様子もたまにおかしくなっていたんだね。碓氷くんの症状が出始めたのとはほぼ同時期からそうだった

からこれは何かあるなって思ってたけどこういうカラクリだったとは」

「お前なりに真剣に言ってるつもりなのかもしれないが棒読みにしか聞こえないのは何故だ……。まああれだ、委員長にはいつか話す時が来たら話そうと思ってる。天月はどうか知らないけどな」

「……それについてはいい判断だと思う」

と、突如口を挟んできたのは今まで一切会話に参加してこなかった夕緋だ。

あまりにも急な会話への参加だったので、多少驚いて言葉を失った逢瀬と確氷だが、少女はそんな二人に対してリアクションを示すことなく紙コップに入っていたお茶を口に含む。

そしてその紙コップをまるで茶道部が陶器のお椀に入ったお茶を扱うように両手で持って、

「……でも、今彼女に事情を話したことだけは納得がいかない。彼女はただの一般人……話したところで協力できるとは思えないしむしろ危険な目に合う確率の方が高い」

少女の紅い瞳が真っ直ぐ逢瀬の方へと向けられる。

「……なのに、どうしてこいつを巻きこむような真似をしたの？」

「それは……」

わからなかった。

心の奥底では彼女の言っているように、逢瀬を巻きこんでしまいかもしれないと考えていないわけではなかった。なのに、気がつけば事情を話してしまっていた。

まるで、今自分がやっている非日常で刺激のある出来事を自慢するかのよう。

(違う…!!)

頭の中でそれを否定する。

そんなわけがなかった。そんな理由で逢瀬を巻きこんでいいはずがなかった。

ならばどうして巻き込んだ？

答えが出ない。いろんな理由を考えてみるが、どれもしっくりとこない。

そんな状況を見兼ねたのか、夕緋。

「……答えられないのなら、こいつを今すぐこの場から遠ざけるべき」

平坦な声だった。だが、たったそれだけで碓氷の背筋に何か冷たいものが走った。

改めて、碓氷は今自分がいる世界のことを思い知る。シグナルや揺波、そして目の前にいるこの少女はやはり異常だ。

大したことはないと思っていた過去の自分を殴ってやりたくなった。

こいつらは普通じゃない。

改めて碓氷は彼女達のような存在の認識を頭へと叩き込む。

隣にいる逢瀬は目の前にいるこの少女が放った威圧感に対して、

どんな表情を作ったのだろうか。

恐怖しているのだろうか、涙しているのだろうか、こんなことになるのなら興味本位で聞かなければよかったと後悔しているのだろうか。

そんなことを考えつつ、ゆっくりと首を動かして逢瀬の方へと視線を向ける。

彼女は、

「私は逃げないよ？」

いつも通りの表情と、いつも通りの口調だった。

そんな彼女の様子に驚いたのはもちろん碓氷だけではない。異常である存在の少女、夕緋ですらその驚きを隠せず、ほんの少しだけとはいえ眉をひそめたほどだ。

「……逃げない？ そんなものはハッタリ……実際に体験すればわかる、人間なんてそんなもの。大体お前はこの話を信用しきれてないはず。突然『都市伝説』とか『パンドラの箱』とか言われて簡単に事態を呑み込めるほど人間という生き物は強くできてない」

「それは甘いよ夕緋ちゃん、私はこれでも都市伝説にはある程度詳しいしここ最近不思議な出来事に何度か遭遇してるしダーリンの言うことなら何でも信用しちゃうからこの話だって信用できちゃったりしているのだよ！」

「何でもって……、騙されやすいなと思って何回かお前に軽い嘘ついてた過去に罪悪感を覚えるんだが……」

「た、たまに碓氷くんの言う通りにしていると変だなんて感じるのとあったけどそういう……、はっ、もしかしてもしかして碓氷くん

って女を振り回して飽きたら捨てるタイプ!？」

「流石にそれはねえよ!!」

ツツコミを入れつつ、碓氷は大きなため息を一つ吐く。

そして夕緋の方へと視線を戻すと、

「だ、そうだ。お前の意見には賛同できるが逢瀬の気持ちを汲んでやりたいってのが今の俺の本音だ。まあお前が力づくで追い払うって言うなら流石に逃がすけどな」

ほぼあきらめたように夕緋に会話を投げる碓氷。だが、どうやらあきらめたのは彼女も同じだったらしく、呆れたようにやれやれと首を振ると、

「……わかった、夕夜に免じてここは不問にしておく。ただしこの先お前が私達の足手まといになるようなことがあれば容赦なく切り捨てる」

「夕緋ちゃんとはともかく碓氷くんの手手まといになるようならそうしてもらった方が本望かな。じゃあ全員が納得したところで置きはここまで……と言いたいところなんだけど最後に一つだけいいかな?」

逢瀬の唐突な質問に、一瞬怪訝な顔を浮かべつつも数秒後には首を縦に振る夕緋。

それを確認した逢瀬は、実に不満そうな表情で、

「碓氷くんと夕緋ちゃんってどういう関係? 『夕夜』って呼び捨てにしているところからなんだかライバル臭がぷんぷんするんだけど……?」

そして飛んできたのはごく当たり前の質問。
しかし、今この場では限りなく意味不明な質問。

思わず「は？」という声を漏らしてしまった碓氷だったが、啞然とする間もなく夕緋がまるで漫才でもするかのように、こう即答した。

「……ただならぬ関係、とだけ答えておく」

「俺心当たりない!？」

「……結論から言うと、『都市伝説』が私達の正体……そしてこの世の不思議の正体でもある」

お弁当を摘まみつつの夕緋による特別授業はそんな一言から始まった。

いきなり意味不明な言葉から始まったので多少困惑した碓氷だったが、『結論から言う』と、彼女が前置きしたことから察するに、この後に説明が続くのだろう。

もともと授業態度が悪く、質問などすることもなし、なんとなく質問する空気ではなかったのとおりあえず黙って聞いておくことにする。

「どゆこと？」

と、碓氷が決心した直後に授業態度がすこぶる良い逢瀬の質問。
流石優等生。ごく少数のクラスメイトの間で囁かれていた『雰^シ囲^リ気^アブレイカー』の異名は伊達ではないらしい。

しかし、それでひるむ夕緋ではないらしく、彼女は割り箸を器用

に操って弁当箱からウインナーを一つ摘まみ取ると、

「……人の言葉というのは力を持ってる。その力は小さなものだけど、たくさん言葉が集まればそれは次第に大きくなる。『塵も積もれば山となる』とはよく言ったものだと思おう」

言って、夕緋は小さな口を開けてウインナーを一口かじる。

言っていることの意味は碓氷でも理解できたが、それだけで何もかもがわかってしまうほど碓氷の頭はできたものではない。

「言葉が力を持つってまるでマンガの世界だな…、つまり呪文とか唱えるとシグナルや揺波みたいな不思議な力が出せるってことか？」

「……ある意味正解かもしれないけどそれは違う。個人の言葉だけでは力はあまりにも少ない。必要なのは多くの言葉。それが私達を形作る」

「形作る・・・？」

コクリ、と夕緋が首を縦に振る。

その拍子に黒いポニーテールが揺れるが、彼女は気にせず食べかけのウインナーを小皿——ここでは弁当の蓋——に乗せると、

「……私達『都市伝説』は人々の言葉が元になって完成するもの……、『口裂け女』とかそういうのが最も具体的な例だと思う」

「うーん、確かにああいうのは大抵噂が広まってできあがるものだが……つまり噂の元となる『主役』の人間の噂が広まって大きくなったそれが都市伝説になったことでその『主役』も都市伝説になるってことか・・・？ 自分で言ってる意味わからなくなってきたんだが…」

「……言いたいことは大体わかった。でもそれは違う、私達『都

市伝説』は人間じゃなくて人間の言葉からできた存在。人間の言葉が持つ力がそのまま具現化したもの」

「・・・？　ますます意味がわからないんだが・・・？」

あぐらをかいた体勢で腕を組み、頭の上に『？』マークを浮かべまくる碓氷。

対して授業を受けつつおにぎりをはおばっていた逢瀬は、それを数回咀嚼した後にそれをごくりと飲み込むと、これまた通りの調子で、

「つまり私達の言葉で作られた都市伝説がそのまんま人間の形になって夕緋ちゃんみたいに具現化しちゃうってこと？」

とんでもない逢瀬の言葉に、コクリと首を縦に振って肯定する夕緋。

「……言葉には力がある。お前達人間の身近にあるものを例に挙げればいじめとかがそれに最も当てはまる。何気なく放った『死ね』という言葉が積み重なり、結果本当に死んでしまうという例は珍しくない」

「ずいぶんと具体的な例だなおい……、確かにそう言われてみれば納得できるけどあれは心理学的な問題じゃないのか？」

「人間は言葉の力がもたらす影響のことをそう呼んでいるのかもしれないけどそれは合っているようで違う。個人の持つ力はとても小さなものだけど多く集まり、積み重なった言葉が持つ力というのは人間が思っている以上に強力なもの」

「普段何気なく放ってる言葉が実は恐ろしいものだなんて誰も思わないもんね。でも夕緋ちゃんが言っていることが本当なら神様へのお祈りが叶ったとか誰かへの呪いとかそういう不思議な現象にも説明がつくよね」

という逢瀬の適当な解釈に対して、夕緋は首を横に振る。

「……そういう現象やそういうことをして現れた私達のような存在もいるけどその例は少ない。私達の大抵は本当に何気ない言葉・・つまり『そんなものは絶対に存在するわけもない』という無責任な言葉から生み出される。その多くが都市伝説から生まれることから私達は自分達のことをそう呼んでる」

「なんとなく納得いかないが……もし仮にそうだったとして、お前達の不思議な能力についてはどう説明するんだよ。いくら都市伝説でもそこまで細かい設定を考えるヤツなんてごく少数しかいないはずだろ。お前の言う通りならそのごく少数の言葉が具現化するとは思えない、そこはどう説明するんだ？」

「……能力についてはかなり小さなものでも採用されてしまう。例えば、都市伝説を作り出した100人の内一人が『その都市伝説に現れる女の子は炎を操る』という勝手な設定を加えただけでその『都市伝説』は炎を扱えるようになる……。簡単に言えば1つのコップの中にいろんな水をそそいでいくのと同じだと思えばいい。そのいろんな水の中に混ざっている『塩』が『能力』……そういう風に考えるのが一番妥当だと思う」

「なんともいい加減な設定だな……、それだといろんな能力を使えてしまうことにならないか？」

「……そんなことはない。言葉の中から抜き取られるのは共通してる部分だけで100人中一人が『雷を操る能力』という言葉を発したのに対し三人が『炎を操る能力』という言葉を発した場合、炎の能力が優先されて雷の能力は消え去ってしまう」

「多いものが優先されちゃうってことだね」

軽い調子で補足した逢瀬に対し、今度はコクリと首を縦に振って肯定する夕緋。

「……この現象についてはまだ正確に分析できてるわけじゃない。でも長い時間をかけて調べてみて一番辻褃が合う説がこれだった……、他の連中も独自に調べた結果必ずこの説に行きついていたらほぼ間違いはないと思う」

なるほどね、と適当に相槌^{あいづち}をうちつつ、碓氷はこれまでに得た情報を整理してみる。

まず、この少女の話はほとんど納得のいくものだったということ。言葉が力を持つということについてはあまり信じ切れてはいないが、それ以上の不思議な力を持つ彼女達のような存在がいるということ、そういう力があってもおかしくはないのだろう。

しかし、何かが解せない。何が解せないのかはよくわからないが、とにかく何か喉に詰まっているような……、原因がわかっていないのでどうしようもないのだが、とにかく嫌な感覚だ。

「——で、ここからが夕夜が今関わっている事件の……、夕夜？」

夕緋の声で、はっと我に返る碓氷。

どうやら深く考え込みすぎていたらしく、そんな碓氷を怪訝に思ったのか夕緋が不思議そうにこちらを見つめている。

そんな彼女に「なんでもない、続けてくれ」と返事をする、しぶしぶといった様子で納得したらしく、講義が再開される。

「……じゃあ、ここからが夕夜が関わっている事件についての話。といっても私はシグナルや揺波が作った『バウンサー』については詳しく知らないからそれについて話すことはできない」

「やっぱあいつらと団結してるってわけじゃないのか。あの公園

でも思いつきり敵対関係っぽい雰囲気だったしなあ……。事情を聞こうにも気付けばお前の姿は見当たらなくなってたし」

「……あの時はまだ決心がついてなかった。だから話すことができなかった、それだけ」

「決心？」

「……そんなことはどうでもいい。今は状況を把握しておくことの方が大切」

妙に強い口調だった。

どうやら、あまり触れてはほしくない話題だったのだろう。そうでなければ今まで冷静で淡々とした口調だった彼女が、そんなふうになることはない。

まあ話の内容からして後で説明してもらえそうだし今はいいか、と納得しつつ確氷は再び彼女の講義に耳を傾ける。

「……まず最初に言っておくべきことは、私達に共通している目的があるということ。もちろんそれはこの街に存在している『都市伝説』だけじゃなくて他の、世界中の『都市伝説』も共有している目的」

「な、なんかすっごい大規模な話になってきたね、これってもしかなくとも確氷くんってば本当にとんでもない事件に巻き込まれちゃってる？」

「……そう、これはヘタをすれば地球上にいる不思議で強力な力をもった『都市伝説』が全面戦争を始めてしまってもおかしくない問題。そうなればどうなるか……、お前達でも少し考えればわかるはず」

「キューバ危機並の大問題だねそれ。スケールが大きすぎてイマイチ実感が湧いてこないけど……そんなスケールの大きい問題と確氷くんがどう関係してるの？」

「……“パンドラの箱”、か」

夕緋の代わりに確氷がその答えを口にする。
そして、どうやらその答えは正解だったらしく、コクリと首を縦に振る夕緋。

「“パンドラの箱” って…あの『開けたら災厄が振りかかるー!』
とかって箱だよね？」

と、補足説明を入れたのは逢瀬だ。

「でもそれと確氷くんは何の関係があるの？」

「……“パンドラの箱”、それは確かに存在するもの。そしてそれは今、確氷夕夜という一人の人間が所持している」

答えにもならない答えを淡々と告げる夕緋。

対して今まで会話に参加せずから揚げをほおばっていた確氷が、

「ちよつと待て、俺ほれはほんなのはそんなの持つてないぞ」

「確氷くん確氷くん、私の作ったから揚げがおいしいのはわかるけどそこまでして食べてほしいわけじゃ…あ、でも夕緋ちゃんの話と私の作ったから揚げの価値感が拮抗しているというのはいいいことなのかー!？」

ほぼ日常モードの逢瀬に、日常モードでから揚げを咀嚼する確氷。
そんな空気に耐えかねた夕緋がコホンと一つ咳払いして雰囲気
元に戻し、それによって確氷はから揚げを飲み込み、逢瀬は少し申
し訳なさそうに黙り込む。

そんなこんなで満足したのか、講義を再開する夕緋。

「……まあ、夕夜が知らないのも無理はない。あれは現実には存在しないもの。そして私達と同じような……いや、私達以上に不思議な存在」

「お前ら以上に不思議って…、一体その“パンドラの箱”ってのは何なんだ？ どうして俺がそんなものを持ってる、どうしてお前達はそれを狙ってるんだ？」

という碓氷の言葉に、答えを出さない夕緋。

戸惑っているのか、彼女は先程から碓氷と視線を合わせようとせず、どこか俯き気味で、しかし時々何かを言いだそうとするが、ためらって途中でやめる。

そんな行為を繰り返すこと数回、しびれを切らしたように、逢瀬。

「言いたく…ないことなの？」

「……言いたくは、ない。でも、言わなきゃいけない。そのために、今日私はここにいる」

そう言うと、彼女は意を決したように碓氷の目をまっすぐと見据える。

そして碓氷も目を逸らすことなくそんな彼女の瞳を見つめる。

吸い込まれそうなスカーレット緋色の瞳。その日本人特有の名前に似合わない、外国の雰囲気を持つ色。

そんな瞳を持つ彼女が、

「……“パンドラの箱”は——」

真実を告げようとした、その時だった。

「麻野夕緋ッ!!」

バンッ! と勢い良く屋上の扉を開く音と共に、そちらを振り向いた碓氷の視界に映った人物は、

「委員長…?」

腰のあたりまであるストレートロングヘアーに、少し身長の高い、クラスの委員長。

つまり、『美原沙希^{みはらさき}』は、知り合いである逢瀬や碓氷ではなく、本来接点のないはずの不思議な力を持った『都市伝説』の少女の名を叫びながら、屋上に現れた。

災禍の幕開け 7 (後書き)

2週連続で一万文字突破したが・・・

退きません！ 媚び諂いません！ 反省してません！！

(ピンポ

ーン

おや、誰か来たようだ。

災禍の幕開け 8 (前書き)

2週間空いたので4回分一気に更新です！
今回は神無月末人さんの番です！

災禍の幕開け 8

そして美原は、碓氷と逢瀬には全く目もくれず、一直線に夕緋に向かつて駆け出した。

その表情は、まるで待望していた千載一遇のチャンスを逃すまいというような焦燥感に駆られていて、怒っている時とは別種の迫力があつた。

「うおっ……！」

駆け寄ってくる彼女の目標は夕緋のようだが、その延長線上にいる碓氷は、自分へと迫って来ているように感じて思わずのけぞってしまった。

そんな碓氷の反応を見て、怪訝けげんそうに眉をひそめた夕緋が、初めて美原の方を振り向く。

その時には既に、美原は目と鼻の先まで肉薄していて、更には夕緋の腕を掴もうとしていた。

「きゃっ！」

危ういところで夕緋は可愛い悲鳴を上げながら、飛びのいて身をかわした。

「ちょ、ちょっと、逃げないでください！」

美原がそう要求するが、夕緋は警戒をあらわにしてどんどん離れていく。

そうして3メートルほど距離を置いた時、夕緋は碓氷へ視線を移した。

「……邪魔が入ったから、もう帰るわね。また日を改めて話すから、少し待っていて、夕夜」

「お、おう……」

「あっ、待ちなさい！」

美原が呼び止めるものの、夕緋が聞き入れることはなかった。屋上に一瞬だけ強い風が吹き、その場にいた全員が目をつむった。

そして再び目を開いた時には、夕緋の姿はどこにもなかった。

「……相変わらず、逃げ足は速いですね」

苛立ち半分、徒労感半分といった感じの声を落とす美原。

未だに逢瀬と一緒に座り込んでいる碓氷が、傍で立ち尽くす美原を見上げる。

彼女は夕緋にいったい何の用があったのだろうか？ 二人の関係は？ 気になる。

「えっと……美原先輩って、夕緋と知り合いだったんですか？」

「知り合いといえば知り合いですけど……仲はそんなに良くないですね」

「それはまあ……さっきのやり取りでなんとなく分かりました」

一方は鬼気迫る顔で追いかけて、もう一方は警戒をあらわにして逃げる。鬼ごっこで遊んでいたと仮定しても、とてもじゃないがフレンドリーな関係には見えなかった。似たようなやり取りを挙げるとしたら、警察と逃走犯の関係の方が適切だろう。

「美原先輩は、夕緋に何の用があったんですか？」

「それについては、話せません。……って、そういえば」

何かに気付いた面持ちで、美原が碓氷と逢瀬の顔を眺める。

その厳しく細められた双眸に戸惑う二人。

「な、なんでしょうか……？」

少しでもこの気持ちを払拭しようと、碓氷が問いかける。

「あなたたち……麻野夕緋が突然消えたにもかかわらず、驚かないんですね」

返ってきたのは、どこか探りを入れるような声。

その発言の意味するところと、そして碓氷たちと同様に驚いた様子のない美原に気付कि、碓氷は息を呑んだ。

それだけで、美原は大体のことを察したようだ。

「……どうやらあなたたちも、この街の非日常的な一面について知っているようです」

「ということは、美原先輩も？」

「ええ、そうです」

「じゃあ、美原さんにも何か『都市伝説』があるんですか？」

そう質問したのは、碓氷ではなく逢瀬だ。非日常的な事情を知っても、そういう事柄への興味は健在のようだ。

「それについても、答えることは出来ません。あなたたちが敵か味方か分からない以上、重要な情報を明らかにするわけにはいきませんので」

「俺たち、美原先輩と敵対するつもりはないですよ」

「それを判断するのは私です。すみませんが、これはかなりシビアな問題ですから」

「確かにそうかもしれないですけど……」

理解はできる。ただ、納得がいかない。

友達と呼べるほど碓氷は美原と親しくないが、それでも世間話をする程度には仲が良い。特に天月の話となると、自分か彼女のどちらかが用事などで立ち去らない限り、長く会話が続くことも少なくない。にもかかわらず、無条件で信じてもらうことは出来ないというのだ。

怒りか、悔しさか、悲しみか……適切な名称の見当たらない感情が湧き上がる。

「ただ――」

碓氷がその感情を抑えて黙っていると……美原の優しげな声音が耳に届いた。

「私も、出来ればあなたたちと敵対したくはないと思っています」

碓氷が、いつの間にか俯き気味だった顔を上げる。

「美原先輩……」

その言葉で、少し救われた気がした。

まだ納得はいかないけれど、おかげで名状しがたい感情が霧散したのを感じた。

言ってしまった、安心したのだ。

これから先、どういう展開が待ち受けているのかは分からないが

……少なくとも現時点では、知人である美原紗希は、自分たちと同じ気持ちであるから。

「……それはそうと、碓氷君？」

と思ったの束の間。直後には怒気を身にまとった風紀委員長にがつしりと両肩を掴まれていた。例の迫力を目の前にして、碓氷は圧倒される。

「屋上は基本的に立ち入り禁止で、扉には鍵が掛けられてあって、教師以外の人は来られないはずなんです……どうやってここへ？」

「え？ それは、天月から複製の鍵を――じゃなくてっ！」

慌てて口を両手で塞ぐ。が、もう後の祭りだ。

「へえ、そうですか。また天月君ですかあ」

心なしか、怒りの度合いが高まった気がする。ついでに指が食い込んで肩が痛い気もする。

しかし、揺波煉魅のごとく逆らえない雰囲気をも美原が発しているので、碓氷は全く抵抗できない。

（こうなったら……助けてくれ、逢瀬！ ……って、あれ？）

碓氷が首を動かして逢瀬にアイコンタクトを送ろうとする。……

しかし、屋上のどこにも逢瀬の姿はなかった。

直後、ポケットの携帯がメールを受信して震えた。

まさか……と思いながら碓氷はメールの内容を確認する。

そこには、簡潔にこう書かれていた。

『ごめんね、ダーリン。先に教室に戻ってる』

予想通りの、裏切りの通知。

（薄情者めえ……！）

怒りと悲しみで、携帯を持つ手が震えた。

「これはもう、天月君も同罪と見なさざるを得ませんね。碓氷君だけでなく、天月君にも処罰を受けてもらわないといけません」

「……ということは、美原先輩は元々、俺を連れ出すためにここへ？」

「ええ、そうです。想定外にも、麻野夕緋を見つけたのでそちらを

優先しましたが、屋上へ来た目的はその通りです」

碓氷は屋上の扉を見た。扉には正方形の小さな窓が嵌められてあるので、そこから夕緋を目に留めたのだろう。

「そういえば、碓氷君は余計な真似もしてくれましたねえ」

「え？ 余計な真似？」

首を傾げる。なんのことだかさっぱり分らない。

「私が現れた時、あなたが驚かなければ、麻野夕緋が振り向いて私に気付くことはなかったんです！」

「いや、ちょっと待て！ それは言いがかりだろ！？」

理不尽なことを言われて、つい敬語で話すことも忘れる碓氷。

「バンッ！ って思いっきり音を立てて扉を開けた挙句、夕緋の名前を叫んでおいて、本人に気づかれないわけが——」

と、そこまで言って碓氷は思い出す。

（……そういえば、夕緋は俺の反応を見てから美原先輩の方を見たような……？）

違和感がある。耳が聞こえないわけでもないのに、あんな大きな音と、自分の名前を呼ばれて気づかないはずがない。

（もしかして、あれが美原先輩の——）

「とにかく、碓氷君には処罰を受けてもらうため、生徒指導室へ連行します」

生徒指導室。その単語を耳にした瞬間、碓氷の思考は強制的に中断された。同時に、ある人物の顔が思い浮かぶ。

「……いま、生徒指導室とおっしゃいましたか、風紀委員長様？」

「ええ、言いました」

くだらだたと冷や汗を掻く碓氷。対照的にニッコリと笑う美原。

「ということは、ですよ？ もしかして……あのお方が待ち構えていらつしやるんでしょうか？」

「ええ、きつと碓氷君の予想している通りです」

サッと、碓氷の顔から血の気が引いた。

そんな碓氷に一切構うことなく、美原が襟首を掴んで引っ張る。

「それでは、行きましようか。生徒指導室——もとい、あなたたちがゴリ山先生と呼称している人の元へ」

「い……いやだああああああああああああああああああああああああああああああ！！」

その時の碓氷の叫び声は、同時になったチャイムの音をも上回ったそう。

災禍の幕開け 8 (後書き)

みんなどんだけゴリ山好きなんだ・・・w
最初はモブのつもりで出したうえに満場一致でゴリ山の参戦を許可したのでアリということに・・・w
る、ルールは破ってないからね!?

災禍の幕開け 9 (前書き)

一瞬今日が更新日だということをガチで忘れかけていた・・・。
今回は義人さんの番です。

災禍の幕開け 9

「酷い目にあった……………」

時刻は午後6時30分……最後の授業が終了してからずっとゴリ山に生徒指導という名の雑用をさせられて今に至る。アイツ、いつかお礼参りしてやる……！

因みに天月も一緒に雑用をさせられたいた訳なのだが、風紀委員長様の厳命により、風紀委員長様直々の説教も加算されている。おそらくまだ序章だろう。

そんな天月に黙祷を捧げていると、携帯にメールの着信があった。

「…………ンゲッ?!」

表示された名前は『シグナル』だった。激しく無視したい衝動に駆られるが、後々の事を考えて、メールを確認する事にした。

>>ヤッホー碓氷君☆元気かな!?

俺の方はちょっと怪我しちゃった(テヘツ☆

まあそんな事はどうでもいいんだけどね(笑)

とりあえず重要な用件があるから今からちょっと出て来れないかな? ☆

因みに拒否権はありません(笑)

>>住所は以下の通りで宜しく♪

「……………」

……………ウゼエ?!

ココ一週間、仕事はシグナルから直接メールを届けられて来た訳だが……正直、内容はともかく書き方がウザい事この上無い。

最近わかった事だが、性質が悪い事にシグナルはわざとこんなウザったらしい文面で送信している節がある。人がウザがるのを楽しんでるようだ。うん、性格が悪い。わかってたけどさ!

しかし、いくらウザいとは言え無視する訳にもいかない為、渋々ながら一緒に送られて来た住所の場所へ向かう。

大体徒歩で15分と言った所だろうか。そこは予想外の場所だった。

「……病院?」

メールを見た段階で気付けばいいのだが、そこはこの街で最も大きな病院だった。俺もたまにだがお世話になるので良く知っている。

「何でこんな場所に……?」

「来たか……」

俺が病院を見上げていると、ココ最近良く聞く声が話しかけてきた。

「揺波?」

そこには黒いスーツ以下略のいつも通りのファッションをした揺波が壁に凭れ掛^{もた}かっていた。今言う事はわからないが、他の服は無いのかコイツ? 言い辛いから言わないけどさ!

「お前も居たのか。というか、こんな所に呼び出して今日は何の仕事なんだよ?」

「今日は仕事じゃない。とにかく来ればわかる、来い」

と、説明もそこそこに病院の中に入って行く。こういうのも何だが、普通に正面から入るとは思ってなかった辺り、俺も大分非日常というものに毒されてきたのを実感してしまった。

「……………？ 何を落ち込んでいる？」

「いや、別に……」

「？ まあいい、着いたぞ」

案内されたのは何の変哲も無い、普通の病室だった。少なくとも外から見た限りでは。

揺波がノックすると、中から「どうぞ」という声が聞こえた。

揺波に続き、病室に入ると予想外過ぎる光景が目の前に広がっていた。

包帯でグルグル巻きの左足。

包帯でグルグル巻きの右腕。

包帯でグルグル巻きの胴体。

包帯でグルグル巻きの顔面。

包帯でグルグル巻きのシグナル。

「どうしてこうなった？！」

病院という事も忘れて叫んでしまう。

そんな俺の様子を眺めながら、シグナルはカラカラと笑う。包帯でグルグル巻きのミイラ男状態なのに。

「病院では静かにね☆」

「いや、まあそうなんだけど……え？　なんでこうなってるんだよ？」

正直、コレまで仕事だとかなんだとかでシグナルが戦う所を多少なりとも見て来たが……コイツがこんな状態になる状況というものが一切想像できない。

「……………車に轢かれた？　いや、そんなタマじゃねえよなあ……………。負けた？　誰に？　……………」

色々と試行錯誤した結果。

「……………そうか、ドッキリか！」

という結論に行き着いた。うん、コレが一番しつくり来る。

「…………残念ながら怪我は本当だ」

と、揺波が補足する。

「クハハッ！ ドジった☆」

と、当事者が一番無意味に明るい。

「と、まあそんな些細な事は今回どうだっていいんだよ」

「いや、個人的に凄い気になるんだけど？！ どうやったらそんな風になるの？！」

地震起こしたり、竜巻発生させたり、空中を自在に歩いたり、何してもノーダメージな奴がこんな風になっているのだ。気にならないかと言われたら嘘になる。というか、どうしてそうなったか知っておくと後々便利そうである、という打算も無くは無い。下克上の意味で！

「え…………。言ってもいいけど参考にならないよ？」

と、前置きを置くと。

「思い切りぶん殴られた、以上。おしまい☆ さて、本題だけどー」

「ウェーイト！ 待て待て待て！ 詳細カモンプリーズ！」

「確氷、キャラ変わってないか？」

揺波が突っ込んで来たが構いはしない。俺にとってコイツの弱点を知っておく事は非常に重要なファクターである。

はあゝと深いため息を吐くと、シグナルは渋々と言った調子で説明をしてくる。

「わかったわかった。とりあえず時間の都合で今回は都市伝説云々の話はスルーで行くよ。話の続きは夕緋ちゃんに聞きなさい」

都市伝説、と聞いて一瞬で思考が元に戻る。シグナルの弱点話がある方向で核心に触れようとしていた気がした。

「都市伝説って――」

「俺からは面倒だから言わないよ？」
と止められた。

「いいから黙って聞いて。時間あんまり無いんだからさ。まず、ココで言う都市伝説って言うのは所謂、異能者達の事。一応勘違いしないで欲しいけど、異能者≡都市伝説じゃなくて、異能者の中に都市伝説が含まれてるから、その点は勘違いしないように」

シグナルは指をちよいちよいと回すと、急須が勝手に3人分のお茶を用意する。＜増幅―ブースト＞の能力の応用なのだろうが、こうした生活感溢れる使い方もできるのか……。

「都市伝説の詳細に関しては俺はスルーするけど、とりあえず異能者の中にも強い能力者と弱い能力者ってのが居て、正式では無いけど、簡単にランク付されてるんだよ。Gランク以下だとほぼ一般人か一般人。FランクからDランクでちょっとした超常現象を引き起こせるレベル。現状だと碓氷君はDランク程度の力しか無いかな。潜在能力は別として」

と、空中にグラフなどが表示される。理屈はわからないが、コレもシグナルの能力によるものだろう。

「Cランク、Bランクで平均より上。地域によっては《魔術師》ウィザードなんて呼称される程度に強力な能力を行使できる奴らだね。この辺りの能力者が一般的で且つ、異能のプロフェッショナルと呼べるランクだよ」

そしてシグナルが揺波を一瞥すると、

「で、彼の正式なランクまでは把握できないけど、おそらくAランク―まあ、異能のレアメタルのような存在だよ☆」

「……嫌な例えだが……まあいいだろう……」

と、若干不機嫌な声を漏らす揺波。

「でまあ、それより上の能力者―世界で確認されているのは現状8人しか居ないSランク能力者、俺はその一人な訳だけど――」

なるほど、強い強いとは思っていたが、世界でもトップ8に入る程度の能力者だったのか、納得。

しかし、疑問は全然解消されてない。

「それで、なんでそんな奴がこんなボッコボコな状態になってるん

だよ？」

「まあ話は最後まで聞こうか☆」

時間が無いとか何とか言うシグナルだが、基本的に話し好きである。適当に相槌を打っておけば思った以上の収穫は得られるのではないだろうか？

「関係無いように思えるけど、碓氷君も能力者の基準値くらいは教えておかないと後々危ないと思ったから、教えてるんだから、話はちゃんと聞いてくれないと困るよ☆」

「ああ、わかった」

ドンドン話せ！ 情報を！

「続けると……把握出来てない能力者は別として、中には把握しているけどランク付けできないような能力者も居るんだよね。判りやすい例だと、君のパンドラの箱だね。こういうのは結果どうこうは置いておいて、とりあえず特Sランクって呼ばれてるんだ」

と、一度シグナルがお茶を啜ったので、合わせて俺と揺波もお茶を啜る。うん、旨い。

「でまあ、怪我の理由は――この前、碓氷君に交通整備のバイト頼んだよね？ 日給2万円なんて羽振りが良い仕事♪」

「ああ……」

ココ最近、悩みっぱなしだったから余り気にしてなかったが、そういう仕事をした記憶はある。

『バウンサー』の仕事と言っても、当初想像していたような仕事ばかりではなかった。

グループでの街の見回りや先程述べたような交通整備など。仕事内容そのものは現状、一般的なバイトと大差^{むし}なかった。寧ろただの交通整備で日給2万というのは非常に大きい。

「実はあの時、Sランクの能力者が街に入って来てたからね。その為にあの区画を通行止めにしてたんだよ♪」

「ああ、なるほど。それで同じSランク能力者の奴とやり合ってた訳だな」

「いや、拉致ってみたんだ☆」

「何さらりと犯罪宣言してんだアンタは?!」
思わず叫んでしまった。

「落ち着きなよ。まあ結果だけ言うて見ての通り失敗なんだけど…
俺は彼女に負けた訳じゃないんだよ——」

と、シグナルにしては珍しく鬱々として表情で、

「そのSランク能力者の彼女の知り合いに俺の知った顔が居てね…
…特Sランク能力持ちのチート…いや、バグキャラだな。それに
ボコられてこの有様、以上」

「アレ? 凄い勢いで端折^{はしよ}られた?」
とにかく、と。

「アレに関しては君が一生関わる事が無い人種だからココで打ち止
めするけど、ココで本題。おかげ様で俺はしばらく動けません。一
応、治癒力を増幅させてるけど、あと2日は動けないと考えるとい
いよ」

「あ、ああそれがどうしたんだよ?」

「わからないか?」
と揺波。

「"パンドラの箱"を実質的に所持しているグループのトップが倒
れた。コレは味方にとってピンチであり、敵にとってチャンスだ」
つまり、と。

「今のお前は野に放たれた兎状態だな」

「そゆ事♪」

何故か楽しそうにシグナル、

「一応、君と君の周囲の警備は強化はしてるけど、俺が復帰するま
での2日間、は念のため気を付けた方がいい☆」

「マジかよ……?」

「まあ迷惑掛けて悪いとは思ってるよ? という訳でお詫びとして
だけど……ジャン☆」

と、シグナルが取り出したのは数枚のチケットだった。名前を確

認すると……有名なレジャーだった。

「ココに友達誘って行って来るといいよ♪　というより、行ってくれた方がまとめて守りやすいから此方としても助かるってだけなんだけどね☆」

「……とりあえず、その方が皆の安全は保障できるんだな？」

コイツの自業自得且つ、コイツの言うとおりするのは癪だが、現実問題として捉えると、言う通りにする方が皆の安全を確保できる。そう考えて俺は渋々ながらチケットを受け取った。

「……あんなので良かったのか？」

碓氷君に護衛を付けて帰した後、病室で揺波と会話をしていた。

「いいんだよ。このままじゃ待ち惚けだしね☆」

「それもそうだが……。ところで、2日も本当に動けないのか？」

「いいや、もう動けるよ♪」

と、言って、颯爽と立ち上がってみせる。実際には碓氷君との会話の途中で怪我など完治していた。

「兎にも角にも……コレで状況は動き出すでしょ♪　虎児を得るなら、まずは餌撒いて誘き出さないとね☆」

ペンダントを片手で弄りながら、

「見てなよ……君の好きだった街は俺が彩るからさ……☆」

そして世界は闇に染まる――。

災禍の幕開け 9 (後書き)

最近後書きのネタがない・・・。
そういえば、最近トランザムしてるゲジゲジを見かけた。

災禍の幕開け 10 (前書き)

ちよいと事情もあつてこんな時間に更新w
今回は翡翠さんの番です！

災禍の幕開け 10

レジャー施設のチケットは合計6枚渡された。聞いてみる人は決まっていないが、多分いつも面子^{めんつ}になるだろう。携帯電話のアドレス帳を開き、メールを送る。

そういえばこのチケット他のところと比べて割高なんだっけ。

『バイト先で先輩からPONKOTUランドのチケットもらったんだけど、行くか?』

返事はすぐに返ってきた。いや、こっちからメール送って10秒で返すとか早すぎるだろ逢瀬……。返事はOKらしい。程なくして天月からも返信が来た。

「何だコレ……?」

返ってきたメールには何か線とか点が大量に置かれている奇天烈極まらないものだった。

『何だコレ?』

流石に解読できないので天月に返信する。すぐに返事は返ってきた。

『AAだよ。試しに文字サイズ最小にしてみ? W』

言われたままに携帯の設定をいじり、サイズを変更してみる。普段より文字が見えづらくなったが、遠目から見ると文字が浮かび上がってきた。

『行く。』

「……………紛らわしいわ天月いいいいいいいい！！！！」
レジャー施設行くかどうかの返事に手エ込みすぎだろあいつ！と
いうか何だ、アレ！？メールに書いてあったAAってヤツなのか！？
思わず叫んでしまった。通行人に誰だお前といった感じで見られ
ているし、早めに帰ろう……。先週は半ば強制にバウンサーに入ら
されたし、週1でロクでもない目に逢うのだろうか？ そうだとした
ら是非とも止めてほしい。

ヴー……ヴー……

携帯電話がバイブレーションでメールを告げる。送り主は天月らしい。今度はなんだろうか。

『そーいや俺ら以外には誰が行くんのだ？』

『未定だな。誘いたい奴がいるならあと3枚余っているけど、どうするよ』

『風紀委員長でも誘えばいいんじゃないか？』

『お前に任せるわ。』

『任されたw』

これで6枚あるうち最大で4枚な訳だが、他はどうするのだろうか。そんなことを考えていたらまた携帯が震えた。今度は逢瀬からだ。

『私たち以外は誰が来るの？』

絵文字とかが所々あるが、訳するならこんな感じか。

『天月は来るって返ってきた。あとアイツが委員長誘うらしい。』

『委員長って3年生だよな?』

あ……忘れてた。そういえば委員長3年だった。つまり受験生な訳で、遊ぶとか言語道断なイメージな訳でして……そんなことを考えてたらメールが来た。今度は天月か。2人相手にメールするって結構疲れるな。

『委員長来るってさw』

あとチケット何枚2枚か、ちょっと使いたいけどいいか?』

『分かった。』

チケットは別にいいけど。』

来るのかよ! 受験大丈夫なのかよ!? とりあえずチケットをどうするかは気になるけど逢瀬にもメール打つところ。

帰宅後、夕飯と風呂を済ませて自分の部屋に戻ろうとするとよく分からない状況に陥っていた。

一人は黒髪をポニーテールでまとめた小柄の少女、そしてもう一人はリボンつきのカチューシャが特徴的な中学生からの腐れ縁。この二人は断じて血を分けた関係でもなく、俺の部屋に居ることなど訳が分からない。

つまり、夕緋と逢瀬が俺の部屋でくつろいでいやがったのだ。別に恥ずかしい内容じゃないからいいけど漫画読まれてるし。

「お前ら来るなら来るで何かしら連絡しろよ。」

「……私は連絡手段がないから。」

「え？　一応私メールしたよ？」

逢瀬にそういわれたので携帯電話を確認する。ああ、風呂入ってる間にメールが来たのか。気づかないわけだ。2通のメールにはこう書かれている。

『夕緋ちゃんに家案内しろっていわれた。昼休みの話の続きもやるみたいだけど大丈夫？』

『あと3分で返事ないなら部屋上がつてるからねー』

「悪い、風呂入ってた。で、なんで漫画読み散らかしてるんだお前は。」

「夕夜が遅いから読んだ。」

「ゴメンゴメン、後で片付けるから。そういえば夕緋ちゃんとも連絡取れるようにしたほうがいいんじゃない？」

確かに、連絡を取り合えるようにしたほうが便利だ。神出鬼没なコイツのことだから別に要らない気もするが。

アドレス交換を済ませ、簡単に漫画を片付ける。そういえば新刊来週発売だった気がする。

「……じゃあ、昼の話の続き。都市伝説≠能力者、私たちにはある目的があってそれがパンドラの箱とも深い関係があること。」

おそらくは昼休み（後半は授業中だが）に話した内容だと思う。

俺がパンドラの箱とか言われてる珍妙不可思議な代物を持ってるらしいおかげで能力者でお祭り騒ぎだ。当事者……いや、望んでも無いのに所持者となった俺としては他所^{よそ}でやってほしいが。

「ああ」

「やっぱり危ないものなのかな？」

適当に相槌を打って話を続けさせる。逢瀬も逢瀬なりの相槌を打ってくれている。分かりにくいけど、夕緋も気にした様子は無い。

「パンドラの箱は、私の予想の域を出ないけど……というのも、どんなものか私の知る範囲では誰も分からないし、知らない。だからこの予想が外れることもある。それを念頭において聞いてほしい。」

「パンドラの箱は——」

災禍の幕開け 10 (後書き)

受験が終わって体が軽いW
さて、いつ三章に入るのやら・・・
W

災禍の幕開け 11 (前書き)

今週は魄さんの番です！

災禍の幕開け 11

「パンドラの箱は――」

碓氷が自室にて夕緋からパンドラの箱について聞くのとはほぼ同時刻、カウンター席しかない、ちょっとモダンな雰囲気のある喫茶店――どちらかと言えばBARと言った方が良く――で、天月は揺波と会っていた。

「なっ……！ それじゃあ、碓氷は……」

「ああ、今限りなく危険な状態さ。さて、俺はお前に2つの道を示す」

「？」

「今お前が手に入れた、“パンドラの箱の真実”を信じ、パンドラの箱所持者碓氷夕夜を助けるか、もしくは、この話を信じずに、碓氷夕夜の死をただ単に傍観するか……。さて、よく考えると良い。前者を選べば、お前も死ぬ可能性が跳ね上がり、尚且つ下手するとパンドラの“餌食”にさえなってしまう。後者を選べば、お前が死ぬ可能性は限りなく0に近くなるが、その代わりに友を見殺しにする事になる」

「俺……は――」

カランカラン

喫茶店のドアを開く音が、天月の右から聞え、首を向ける。

「……こんなところに喫茶店なんてあったのね」

「委員長……」

天月の目の前に立っているのは、風紀委員である天月の先輩、美原紗希だった。

「話はこの前に立っていた“黒と赤の男”から聞いたわ。……どうするの？」

「正直言って、俺が……って気持ちがある。いきなりだからな」

「まあ、ゆっくり考える事ね」

そういう美原の制服の袖や足に傷がある事から、この喫茶店の前で何が起こったのかふと天月は想像する。

「その傷……揺波さん？」

「ええ……まあちよつとね。……べ、別に天月君の事をゴニョゴニョ……」

最後の方は声が小さくなっていて聞き取れなかったが、天月は美原のその姿を見て、決心をつけた。

「ありがとう、委員長。っと、明日のPONKOTUランドの時もよろしくな」

「え、あ、うん……って、明日は学校でしょ!？」

「あれ？ そうだったっけ？ ……なんで土曜にも授業が入ってんだよ……。じゃあ、明後日な」

そう言って、天月は喫茶店を出ようと……

「言い忘れるところだった」

天月が出ようと喫茶店のドアノブを掴もうとした瞬間、勝手にド

アが開き、天月の目の前には黒と赤が見えた。

「！　　っと、揺波さんか」

「……俺の事は煉魅でいいんだがな。　　とそうじゃない。一応明後日のPONKOTUランドには、『バウンサー』のメンバー数人が入っている。一応全員さりげなく共通のエンブレムを場所は違うがつけさせているから、当日“俺が居なくて”何かあったらそいつらに頼ってくれ。……それじゃあな」

　　そういつて揺波は赤いシルクハットを左手で深く被り直し、そのまま去って行った。

「……なんか揺波さんが居るとペース狂うなあ……。あの人自体へんな人だよな」

「そう……。ね。それじゃ、今日はもう遅いから帰りましょ」

「よし！　　全員居るか！？　　」

「ハ―イ、俺がいませーん」

「天月不在っど……」

「……その若干真面目なテンションでボケをスルーしようとするのは止めてくれ」

「そのネタは古いんだよ、天月君」

「いいですか！　　今日は休日で皆と遊びに行くというわけですが、高校生としてのじk――」

「あゝ委員長、いいってそういうのは」

「えっ？　　で、でも……」

「ようは楽しめばいいんだよ楽しめば」

学校近くの駅に、碓氷、綾瀬、天月、美原の4人は集まっていた。

「そーういや天月が誘った残り2人はどこなんだ？」

「あー、その2人は事情があつて、一足先にPONKOTUランドについてるってさ」

「フーン……じゃあ、駅に集まるメンバーはこれで全員か。よし行くぜ！」

「今日は絶好のレジャー日和。昨日の月は紅かった。たぶん今日の月も紅いだろう。流石揺波。良い日を選んでくれたね☆」

「まあ、俺が動き易い日でもあったからな」

そんなシグナルと揺波の会話は、PONKOTUランドの上空——ちょうど施設全体を見渡せる場所——に座つての物だった。

「しかし、本当に良い天気だね♪ “釣り”には持ってこいじゃないか!!」

「一応“餌”は撒いておいた。それとお前の要望どおり、異能力者を一般住民が発見した場合、能力者から離れ、1番近づかないルートでそれとなく施設から出るような雰囲気で施設全体を囲つておいた」

「流石☆ やる事分かつてるね♪」

「あー、パンドラの箱が目覚めてから漸く“進展”がありそうだからな」

「そう言えば、君がこの前話してくれた“パンドラの箱の真実”つて、他誰に話した？」

「天月響矢。碓氷は夕緋という少女になにか聞いたみたいだが、俺のものとは別物だろう」

「天月君か……。今後の進展の“鍵”になりそうだね♪」

「っと、碓氷達が到着したみたいだから、俺は1度合流して来る」
「いってらっしゃーい☆」

そう言って、揺波はシグナルが作ったであろう空気の階段を降りていく。

「さて……ゲームの開始だ！」

空に座りながらのシグナルと、階段を降りながらの揺波が、同時に言った声は周りに響くことなく消滅した……。

深淵の間際にて 1 (前書き)

今回は丸樽さんの番です。

深淵の間際にて 1

PONKOTURANDOはこの街にある一大レジャー施設で、乗れば悲鳴間違いなしの絶叫マシンに始まり、本格的に作られ出ると噂のお化け屋敷、施設のほぼ三分の一を占めるプール広場、子供に人気のヒーローショー用のステージ等と言った子供連れの家族やカップルが充分に楽しめる場所になっている。

この中で特に有名なのは恋人御用達と言われている観覧車で、頂上で二人一緒に見る夕焼け色に染まった街を見るのは最高なのだそうだ。

そのためか、夕方時の観覧車に乗る人の列は長蛇になり最終的に乗れないずに帰る人も続出するほどらしい。

碓氷達は、手早く入場の手続きを済ませ一度円を描くように集まり作戦会議。

まずは、どれに行くかと話を持ちかけた瞬間、間髪入れずに逢瀬が手を挙げ大きな声で、

「プールが良いと思います!!」

と宣言した。開園してあまり時間は経ってはいないがやはり他のお客さんもいるので、逢瀬の大声に驚きこちらに注目してくる。今現在この施設の中心点は間違いなく注目度で言えば逢瀬であろう。そんな逢瀬に呆れながらも理由を聞いてみる。

「あのな……。何でプールなんだ？」

再び元氣よく手を上げて即答。

「ダーリンを水着で誘惑するためです!!」

「却下だ!!」

さっきの皆の注目を浴びた声よりもさらに大きい声で反応してやる。

「ええー! いいじゃんいいじゃん、プールだよ、水着だよ! 男の浪漫が詰まってるんだよ!!」

確かに、高校生のそれも同級生の水着を見る機会というのはまたとないチャンスではあるのだが、最近の逢瀬の求愛行動が過激になってきているのでこのままプールに行ってしまうえば貞操を取られ後戻り出来ない感じになるのではと頭の中の警報装置が鳴り響いたのだ。

なので、折角のそう折角の同級生女子の水着お披露目という高校生男児にとって夢のようなイベントを涙を吞んで我慢する。

だって、誘惑するって言った時の逢瀬の目が尋常じゃなかった、ここでトルといった野生動物のそれに似た眼をしていた……。

一つの危機を乗り越えた碓氷にそれでもしつこく迫る逢瀬、主に抱きしめようとするので頭に手を置いて力づくで押さえつける。

それでも逢瀬の行こうよコールは続くので、華麗に無視しながら最初にどこへ行くかを話合おうとして、他の二人に視線を向けると、天月が申し訳なさそうな顔で碓氷を見ていた。何なんだろうか?

「どうした? どっか行きたいとこ決まったのか?」

「いや、ああ、まあ。そうなんだけどな」

煮え切らない態度を取る天月。普段の彼ならばもっとハキハキと喋るかけてくるはずだし、そもそもこういったやりとりには率先して横槍を入れてくるはずだ、なのに今日会った時からそういった行動は何時よりも少ない。本当に何か合ったのだろうか。

美原をちらりと確認してみる、事情を知っているのだろうか。心なしか天月を心配そうに見つめている。

その美原の態度により一層心配になってしまう。天月は確氷にとって大切な親友であり、自分が求める日常を運んでくれる友達だ。だからこそ、確氷は何かあったのか尋ねようと声を出しかけたところで。

「悪い、確氷。後の先に来てる二人って今プールにいるんだ……」

「……………はあ？」

出しかけた声をすぐさま疑問に変換する。

先に入っている二人。確か、天月が誘ったした人たちで、これから合流するために捜そうとしていたところだ。さすがに先に来ていたからと無視して少し楽しんでから合流とは行かない、失礼すぎる。そして彼らに合流してから本格的に行くところを決める手筈だと思っていたのだが……。

まさか、その二人組みがすでにこのPNKOTURANDOをエンジンジョイしているとは……。さすがに待っていてくれる筈だが。これで最初に行くとところがプールに決定してしまったわけで、つまり……。

ふと、さっきから押さえつけていたはずの逢瀬の頭部から力が抜けた。確氷も恐る恐る顔を見る。

逢瀬は小悪魔を通り越した魔女の様な笑みを浮かべ、碓氷の瞳を覗き込んでくる。

正直に言おう、マジで怖い……。

「そうか、それは仕方ないね……」

笑みをより深くしながら、踵を返してプールのある広場へと先陣を切る形で向かう逢瀬に掛ける言葉が思いつかない。

そして、

「私の水着楽しみにしててね。マイ・ダー・リン」

完全にトラれると本能が囁いているのだが、体は逃げる事が出来ない。いや、今逃げたら後が本当に怖い……。逃げることも出来なくなり、ただ運命に身を任すしかない碓氷の肩にポンッと優しく手が置かれる。どこかぎこちなく振り向くと気の毒そうな眼をしている友人、天月。

後ろでは、美原が悲しいものを見るような視線を送りっている。そんな眼で見ないで欲しい……。

「その、ああ、なんだ。悪かったな、そして頑張れよ」

友人の心からの励ましの言葉。

「いやあああああつあああああああああ!!」

それに対して碓氷は絶叫マシンに乗ったかのような悲鳴で返答するしかなかった。

開園して間もないのに、プール広場の方はそれなりに人が入っている様子だった。入り口近辺から広場全体を見渡すと子供づれの家族やカップルなどが元気に水を掛け合って楽しそうにはしゃいでいる。

そんな、賑やかさと反対に着替えを早々に済ませ、とぼとぼとした足取りで碓氷は例の天月が呼んだ二人組みの搜索を一人で行っていた。

何故、一人なのかと説明を入れると。プール広場に向け誰よりも先に着こうと張り切っている逢瀬に付いて行き、ようやくプール広場のゲートを全員が目視した瞬間、今まで何も言わずに付いて来ていた美原が急に顔を真っ赤にしてうろたえ始めたのだ。

どうやら、天月を心配するあまりに、プール＋水着＋天月＝天月にプールで自分の水着を見せる。という方程式に気づき。近づくに連れてその表情は林檎のように真っ赤になっていき行動もしどろもどろから始まり、最終的にはどこから見ても挙動不審な怪しい少女になってしまっていた。

そして、いざ到着し恥ずかしさと緊張の頂点に來たのだろう。『私はここにいる』、『ここで待ってるから行ってきて』と早口で何度も捲くし立て、必死にプールに入るのを拒否し続ける体制を取ったのだ。

しかし、目標を目前として、既にテンションがマックスを通り越して別次元へと至っている逢瀬がそんな我が侘を許すはずもなく、強引に美原を女子更衣室へと引っ張って行った。

あれは、多分相当時間が掛かるであろう。

そして、一緒に男子更衣室へと向かっていた天月はというと、急

激な腹痛が来たとのことでダッシュでトイレまで着替えもせずに走っていた。

朝から、様子がおかしかったのも腹痛が酷かったせいかもしれないと碓氷は自己完結しトイレからメールで送ってきた二人組みの特徴を確認しながら搜索活動に精を出す。

メールには、

『一目見れば分かる』

としか書かれていないので中々に大変な作業になっていた。

「はぁ……」

この広場に來てから何度目かの溜息を漏らし、これからについて考える。とりあえずは合流して天月と女子陣を待つしかないのだが、問題はその女子陣にいる逢瀬だ。

最近の逢瀬は以前と比べて行動が大胆且つ過激になりつつある。なのでここでちゃんとした対策を建てなければ、高校に色んな意味で伝説を残した生徒の一人になってしまうかもしれない。さすがにそれだけは避けたい。いいアイデアはないものか、今日一日無事に生き残るための策はないのだろうか。

天を仰ぐように、空に何かひらめきの種はないか視線を上げると。

視線の先に、特徴的なシルクハットが目についた。

そのシルクハットが見えた辺りに目を固定して、よく観察するといつもと同じように波煉魅がブルーメラン型の水着を着て佇んでいた。

揺波を視認した碓氷はまず注目したのは、やはり着ているブルーメ

ラン型の水着だろう。普段こんなところに来るとは思えないし水着なんてものを着るなんて思わなかったので驚きはしたが、その風貌に似合わず体はしっかりと作られているのでそこまで違和感はない所謂細マッチョなのかもしれない、あえて違和感をあげるとするならシルクハットだけだろう。

「やっと見つけた……。天月も揺波着てるって言うてくれれば早く見つかったのに……」

今はいない友人に毒つきながら揺波の方へと近づいていく。そして、ふと気づく揺波が一人ではなく誰かと話しているところを、こちらからでは通行人の影で見えないが。

天月の言っていた二人目だろうか。揺波が普通に喋っているのでシグナルかもしれない。あいつは怪我とかあったとしてもこういうイベントには絶対に来てそうだし。

そう確信した碓氷は駆け足になりながらも二人のいる場所を目指す。

近づくに連れ二人目の姿がどんどんと確認できるようになっていき、とうとうその全貌を掴んだ時、碓氷は開いた口が塞がらなくな

った。
そこにいたのは、オールシーズン真っ黒に日焼けした肌をしていて、ゴリラのような太い腕を持ち、鍛えに鍛えぬいた筋肉を惜しげもなく晒し、ゴリラのように厳つい顔をしている我が高校の教師、べっぴんさん剛拿護先生……通称、ゴリ山が揺波と同じようにブーメラン型の水着を着てはちきれんばかりの筋肉を入念にストレッチしている姿だった。

(何で、ここにゴリ山いんのー!! あまーっつきーっ!!)

本日二度目になる絶叫を心の中にする確氷なのだった。

俺がしなければならぬ。

そう考えた天月響矢は一度入ったトイレから正規の入り口ではなく備え付けられている窓から脱出する。

目指す場所はここよりそう遠く離れてはいないPONKOTUR ANDOを取り囲む壁と従業員用の休憩室のある建物とで出来ている暗い路地。

そこには多数の猫がのんびりと日向ぼっこをしている光景が広がっている、よく見ると囲んでいる壁に小さな穴が出来ており、どうやらそこから猫達は侵入しているようだ。

視線を上によれば建物と壁の間から見える一筋の青空。今日は気持ちいいくらいに晴れてくれている。

建物の屋根には小さな小鳥が囀りあっている最中だった。

天月は辺りを隈なく見渡してから、路地に少し入り大きな一人事を呟き始める。

内容は、今日ここで何が行われるのか、その目的は何なのかとか、パンドラの箱とはいった、揺波に聞いたことや独自に収集した情報だ。

端から、この光景を見れば猫達に電波を話している危ない少年なのだが。天月は止まることなく話続ける、それが彼の出来る手なのだから。

時間はあまりないが噛まずに的確な事だけを虚空にいる誰かに伝えていく、焦りで少し舌を噛みそうになりながらも言葉を紡ぎ、最

後に、

「多分、ここに集まってくるやつらはシグナルが全滅させると思うんだ。だけど、あいつだって神ってわけじゃない、どこかで必ず綻びが出る。確かに、煉魅さんも強いし美原もいる何とかなるかもしれない。でも……もしかしたらって考えてしまうんだ」

何時もの彼らしくない弱気な表情を浮かべている。

「だから、俺が知る中で信頼できるあんた達に来てほしいんだ。確氷を皆をこのPONKOTURANDOに来てる人たちを救うために力を貸してくれ」

誰もいない虚空に向け頭を下げる。しばらくの後、頭を上げ振り向く。

「……俺が言いたいのはそのただけだ」

追加で今はプールにいることとこれから回るところはこれから自分が言った所を回るように確氷達を出来るだけ誘導する呟き、回らせる場所を言っただけその場を離れた。

後に残ったのは、日向ぼっこに興じている猫達と屋根にいて鳴いている鳥達のみ。

その内の、鳥が一匹飛び立った。

鳥はしばらく滞空し墨色の霧となって霧散した。

「だ、そうですよ?」

休日の学校の図書室は平日以上に静まり返っていた。

錠が掛かっているため日曜日でも登校してきている生徒では入れないのだが、静寂に包まれ古めかしい本の独特な匂いが漂う図書室に二人の少女がいる。

一人はこの図書室の都市伝説になってしまった眼鏡の少女、近衛この。

彼女は今しがた自分の能力で遣わされている使い魔的なものから得た情報を、もう一人の少女に伝えたところだ。

珍しい客人だ。彼女からこちらに出向いてくるとは予想外だった。なので、内心の動揺は何時もどおりの笑みでごまかし。さっきの聞かせた情報をどうするかを問うてみる。

もう一人の少女、麻野夕緋は何時もと変わらないクールな表情をそのままに座っていた椅子から立ち上がる。

それが彼女の答えだった。

本来彼女は碓氷達がPUNKOTURANDOに行くことをこの前会った時に聞いていたので、用事を済ませてから一人単身で乗り込もうとしていたのだ。

簡単な用事だ。あちらは思っていたよりも早く危機に陥りそうなのがするが、この用事は直ぐに終わる。いや、終わらせて見せる。

「……最後に聞きに来た。あなたはどちらに付くのかを」

たったそれだけ。一週間ほど前に聞いた同じ質問。YESかNOか……。今回はこれをはっきりさせるために来た。

パンドラの箱を少し開けた今、碓氷はもうすぐ完全に覚醒するだろう。その時になって中途半端な立ち位置にいる者が急に入り自分

の邪魔をさせないためだ。

状況はもうすでに、そこまで来ている。

だから、もしここで中途半端な立ち位置に居続けると答えたりあちら側に付くというのなら入院中のシグナルの用にするか、最悪殺すだけだ。

近衛このは強いが自分ほどではない、故に返答次第で叩き潰すのみ。

そんな思いが伝わったのだろうか。近衛は何時もの笑みを消し、真剣な表情で問いに答える。

「……………私はあなた側に付きますよ」

「……………っ!？」

まったく予想していなかった答えに体が固まる。

あの彼女が、何時も傍観者や中立といった中途半端に居続けていた彼女が遂に動いたのだ。驚かないでどうするか。引きこもりのようにここで本を読み漁っていた彼女とは思えなかった。

「……………本当なの？」

「ええ、信じてもらって結構ですよ」

「……………何で？」

「あちらに付いたとしても、パンドラについてちゃんとした答えが得られるとは思えなかったからです」

「……………さっきの情報にあった、パンドラは私も知らないものだった」

「そうですか。ですが、それでも私はあなたが一番真実に近いものだと考えています」

「……目的は？」

「あなたの知っているとおりですよ。……それに一泡吹かせたい人もいるので……」

怒涛の質問攻めに嫌な顔をせず、全て答える。最後の方は小さく聞き取りにくかったが、とりあえずは彼女を信じてみようと思う。

裏切る可能性もあるが……。今はそれを頭に置いておく事にする。用事は済んだ、結果は一人だが協力者を得るという上々なものだろう。

後は、一緒にPONKOTURANDOに行き碓氷達を見つけ、ピンチならば駆けつけるだけだ。

膳は急げと思い、夕緋は図書室の扉を目指して掛け始める。が、後ろに違和感を感じ振り向くと、未だに図書室の窓際に寄りかかっている近衛がいた。

「プー……水着……PONKOTU……」

気味の悪い独り言を片手を顎に付けて唱えている。言葉の端々から不穏なものが聞こえるが早く行きたい夕緋は苛立ちを隠しもせず告げる。

「……何、一人でぶつくさ言ってるの？ 早くしないと夕夜が危ない目にあってるかもしれない。ここで立ち止まってる暇はないの」

辛らつな言葉を受けた近衛は一旦夕緋をじろじろと足元から頭まで眺めて、勢い良く窓際から離れる。

その勢いに少しは驚いたものの、これで助けに行けると安堵する夕緋。

近衛は直ぐに夕緋の元に近づき、両肩を思いっきりその両手で掴み。

「水着を買いに行きましょう!!」

普段の彼女からは想像もつかない台詞だった。

「……はあ？」

急いで駆けつけたいのに、何故水着を買いに行くのだろうという当然の疑問にいたるのだが、最初に出たのは間拔けな声にすらなっていないものだった。

「だから、水着ですよ! 碓氷くん達はプールに居る。ということはこちらで水着姿を見せてあなたの虜にしてあげるんですよ!」

「……と、虜」

顔を真っ赤にして反応する夕緋を楽しそうな笑顔で見つめさらに続ける近衛。

「そうです、ここいらで碓氷くんをあなたの者にするんですよ。こんなチャンスめったにないはずですよ! ああ、水着なら任せてください。私ここでファッション雑誌とか偶に読んで勉強は充分なんです!!」

そのまま、返答をされるより早く夕緋の手を取り図書室のドアを勢い良く開けて夕緋を引っ張る形で近衛は走り始める。

目指すは、PUNKOTURANDO近くにあるデパート。

「ああ、シヨツピングなんて久しぶり」

「……え、え？ ええええええええええ！ 」

どこまでも楽しそうな近衛と対照的にどこまでも困惑顔な夕緋の二人の都市伝説は日曜日で学校に来ている人が極端に少なくなった学校を疾駆していくのだった。

深淵の間際にて 2 (前書き)

今回は魄さんの番です。

深淵の間際にて 2

近衛と夕緋は、駅近くにあるデパートに来ていた。

流石に夏真っ盛りと言うだけあって、普段は婦人物やら子供服が多く並んでいるフロアもこの季節だけは『水着セール!』なるものを設置して、フロアの一角を水着売り場になっている。

夕緋は、何故今自分がこの場所に居て、一刻を争うかもしれない自体の最中、近衛と一緒に水着を買いに来ているのかまだ理解が出来ていなかった。

「……まだ決まらないの?」

「もうちょっと待ってくださいよ! 水着は言ってしまったえば『勝負服』ですよ!?! 慎重に選ばなくてどうするんですか!?!」

そう言って、近衛は夕緋の手にある1着の水着をにらみつけた。夕緋の手にあるのは、ごくごく一般的な黄色いワンピースだった。

「それはちゃんと試着したんですか?」

「……してない。水着なんて着てしまえばどれも変わり無い」

「だ・か・ら、碓氷君の心がつかめないんですよっ!?!」

物凄い形相で近衛に迫られた夕緋は、手に持っていた黄色いワンピースの水着を渋々元在った場所に戻し、さっきまでよりかは真面目な表情で選び始める。

その姿に関心したのか、近衛はまた自分の水着選びに戻った。

「あ! 夕緋ちゃん? これなんて似合うんじゃないでしょうか?」

そう言って近衛が夕緋に見せた水着を見て、夕緋の顔は完熟トマトのように紅くなり始める。

その様子を見て、ニヤニヤしつつ近衛は容赦なく追い討ちをかける。

「このぐらいしないと、碓氷君振り向いてくれませんか？」

近衛の手にあるのは、ツーピースの水着。もっと細かく、尚且つ単純に言うのであればビキニ。ただし、一つだけ普通のビキニと違うところがあった。

「……そ、そんな布地の少ない物、き……着れるわけな」

「ええ、碓氷君の気を引かなくていいんですかあ？」

「……それでもきr」

「もう。自分以上の実力者の前に颯爽と現れたり、度胸があるように見せかけて……夕緋ちゃん、意外と度胸無いよね……」

「……な、なんと言われようとそんなのは絶対に着ない！」

夕緋は近衛が持っているビキニ——通称マイクロビキニ——を奪い取ると、在ったと思われる場所に戻し、自分が見つけていた水着を近衛に見せる。

「……私は、これでいいの」

「おお……さっきのビキニは冗談だったとしても、なかなか可愛らしいのを選びましたね」

「……さあ、水着を早く選んで。こうしている間に夕夜達の方に何かあったら……」

「大丈夫ですよ。そんなに急がなくてもあのシグナルさんと、夕緋ちゃんを負かすほどの実力者、私は会った事無いけど揺波という人がいれば、全然大丈夫です」

「……それでも、早く行く事に越した事はない」

そう言って夕緋は、一人レジへと向かった。

「全く、せっかちな人ですね……」

それにくよくよにして、“ 始めから決めてあった ” 水着を手に取り、近衛もレジへと向かう。

一方、PONKOTUランドの方では、全員がプールサイドに集まっていた。

（……天月！ 揺波はともかく、なんであのゴリ山がいるんだよ！？）

（え？ だってその方が面白いだろ？ お前が）

（……お前、後で覚えてろよ？）

（分かったって。実際のところ、俺も委員長も親に、『大人が最低でも2人以上つかない限りは、行かせない！』って言い張るものだから……）

（ちよ！？ 小学生じゃないんだからどんだけ厳しいんだよ！！）

（ああ、ゴメン。今の嘘）

（はあ！？）

「なにをコソコソ話してるんだ？ いいか、碓氷。学生たるもの平日だろうが、休日だろうが学生らしく生活せんといかん。なのに最近のお前と言ったら、街の不良か？ 大怪我をして学校に着たりと……」

「あぁっと、他校の生徒に絡まれちゃって……。こっちが手を出した訳じゃないんですけど、向こうが中々どいてくれなくて……」

「全く。常日頃の行いが悪いからそんな事が起こるんだ。だから、

今日はお前たちの保護者として参加させてもらう。……しかし碓氷、お前の知り合いにこんな良い人がいたなんて先生ちよつと感動だぞ」
「いやいや、先生。良い人だなんて。俺はたまたま夕夜君と知り合っただけですしね」

そう言つて、太マッチョと細マッチョが肩を組む。その様子を俺達はただ呆然と眺めることしか出来なかった。

「まあ、ああは言ったものの、お前たちだってそう心配される歳ではないからな。そうだな……あの時計で午後11時半辺りにこの場所集合でいいだろう。それまで自由解散で」

ゴリ山こと剛拿がポールに取り付けられている大きな時計を指差して言った。その言葉と共に、碓氷は逢瀬と、天月は美原と、ゴリ山は揺波と共にそれぞれ散らばって言った。

「ねえねえ！　ダーリン。まずどこから行く？　あそこ？　それともこっち？　それともあ・た……」

「そうだな、とりあえずこれから入るか」

碓氷は逢瀬の言葉を半ば無視しつつ、もう己が置かれた状態に諦めつつも目の前に聳え立つウォータースライダーを指差した。

PONKOTUランドのレジャープール施設が誇る、最も人気がある施設だ。

高さ180メートル、横幅150メートル、奥行き100メートルの大きさで、ウォータースライダーに入ったら約1分間あのキューブの中を物凄い速さでかけ巡る事になる。もはやそんな所そこのジェットコースターよりもスリリングだと好評のある施設だ。

「あそこね……」

そう逢瀬が口にした瞬間、何故か確氷は背筋に冷たい感覚が走った為に、きよろきよろと別の施設を慌てて探す。

（や……やべえ。確かあれ、乗ったら最後、出て来るときには若干平衡感覚を失うと共に半ば意識が飛ぶんだった！ 絶対にそこを狙われる！！）

「フフフ……ダーリン！ 早く行きましょ！ じゃないと込み始めちゃうよ」

確氷がその事に気がつくよりも早く、逢瀬は確氷の手を引き、確氷にとって魔のウォータースライダーに向かっていくのであった。

確氷と逢瀬のやり取りを遠目で確認しつつ、天月と美原は売店近くのベンチに腰を下ろしていた。

「委員長……ちょっと話しておきたい事があるんだ」

「え……な、なに？」

天月のその言葉に、若干顔を紅くさせた美原だったが、天月の真剣な表情を見て何の事か悟る。

「……確氷君の事ね」

「ああ。正直言って、俺はまだ自分がどうすればいいのか分からない。だってそうだろう？ 会って間もない揺波さんにあんな話をされて、それをほいほいと信じるほど俺は馬鹿じゃない。……だが、最近のあいつを見ていると本当なんじゃないかと思えて来る」

「怪我……とか、最近酷いもんね。確氷君」

「あいつが俺たちの“日常”を守ろうとしてくれているんだ。だったら俺達は“あいつ”を守ってやらなきゃいけないと思う。……そ

れが小中高と一緒にだった俺の素直な気持ちだ」

「……そう」

その天月の言葉は、どこか寂しげで、そして決意に満ちていた。美原は、ただ聞いてあげることしか出来ない自分を無力と感じ、下を向く。

「だから、委員長。俺……言ってくるよ。流石に今直ぐにとは言えないけど、この“最後の日常”を愉しんだらさ。揺波さんの所に」

「……今の私が何を言っても無駄……なのね」

「ハハ、知っているだろ？ 俺の頑固さをさ。……よしっ！ 委員長に話したらふっきれた！ 俺たちも遊ぼうぜ」

そう言って立ち上がり、美原に手を差し伸べる。その手を、美原は微笑みながらとる。

「委員長。先にあれから行こうぜ。……ん？ どうした委員長」

「えっ、あっ……その……なんでもない」

天月の手を受け取ったはいいものの、顔を真赤にさせて俯きながら天月に手を引かれ歩いていく美原だった……。

「……さて、剛拿さん。私たちはどうします？」

そう聴く揺波には、有無を言わずその場にいさせようとする威圧感が放たれていた。

それに気がつく事も無く、ゴリ山……事剛拿護は返事をする。

「私ら2人が一緒になってプールで泳ぐってのもいいですが……ここは一つ、普段確氷がどんな風なのか気にもなりますしな。男2人で話でもしましょうか」

「そうしましょうかね。……っと、その前にお手洗い、いいですか？」

「ああ、どうぞどうぞ。私はあちらで涼んでますので」

剛拿はそう言って天月達がいた場所とは違う売店近くのベンチを指差した。

「では……」

そう言って、揺波は剛拿に背を向け歩き出す。紅いシルクハットを深く被りなおして。

「……さて、入ってきた雑草はシグナルに任せるとして、俺は自分の“役目”を終わらせる下準備を完了させようか」

そう言って揺波は、売店近くのベンチで座っていた天月と美原に向かい歩き始める。

ちようど、天月と美原は話し終え、今から遊びに行くようだったので、遠慮なく声を掛ける。

「お二人さん。ちょっと話いいか」

「え？ ……っと、揺波さんか」

急に背後から声を掛けられたからか、驚いて振り向いた天月の目の前には紅いシルクハットが一つ。美原は顔を真赤にさせつつも、その紅いシルクハットを少し睨みつける。

「天月君。急にで悪いんだが、あれから2日経った。そろそろ返事が聞きたいんだが……」

「えっと、それって今じゃなきゃいけないんですか？」

「ああ、君にとってはそこまで重要なことじゃなくても、俺にとっては物凄く重要なことだ」

「……分かりました。じゃあ、そのベンチで話しましょうか」

今まで自分達が座っていたベンチを天月は指し、そこへ3人は向かって歩いた。

「さて、結論はもう出ているんだろう？」

「……一応、ですが」

「よし、じゃあどうするか聞かせてもらおうか」

ベンチに座った3人は、プールサイドにいる人としては似つかわしくない雰囲気ではじめめる。

「俺……揺波さんについていこうと思います」

「……つまり、俺の“後継者”になるって事でいいか？」

「ハイ」

「？ 天月君、後継者って……そんな事聞いて無いんだけど」

「なんだ、言って無かったのか」

「ええ、だってこればかりは自分で決めることですから……」

「まあ、ここに居る以上、教えておいてやるか。俺はある“役目”を受けていてな、だが、今日辺りでその役目が終わる。だから、俺は次の人を探して、跡を継がせなくてはいけないんだ」

「……役目って？」

「パンドラの箱所有者の監視、及び危険の排除と、パンドラ解放の手助け」

「……つまり、貴方は自分がその役目が嫌だから天月君に押し付け

ようとしているのね？」

「いいや、違う。言っただろう？ 俺の役目が終わると。つまり、今日、この場所で、パンドラの箱は解放する」

「え……」

「忘れたか？ ここのチケットそのものは“シグナルから渡された”物だ。ある程度広く、そして街の中心部からは程よく遠くて、尚且つ上空から監視し易い場所だったら、パンドラの箱を解放ために色々と便利だからな」

「パンドラの箱……が今日解放するなんて聞いてないぞ！？」

「ああ、今初めて言ったからな。……で、それがお前の決断に何の影響がある？」

「いや、俺が今日までに決めていなかったら、揺波さん、あんたどうする気だったんだ！？」

「……愚問だな。俺の能力を忘れたか？ 継がないと言うようだったら強制的に継がせただけの話だ。別に変わりはないだろう？」

「……っ！ そうまでして天月君に貴方の後継者になってほしいの！？」

「ああ、俺の後継者はお前しか居ない。ま、俺も半ば強制的に継がされた身だから、言いたい気持ちも分かるがな」

「だったらなんで……っ？」

「パンドラを消滅させるため」

「え？」

「どうした、今の発言がそんなに不思議だったか？」

「だって……貴方はさっき『パンドラの箱を解放する』って言ったから……」

「解放したらその能力がずっと残るとは限らないだろ？ まあ、元から教える気で居たから教えてやるよ。“パンドラの箱の真実”の全貌をっ！」

そう言って、揺波は上を向いた。

「パンドラの箱は、元は人間に神々から盗んだ火の扱い方を教えたプロメーテウスに対し、神ゼウスが人類に災いをもたらす“女性”を作るよう命じた事が事の発端というのは知っているな？」

「ああ……」

「それぐらいなら、聞いた事あるわ」

「そうして泥から生み出された一人の女性は、神々から様々な“贈り物”を入れた箱――パンドラー――を持たされ、人間界に送られた。もちろん、その箱と言うのが“パンドラの箱”だ。神々は自分たちから火を盗み出すような狡猾なプロメーテウスに対してでは無く、彼のその弟、つまりエピメーテウスの元に……な。もちろんの事ながら、プロメーテウスは神々からの贈り物は受け取るなど言う忠告こそすれど、エピメーテウスは欲望に負け開けてしまった」

「そうしてパンドラの箱の災厄が起こった……」

「……と、伝えられてきていた」

「違う……のか？」

「ああ、今までパンドラの災厄と呼ばれてきた物は、疫病、悲嘆、欠乏、犯罪などがばら撒かれたとされるが、その中に今の“都市伝説”の元となるものもばら撒かれていた」

「都市伝説の……元？」

「パンドラの箱が開く遙か昔から、異能力者自信が認識こそしてないにしろ、異能力者自体は居た。それが、パンドラの災厄によってばら撒かれた都市伝説の元により、より凶暴化して世界に広まった……有名どころで言えば、『吸血鬼』『人斬り』『狼男』……これら全て、都市伝説化した能力者の成れの果てだ」

「……ちょ、ちょっと待ってくれ。俺が確氷から軽く聞いた話だと、都市伝説って“噂”によって作られるんじゃないのか？」

「それもあながち間違っていない。彼らの力の根源は、噂。まあ要するに知名度だ。だから世界に名を轟かせた『吸血鬼』やら『狼男』なんていうのは、存在した当時、絶大なる力を持っていた。だ

が、何故噂によって力が大きくなるのかは分からないが、神々が起こした災厄だ。人々を恐怖のどん底に付き落す為に、そして都市伝説となった異能力者たちにとって、自身に課せられた“都市伝説としての制約”から逃れる程の力を付けさせる為に力の基準を噂にし、わざわざ噂を広めさせるようにしたんじゃないかと予想されている」

「都市伝説の……制約って」

「場合によっては時間、空間等に制約を掛けられる。分かり易い例で言えば、シグナルが典型的な制約を受けているだろう。アイツはこの街の中に存在する限り、最強だ。そして、アイツは自分の力を守る為に、この街に力を要れ、今じゃ知らない人が居ない程まで知名度を上げた」

「逆に制約によって噂が広まり辛い場合は……」

「ごくごく一般人レベルの事しか出来なくなるな。最終的には能力の損失。能力が無くなるという事は、都市伝説としての制約だけが残ри、そしてその制約は神の制約だ。体が耐え切れなくなり体ごと消滅するだろうな」

そういった揺波の目は、どこか悲しげで、一瞬美原と天月は言葉を失う。

だが、二人にはまだ一つ疑問が残っていた。

「都市伝説の制約は……まあ、置いといて、パンドラの災厄ってそれだけじゃないのか？」

「ああ、実際にはまだ続いているぞ。そうだな……俺たち“パンドラの監視者”は、そのエピソードが開けてしまったパンドラの箱最後の希望となる人々なんぞでな」

「どう……いう事なの？」

「“本当の”パンドラの災厄を唯一止める事が出来る人間……とでも言えればいいだろうか」

「じゃあ、俺が後継者になったら、その役目も俺が……」

「いや、その役目は俺の代で終わりだ。お前には災厄が止まった後のパンドラの経過観測を頼みたい」

「……役目が終わった揺波さんは」

「……」

無言……。これ以上答える必要が無いと言わんばかりに、揺波は口を閉ざし、その様子を見て天月と美原は理解する。

死

完全に理解する事は出来ないと理解しつつ、パンドラ……神々からの災厄を一人で止めるには、死よりも重い何かが待っていることだけは二人に理解する事ができた。

「……ハハッ、先代は嘘か真か……パンドラの箱の第一段階が開いた時から存在していたらしい。だから詳しく教えてくれた。お前たちの察した通りだ」

「パンドラが開いた時から？」

「ああ、そうだな……隣街にバグキャラこと“特Sランク”の能力者が居るんだが、俺の先代は強いて言うなら“チートキャラ”の特Sランク。まあ、あそこまでの強さのだったら、もはや何でもありだからな。何百年、何千年、何万年生きてきたと言われても、もはや驚くことじゃない」

「せ……世界には色んな奴が居るんだな」

「……さて、話を戻すぞ。今日碓氷のパンドラの箱解放については分かったか？俺はこの重役を俺で終わりにしたい。そのために時期と場所を決め解放する。……だが、世の中にはそれを好ましく思わない輩が居る」

「……どういう事だ？」

「確氷……つまりパンドラの箱は言ってしまうと武力だ。解放されて何が起るかわからないし、災厄後その能力を確氷自信が扱いきれるかもわからない。……だが、国を、世界を強制的に動かす事が容易なぐらいの力である事には代わり無い」

「つまり、解放前の確氷を搔つ攫って悪事を働こうとか。解放した後でも、揺波さんが災厄を止めた後の確氷を連れ去れば、そのまま国家間に武力介入できるって事か」

「ああ。だから今この場所に異能力者たちが集まってきたいる」

そう言って、揺波は遠い目をする。天月と美原は、揺波が見ている方に顔を向け、直視できないまでも何が起っているのかを確認する。

人が……飛ぶ。紙束を宙に放るかのごとく、大勢の人間が宙を舞っていた。

「さて、俺からの話は以上だ。……俺もそろそろ民間人の誘導ついでに加勢に行くかな。……ああ、言い忘れてたが、今回の解放は、“とある人物”を誘い出す為でもある。ま、その時に俺がいるかは分からないがな」

紅いシルクハットを深く被りなおした揺波は、ゆっくりと歩き出した。……そして、彼の能力を使ったのだろうか、天月と美原の二人が気がついたときには、もう揺波の姿はどこにも無かった。

深淵の間際にて 3 (前書き)

今回は義人さんと水無雲夜斗を少し混ぜた回です。
都合によりかなり半端なところで途切れています。

深淵の間際にて 3

『此方デルタチーム、コースターエリア、異常無し』

「アルファ1、了解☆」

『此方ベータ2、3。敵影補足。迎撃行動中。応援求む』

「それじゃあ、デルタ8からデルタ12まで増援に向かって♪」

『デルタ1、了解。ただちに向かわせます』

既に多種多様な敵の襲撃は始まっていた。

此処は園内のモニタールーム。俺はペンダントを片手で弄びながら周囲に展開させたバウンサーや不本意ながら雇い入れた信用はできず外部の人間に指示を飛ばしている。

現状、俺が出る程の問題は出ていない。いや、正確に言うならば、まだ俺は戦線に加わる訳にはいかない。

表向きは入院中、という事になっているという理由もあるが、そこはフェイクだと言う事は多少頭が回る奴ならすぐにわかる事だ。

重要なのは『いつどこからシグナルが出て来るかわからない』状況にしておく事だ。それにパンドラの箱の解放の前だ。力は可能な限り温存しておきたい。

『――此方エンペラー……つか、なんで俺がお前の指示を受けなきゃならねえんだ？』

外部から雇った能力者からの通信だ。此方も不本意だが、向こうも上から言われて仕方なくと言った体だ。

「まあそう言わないでよ☆一応雇われの身なんだからこっちの指示には従ってね♪因みにそっちの状況は？」

『――とりあえず団体様12ダースくらい適当に場外にご案内差し上げた所だ、オーナー』

「流石だね☆そこ一番忙しい区画だけどその調子でよろしく♪」

『――……金は弾めよ、クソ野郎』

「はいはい☆」

通信を切る。やはり現状だと外部から集めた雇われ兵の活躍が大きい。バウンサーにもそこそこ強力な能力者が居るが……流石に2年程では規模は拡大出来ても兵の質まではどうにもならない。こういう時、外部の能力者に頼らざるを得ないのは歯痒い。

「今日で揺波君もおさらばらしいし……戦力増強に力入れないとなあ。ああ、場合によっては碓氷君も消えちゃうのか☆」

おどけた調子で言葉を漏らす。

二人共、失うには惜しい人材だ。

「……まあ、個人的にも……かな？」

なんて……と自嘲しつつ、俺は一枚の古紙を取り出す。

古文書と言ったものだが、そこには『パンドラの箱』についての真実が綴られていた。

ここに記されている事が真実であるならば、今日『パンドラの箱』が開く事によって世界は大きな変化を促されるはずだ。

俺は誰も居ないモニタールームで虚空へと語る。

「クハハ……今宵の饗宴で世界は選択を迫られる。箱の中身は希望か絶望か……開くかどうかは彼ら次第ってね☆」

俺はモニターの端を見る。何かがおかしい、微かな違和感。

「パンドラの箱自体に開く力はないんだ。彼は”開かれる”だけ☆」
モニター越しの視線の先。女の子と戯れる一人の少年の姿。

「パンドラの箱には鍵が掛かっていましたとさ♪」

ベンチで三人、密談を交わしている。

「それを開く為には」

持参のモニターに映る二人の少女の姿。

「『パンドラの鍵』が必要なんだ♪」

俺は立ち上がり、モニタールームを後にする。

「さて、誰が持ってるのかな？」

能力を抑制する効果のある特殊なアクセサリーを引き千切るように取り外す。

「悪いけど、シナリオライターは俺だから……」

何かが計画の邪魔をしている。それは誰も幸福にならない未来だ。
「ハッピーエンドしか認めないよ☆」
邪魔者を狩りに危険信号＜シグナル＞を鳴り響かせに――。

――出たい――

――出たいよ――

――外に出たいよ――

――出して！――

――外に出してよ！――

――お母さん！――

「ダーリン？」

ハッとなって目が覚める。するとすぐ目の前に逢瀬の顔があり、
思わず顔が紅潮する。

「うわっ！？ 近いよ、お前！」

「だって、ダーリン魘されてたから……」

と、渋々といった様子で俺から離れる逢瀬。

俺と逢瀬はウォータースライダーから少し離れた場所にあるベン
チの所に居た。

そうだ、俺は命からがら絶叫マシンよろしく、恐怖のウォーター

スライダーから生還を果たし、ここで少し休憩していたのだ。その後、逢瀬が飲み物を買ってくると言って少し場を離れてる間に、どうやら俺は眠りに落ちていたようだ。

「それにしてもダーリン、彼女がジュース買いに言ってる間に眠っちゃうなんて酷いよ!」

と、軽く頬を膨らます逢瀬。

「彼女じゃねえ! だけど、確かに悪かったな、すまん」

「キスしてくれたら許す」

「それは無理」

そんなあゝ、つと目に見えて落胆する逢瀬。

逢瀬はいつも通り軽くスルーしておくとして……さっきの夢はなんだったんだろう……?

何か懐かしいような。つい最近聞いたような——夢にしては妙にリアルな感覚があった。それなのに妙にフワフワした感覚がする。

一言、『夢』で片付けるのは妙に引かかる。そんな夢だった。

「ダーリン、聞ってる!」

「うおっ!? すまん、聞いてなかった」

逢瀬の声で、考えが吹っ飛ぶ。

「もう! ダーリンはいつもそんな感じだよね! そんなんじゃ私の心もその内離れちゃうよ!」

「あ、ああ悪い悪い」

普段鬱陶しいくらいだが、そう言われるとそれはそれで寂しい気持ちになるな。と、そんな事を一瞬考えてしまった、後悔する。逢瀬の方を振り向くと見事までににやけていた。

「ダーリン、今、それはそれで寂しいと思ったでしょ? 大丈夫だよ、ダーリン! 私はいつまでだってダーリンが大好きだから!」

と、逢瀬が抱き着こうとしてくるから頭に手を置いてなんとか防ぐ。

逢瀬はこういう人からのちよつとした好意に妙に機敏なのだ。一瞬でも隙を見せると……喰われる……!

と、俺と逢瀬が妙な格闘をしていると、前方から聞き覚えのある声が聞こえた。

「あれえ？　もしかしてそこに居るのは碓氷君じゃないですかあ？　奇遇ですねえ」

そこに居たのは、図書室で出会った近衛さんと……

「ゆ、夕緋……？」

妙に不機嫌そうな顔をした夕緋が居た。

「……公共の場で仲睦まじい様子を披露するのは、正直関心しない」

「いやいちゃついてないから！？」

言うと同時に碓氷は逢瀬の頭に置いていた手の力を緩めて、そのまま力まかせにこちらへと迫ってきた逢瀬に一発デコピンをかます。

「いたっ！」と可愛らしく声を漏らす逢瀬。どうやら彼女の攻撃はこれにて終わらしい。

ふう、と一つため息をつき、碓氷はふと気になって顔を上げる。

碓氷の視線の先にいたのは一人の少女。もちろんプール内なので水着なのは当たり前なのだが、彼女の場合はいろいろと格が違う。

彼女の水着はいわゆるビキニだ。それ以外の特徴などないと言っても過言ではないだろう。だが、そんなビキニでも彼女が着用すると格が違って見えてしまう。その理由が、彼女の上半身にある大きな二つの膨らみ。豊満に実ったそれは、道行く男子の視線を一点へと集中させてしまうような何かが放出されているような気さえしてくるほどのものだ。

夕緋は論外として、逢瀬のものも平均的な大きさでなかなかだが、それと比べても彼女のものは大きいと言えるほどのものと言えるだろう。

そんなデカパイ少女と碓氷の視線がふと重なる。

「で、どちらさま？」

少しぶっきらぼうに質問する碓氷。

ここ最近異常な現象相手に事を構えることが多いせいか、どうやら初対面の人間を警戒する癖がついてしまっているらしい。

さらに相手はあの異常そのものである少女と共に現れた。その点からこの事件に少なからず関わっていると考えるのは間違いではないだろう。

しかし、それでもやはり失礼だったかな？ と碓氷が考えていると、

「ひ、ひどい！ あの放課後での出来事をもう忘れてしまったっというんですか碓氷くん！？」

と、驚愕に肩を震わせる少女。

「放課後：？」と碓氷が呟きながら考えていると、彼女は続けて、「ほら、あの放課後ですよ！ 夕日が綺麗に街を照らしている中、図書室でロマンチックな時間を過ごしたじゃないですか！ あの出来事を忘れるなんて：ひどいです！」

その言葉を聞いて、ピクリと肩を震わせたのは逢瀬と夕緋だ。

彼女達は「夕日？ ロマンチック：？」と呟きながら必死に何かを思い出そうとしている碓氷をロックオンすると、

「……それは、どういうことなのか説明してほしい」

「ことと次第によっちゃあ、いくらダーリンでも許すわけにはいかないかなあ」

「待て、お前ら何でそんな殺気立ってるんだ？ というかそこ！ 泣いたフリして内心この状況楽しんでるだろ！！」

深淵の間際にて 4 (前書き)

今回は先週の続きで水無雲夜斗こと僕の番です。

深淵の間際にて 4

そして五分後、

「単刀直入に聞くが、お前もやっぱ”都市伝説”みたいな異常な存在だったりするの？」

なんとかカオスな状況を納めることに成功した碓氷は、率直な質問を謎の巨乳少女へとぶつけることにした。

もし彼女が全く関係のない人間だった場合はいろいろ大変なことになるリスクはあったが、碓氷はなんとなく確信していた。

確実に彼女は異常な存在である。仮に”都市伝説”じゃなかったとしても、シグナルの言っていた『超能力者』や、あるいはそれらに加担している人間であるはずだ。

「はい、そうですね」

案の定、というべきか。彼女はあっさりとそれを肯定した。

「私は『近衛この』。お察しの通り夕緋ちゃんと同じ”都市伝説”です」

「…案外あっさりしてんのな」

「まあ、隠したところで何の利益もありませんからね」

近衛の言葉を聞いて、碓氷は彼女に気づかれないように身構える。もし彼女が敵だった場合、狙いは『パンドラ』のはずだ。ならばいつ彼女が攻撃を仕掛けてきてもおかしくはない。

『パンドラの箱』というものが何なのか碓氷にはまだよくわかっていないが、どう考えてもろくなものじゃない。ならば奪われない

ように対策しておくのは至極当然なことと言える。

しかし、ここ最近経験してきた通り、”都市伝説”やそれに匹敵する力を持つ連中はどう考えても普通じゃない。今ここで襲われたとして、果たして『パンドラ』を守り切ることができるのか。そして、彼女はどのような能力を使役し、どのように『パンドラの箱』を奪うのか。

碓氷の中で一気に緊張感が高まる。

状況が不利すぎる。

(どうする…?)

いっそこちから仕掛けるか、と考えたその時だった。

「……念のために言っておくと、こいつは今のところ敵じゃない。確証はないけど味方と思ってても構わないと思う」

まだ先程のことを根に持っているのか、少しむすっとしている夕緋が会話に参加してきた。

ちなみに彼女はヘソ丸出しのセパレート水着を着用していて、現在プールサイドに腰掛けて足だけを水につけている状態だ。

せっかくプールに来たんだから泳げばいいのに、と碓氷は内心そんなことを思うが、同時にこんな状況だと仕方ないか、とも思っていたので何も言うことはできなかった。

対し、三角ビキニ着用の逢瀬はのんきにプールに浸かって遊んでいたが。

とりあえずそのことは放置して碓氷は話を進める。

「そうなのか？」

「……確証はない。だから警戒しておくに越したことはないと思う」

「あら、私って信用されてないんですね。こう見えてもあまり嘘はつかない類の人種だと思うのですが」

「……そもそも、お前は人じゃない」

見事なまでの”都市伝説”漫才。案外二人は気が合っているのかもしれない。

ともあれ、彼女はある程度信用に足る人物ではあるらしい。だが、夕緋の言う通り警戒しておくに越したことはないだろう。もっとも、同じ”都市伝説”である夕緋の言葉もあまり信用できるものではないが。

今はすべてにおいて警戒しておくべきだろう。たとえあの時、あの公園で確氷を助けようとした夕緋といえど、『パンドラの箱』を狙う”都市伝説”の連中と同類であることには変わりない。

守るべきは日常。それを崩すものはすべて敵だ。

「まあ、とりあえず味方と思っておくよ」

「確氷くんまで！？ ひどい、ひどいです！ 私はこんなにも確

氷くんのことを慕っているのに……！！」

ううつ、と両手で顔を覆いながら言う近衛。

対し、それが嘘泣きだとわかつている確氷は呆れたような表情で、

「なあ、こいつ何を企んでるんだ？ やっぱ慕ってるとかそれっ

ばい言葉並べて『パンドラ』狙ってるんじゃないの？」

「……その可能性は否定できない。やっぱり今ここで始末しておいていい？」

「んー、心痛むけど頼む。殺すのはナシの方向でな」

「……わかった」

「ちよつとそこ、普通に不吉な会話をこういう場所で繰り広げるのはやめてください。あと、そんなこと企んでませんから！」

まったくもう、と呟きつつ夕緋が足をつけているプールとは違う流れるプールの方向へと歩き出す近衛。どうやら気分転換に泳ぐつもりらしい。

しかし、彼女が大理石の床を一步、また一步と進むたびに上下に揺れるソレは・・・やはり、いろいろと格が違う。碓氷の周りにいる紳士諸君も同じことを思っているらしく、女連れのリア充ですら目を奪われてしまっているほどのボリュームだ。

「（やっぱでかすぎだよな、あれ…）」

「（……くやしいけど、認めざるを得ない）」

近衛に聞こえないような声量で言葉を交わす二人。

当の本人は存在だけでなく自分の胸が異常なものであると気づいているのかいないのか、悠然とした態度で歩いている。

ある意味、常識離れた存在だ。

「まあ、あれはいいとして。そういえばお前達は何でここにいるんだ？」

「……、」

その質問に夕緋は答えない。

当然だろう。前に話した“あの話”が真実だとしたら答えるのもつらいはずだ。

「やっぱ、『パンドラの箱』か？」

しかし、碓氷はあえてその核心に触れる。

決して彼女を氣遣っていなかったわけではない。むしろ氣遣ったからこそ、彼はあえて言葉を放ったのだ。

『パンドラの箱』。それについての知識は前に夕緋に教えてもらっているの、まだ不完全とはいえ確氷の頭の中に入っている。それを一言で表すなら『災厄』。まさに神話通りの事実すぎて未だに信じるのができないほどのものだ。

「……あの話、まだ信じられない？」

「まあ、正直言わせてもらおうと半信半疑だな」

それを聞いて、少女はゆっくりと俯く。

別に半分信じてもらえていないことが残念だったわけではない。むしろ、あの真実を半分信じていることが逆にシヨックなのだ。

あの真実。つまり、

「『パンドラ』が世界中の異能を管理、制御しているって話、そう簡単に信じられると思うか？」

「……っ!!」

夕緋の肩が小さく震える。

だが、確氷は構わず続ける。

「もちろん、ただの物が何かの制御なんてできるわけがない。だから『パンドラ』の所有者である俺が無意識の内に異能を管理・制御し、人の言葉に力を与えて異能を生み出してるって話なんて信じられると思うか？」

「……やめて」

「そのせいで望んでもいないのに不思議な力を手に入れたお前達が、時には人間の恐怖の対象として恐れられ、時には醜い存在だと嘲られているなんて話——」

「……やめてっ!!」

ピタリ、と。一瞬時間が止まった。

原因は耳を押さえて悲痛に叫んだ夕緋の存在。それほどまでに大きな声ではなかったので、プール全体の喧騒は未だに健在していたが、一定範囲内にいた周囲の人間達は何事かとこちらを凝視している。もちろん、変わったのは周囲の人間達だけではない。碓氷もまた絶句し、小さな少女が耳を塞いで涙を堪えている様をほぼ放心しながら見つめていた。

やがて怪訝に思いつつも周囲の人間達が再び動き始めると、それに連動するかのように碓氷の意識もはつきりとする。

「悪い。半分自暴自棄になってた」

「……いい。辛いのは夕夜も同じだってことはわかってるつもりだから」

淡々と答えるが、視線は逸らしたままだ。場の空気も当然のように悪い。この場に逢瀬が居合わせていたらどれだけ楽だっただろうかと碓氷はふと考えるが、彼女の姿は人ごみのせいで見当たらない。そのせいでしばらく沈黙が続いたが、やがて夕緋が視線を逸らしたまま、

「……その話が必要な時以外禁止。あと、確かにこの能力は憎いけど私は夕夜を恨んだことは一度もない。それだけは信じてほしい」

ゆっくりと、しかし力強い口調。その表情を見れば、この言葉が嘘ではないということは碓氷でも容易に理解することができた。

故に、碓氷は力強く頷く。確かに目の前にいる少女は敵の可能性もあるが、絶対に泣かせてはいけないと直感的に判断したからだ。なぜそう判断したかは碓氷自身もよくわかってはいないが、よく考えてみれば女性を悲しませてはいけないというのは男として当然のことだろう。

「あー、じゃあ話を戻して……どうしてここにいるんだ？」

約束に則り、『パンドラ』の真相について直接関係のない話題へと切り替える。

「……えっと、それは――」

それを察してか、いつも通りの調子で夕緋が話そうとした……その時だった。

「――それは君の『パンドラの箱』の覚醒が近付いているからだよ、碓氷くん♪」

予想しない第三者の声。

しかし、それは二人がよく聞き慣れた声。

即ち、銀色のアクセサリを身に付けた彼は、二人が視線を向けた先に立っていた。

ブーメランパンツの男、揺波煉魅はウォーターライダーの最上部にて仁王立ちをしていた。

係員の人間や長蛇の列に並ぶという苦難を乗り越え、この場所へとたどり着いた一般客達はそんな揺波を見て怪訝な表情を浮かべていたが、今の彼にとってそんなことは関係がない。

列から少し離れた位置でプールを見下ろすようにして立っている彼は、決してウォーターライダーを楽しむにここまで来たわけではない。

彼がここに現れた理由。それはこのプール全体を監視し、動く機

会を窺うためだ。

邪魔にはなっていないが、普通に考えてどう考えてもおかしい彼に誰も話しかけてこないのは、彼が自らの能力を役使して『近寄り難い雰囲気』を作り出しているからだ。能力の使用目的を変更すればこの場から一般人を遠ざけることも可能だったが、そうするのは気が退けたという理由からこの程度に留められたらしい。

そんな彼の視線の先にいるのは、一人の少年。

それは本来常に気にかけておくべき『パンドラ』を所持している少年ではなく、その友人であるツンツン頭の少年。

天月響矢。

「……。」

無表情に、そして無言にその少年が忙しなく行動している様子を観察しつつ、彼は思う。

今日、おそらく自分は死ぬ。

そして直接は口にしていないが、天月はそのことを知っている。でなければあれだけ必死になって行動を起こしたりはしないだろう。

（それもシグナルのシナリオの前では無意味なことになりそうだがな…）

どうやら彼は異能の力を使って救援を呼んでいたようだが、既にシグナルは動いている。ここから形勢を逆転するのは至難の業だろう。

シグナルが危険信号たる所以^{ゆえん}。それは、彼が動いた時点ですべてが変わることにある。

彼が危険信号^{シグナル}を鳴らした時点ですべての流れが変わる。それを可能とするのは、単に彼の能力の強力さだけではない。その能力を活かし、さらには利用できるものの全貌をすべて把握し、それらを利用

駄なく動かすことによって初めて成立する。“天才”という言葉はまさに彼のような人間に使われる言葉なのだろう。

揺波は長い年月を彼と共に行動してきたが、彼のシナリオが狂ったことは指で数えられる程度しかなかった。それも、全てが規格外の圧倒的な何かを持ち合わせていたパターンがほとんどだ。

確かに『パンドラ』という存在はとても大きなものだが、シグナルは今それを掌握するためのシナリオを実行している。つまり、その時点で『パンドラの箱』は完全に“規格外の脅威”ではなくなっ
てしまっているのだ。そして、今考えうる“規格外の脅威”はまる
で存在しない。先日シグナルが襲撃した“規格外の脅威”である『
彼女』も、今回の事件に関与してくることはないだろう。

「王手のようだな」

「ずいぶんあの男を高く買っているじゃないか」

『近寄りがたい雰囲気』を放つ揺波に、突如声が掛けられる。

この声は揺波にとっては規格外のことだったが、彼は動じない。
なぜなら、タイミング・声色・雰囲気を判断材料に、その声の主の
正体を既に認知していたからだ。

「事剛拿護か」

「水着のセンスは素直に称賛できるがその態度だけは気に食わん
な。教育者としての立場から言わせてもらおうとお前はもう少し愛想
良くした方がいい」

「…そういうのを人間は『余計なお世話』と呼んでいるらしい」
「そういうことを言うのが教育者だ」

相変わらず教育熱心なことだ、と揺波は思わず呟くが、事剛拿護
ことゴリ山はそれをあえて無視する。

「やはり気になるようだな」

「…何がだ」

「あの男だよ。ずいぶんと気に入っているようじゃないか」

「シグナルは天才だ。ヤツが動き出したということは『パンドラ』の開封は確定したのも同然だろう。問題はその後はどうするか、だ。だから俺はここですべて」

「そうじゃない」

揺波の言葉を、ゴリ山は強引に遮る。

「俺んこの生徒の方だよ」

「……、」

それだけで、揺波はゴリ山が誰のことを差したのかを一瞬で理解した。

視線を動き出したシグナルから別所へと移す。

そこにいたのは先程まで揺波が視線で追っていたツンツン頭の少年。

「天月のことか」

「ああ、どうやらごひいきにしてもらっているようだな。俺としてはもう少し厳しくやってやってもよかったと思っているのだが…」

「彼は俺の期待以上の仕事をしてくれている。確かにまだまだ未熟だがいずれ俺を超える存在になるだろう」

「だからってお子さんを甘やかすのはいけませんぜ、親御さん」

がつはっは、と陽気な爺さんのように笑うムキムキゴリラのブルーランパンツ。

もちろん天月は揺波の部下のような存在であって子供ではないの

で、今彼が言ったことは冗談になるのだが。

「で、あんたはこれからどうするつもりなんだ？」

「どうする、とは具体的にどういうことだ？」

「そりゃ決まっているだろう。パンドラが開封した後どう行動するか。それを聞いているんだよ」

「∴それをあなたに話す必要性は感じられない。あなたは極めて中立に近い立場にいる。ヘタに刺激して敵に回すよりは常に中立的な関係に置き、真実が明らかになった後に行動してもらった方がこちらとしては都合がいい」

「つれないねえ。今話せば俺は高確率であんたに加勢すると思うんだが？」

「ということは低確率で敵に回る可能性もある。俺は全ての危険性を排除しておくつもりだ。それが――」

「――それがシグナルに教わったこと、か？」

ゴリ山の言葉に、揺波が停止する。

それが示しているのは、的を得ているという証拠。

「長い付き合いだからな。それぐらいわかるよ」

それを可能とした理由を、ゴリ山は遠い目で説明する。

「ま、つまり何が言いたいのかって言うと、お前の考えていることぐらいだいたい理解してるってことだよ」

「それを理解したうえで、あなたは俺に加勢すると？」

「だから最初からそう言っているだろう。俺の考えていることが正しければお前の考えは大体正しいし、俺の目的も達成できるはずだ。それに親友の敵になるのは俺としても避けたことなんだな」

「恩に着る。あと、あなたの考えていることはおそらく正しい。」

俺の考え通りに動けばおそらくあなたの目的も達成できるはずだ」
「その他人行儀っぽい話し方をどうにかできないのかねえ……」

恥ずかしくなったのか、茶化すゴリ山。
だが、彼はすぐに表情を引き締めると、

「行くのか？」

「ああ、どうやら動くようだ」

「ならば同行しよう。久しぶりの共闘ってわけだ」

少しだけ間を空けた後、二人は走り出す。

ウォータースライダーの入り口に向かって、ではない。彼らは助走をつけたあと一気に跳躍し、落下防止用の手すりに足をかけ、そこから一気に大空へと飛んだのだ。

……もちろん、ブルーメランパンツで。

その日、彼らは伝説となった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5435v/>

慟哭の夕緋

2011年12月24日00時52分発行